博士論文（要約）

論文題目　　イバード派イスラーム思想における共同体論の研究

氏　名　　近藤　洋平

目次

【本論】

はじめに……3

第１章　イバード派に関する先行研究……5

1.1　イバード派概観……5

1.2　イバード派の分類……6

1.3　イバード派に関する先行研究の蓄積……8

第２章　イバード派の共同体論の特質を究明するための方法……15

2.1　宗教集合体の特質および宗教集団における教理の形成と展開……16

2.2　イスラーム世界の諸宗派共同体の特質に関する先行研究……22

2.3　イバード派の共同体論の特質に関する先行研究……24

2.4　本研究の着眼点……27

2.5　資料と対象……33

第３章　ワラーヤ，バラーア，ウクーフの意味内容……37

3.1　ワラーヤ，バラーアの言語的意味，イスラーム法上の意味……37

3.2　クルアーン，ハディースにおけるワラーヤとバラーア……40

3.3　まとめ：ムハンマドと教友時代におけるワラーヤとバラーアの実践……48

第４章　ワラーヤ，バラーア，ウクーフの規則の形成と展開……51

4.1　三原則の確立とその運用……51

4.2　ワラーヤとバラーア，ウクーフのための諸規定の整備……62

4.3　ワラーヤとバラーア，ウクーフの規則の体系化……72

4.4　まとめ：イバード派における規則の形成と展開……87

第５章　イバード派の世界観……89

5.1　神と人間……89

5.2　イバード派における人間の宗教的分類とその方法……109

5.3　圏域の概念とその分類，その利用……121

5.4　まとめ：イバード派の世界観……129

第６章　イバード派の自己理解と他者理解……131

6.1　信仰（īmān）と信仰者（mu’min）……132

6.2　イバード派の自己理解……143

6.3　不信仰：イバード派の他者理解……152

6.4　まとめ：イバード派の自己理解と他者理解……172

第７章　イバード派共同体への加入とコミットメント……175

7.1　イスラーム共同体への加入……176

7.2　改宗活動とイバード派共同体への加入……182

7.3　共同体へのコミットメント……196

7.4　信仰と帰属の再生産：子どもとマジュヌーンの信仰とワラーヤ……213

7.5　まとめ：イバード派における入信とコミットメントの議論……221

第８章　逸脱への対応……225

8.1　逸脱行為の探求……228

8.2　大罪……235

8.3　罪に関するいくつかの問題……244

8.4　悔悟……253

8.5　まとめ：イバード派における逸脱への対応……261

第９章　イバード派共同体の統治体制……263

9.1　共同体内のヒエラルキー……264

9.2　イバード派のイマーム論……274

9.3　まとめ：イバード派の統治体制……305

第 10 章　イバード派の共同体論：まとめと考察……309

10.1　本研究のまとめ……309

10.2　本研究の考察：イバード派共同体の特質……315

10.3　今後の展望：イバード派研究の蓄積と深化のために……319

謝辞……320

【補論】

補論 A　イバード派の学統……323

A.1　バスラの指導者たち……323

A.2　2/8 世紀に活動した主な人物……337

A.3　3/9 世紀のオマーンのイバード派の人物……343

A.4　4/10 世紀以降の主な人物とその著作……348

補論 B　イバード派の資料について……353

B.1　イバード派『書簡集』の形成過程……355

B.2　2-3/8-9 世紀の著作物の真正性・信頼性……368

B.3　オマーンのイバード派の『集成』……419

参考文献一覧……425

図表

中東の地形図……ix

オマーンの地形図……x

イバード派の学統（一部）……xi

3/9 世紀までのオマーンのイバード派政権のイマーム……xii

補論 B　イバード派『書簡集』について

表（1）　『書簡集』における書簡の配列　421

表（2）　『啓示法の解明』中に引用される書簡の例　423

本文

本文のうち，補論 B を除く部分は，出版契約がされているため，全文公表はできない。当該出版本の書誌情報は，下記の通りである。

記

著者名：近藤洋平

題名：正直の徒のイスラーム

出版社：晃洋書房

出版年：2021 年

ISBN：9784771034730

以上

以下，補論 B を公表する。

補論 B　イバード派の資料について

イバード派社会を中心として，中東・北アフリカのイスラーム世界には，イスラーム思想の形成期であるヒジュラ暦 2 世紀から 4 世紀（西暦 8 世紀から 10 世紀）にかけて活動した，イバード派の人物に帰される資料が数多く残されている。それらの資料のなかには，研究者によって校訂，出版され，詳細な考察が加えられた著作もあれば，写本の状態で保存され，未だに手つかずにあるあるいは十分な利用がなされていないものもある。これらの資料が，信頼に足るものであるのなら，これらは第一級の資料となる。現存する写本は，その伝承の過程でいくらかの加筆や修正を受けたと考えることが自然ではあるが，それでは本研究で用いる諸著作の原型は，果たして本当に帰されている時代そして人物によって執筆されたものなのだろうか。

イバード派の著作物に限らず，預言者ムハンマド，あるいは初期時代に関するムスリムの伝承，そして初期時代に著されたとされる著作物は，歴史的に信頼できるものなのか，そしてどの程度信頼できるかについては，初期イスラーム思想史の研究者の多くが関心を寄せてきた課題である[1]。初期時代の著作や伝承の真正性を扱った研究，またそうした先行研究については，[Hallaq 1988]や[Motzki, 2003]，[Shoemaker 2011]そして[柳橋 2012]などが論じ，まとめている。著作や伝承ごとに様々であるが，こうした初期時代の資料に対する研究者たちの立場を大きくまとめると，ムスリム研究者の多くが，初期時代に関する資料の真正性・信頼性を支持する一方，非ムスリム研究者あるいは欧米諸国で活動する研究者は，真正性や信頼性を支持する立場，修正を加えて部分的に支持する立場，そして懐疑的あるいは否定的な立場に分かれる。そして彼らは，真正性や信頼性を吟味するための，様々な着眼点や方法論を提示する。

一部の研究者は，イバード派に伝わる，初期の時代に活動した人物に帰される諸著作の真正性・信頼性についても目を向けた。その代表的な例として，ウマイヤ朝カリフ，アブドゥルマリク・イブン・マルワーン（‘Abd al-Malik b. Marwān, r. 65-86/685-705）に宛てられた，イバード派の名祖イブン・イバード（‘Abd Allāh b. Ibāḍ）に帰される書簡，彼に帰

[1] 真正性の問題は，初期時代のあらゆる資料に向けられている。例えばワンズブロー[Wansbrough 1977(2003)]は，クルアーンの成立はヒジュラ暦 3 世紀であるとする，ムスリムたちの伝統的理解を否定する説を提示した。また最近では，長らく初期イスラーム時代における政治および宗教思想についての基礎的文献と評価されてきた，ハサン・バスリーの書簡について，その真正性と作者への帰属を否定する立場を支持する詳細な研究[Mourad 2006]も発表されている。

されるもう 1 つの書簡，そしてサーリム・イブン・ザクワーンに帰される書簡が挙げられる。カリフへのイブン・イバードの書簡について，ザハウ[Sachau 1899]は，イブン・イバードに帰されるもう 1 つの書簡とともに，その真正性を支持する立場をとる。またルビナッチ[Rubinacci 1953]は，書簡中で語られるハワーリジュ派の反乱を，ヒジュラ暦 76 年の出来事であるとし，同書簡がこの時期以降，このカリフの在位時に作成されたものであるとする。一方クック[Cook 1983]は，彼以前の先行研究が，書簡の真正性を無批判に受け入れ，それを前提としていることを問題視し，イブン・イバードの書簡に詳細な資料批判を施した。そして同書簡は，ジャービル・イブン・ザイドがアブドゥルマリク・イブン・ムハッラブ（‘Abd al-Malik b. al-Muhallab）に宛てた書簡をもとにしたものであり，またその作成時期はヒジュラ暦 2 世紀半ばより遅くはないとする仮説を提示した[2]。

またイブン・イバードに帰されるもう 1 つの書簡は，12/18 世紀の学者スィルハーン・イズカウィー（Sirḥān b. ‘Umar b. Sa‘īd al-Izkawī, d. after 1140/1728）によって執筆された『共同体の話を集めた苦悩の開示』（*Kashf al-Ghumma al-Jāmi‘ li-Akhbār al-Umma*）中に採録される。同著作の作成時期についても，クックは，ヒジュラ暦 2 世紀半ばより遅くはないと論じる。一方マーデルンクは，補論 A でみたように，イブン・イバードは西暦 8 世紀第 3 四半世紀のアッバース朝カリフ，マンスール（Abū Ja‘far al-Manṣūr, r. 136-158/754-775）の時代に存命していたという立場から，同著作を彼に帰すことは，年代的には問題ないとする[3]。そしてサーリム・イブン・ザクワーンの書簡について言えば，クックはサーリム・イブン・ザクワーンの書簡の成立年代を 72/691 年頃とする[4]一方，クローネとツィンマーマンは同著作の原型が，134/751 年から 177/793 年の間に作成されたと結論付けた[5]。

このように研究者は，書簡の成立年代について様々な説を提示するが，彼らの研究は，著作の原型はヒジュラ暦 2 世紀中には形成された，という点で共通する。すなわち彼らは，

---

[2] [Cook 1983, 67] クックは，現存するジャービル・イブン・ザイドの書簡を実際に手にすることなく，同仮説を提示した。クックが言及した書簡には，イブン・イバードの書簡とは全く異なる内容が論じられており，アブドゥルマリク・イブン・ムハッラブへの別の書簡の存在を考えること以外に，クックの仮説を支持することは難しい。このほかウィルキンソン[Wilkinson 2010, 203-204]は，同書簡を，イバード派に属した好戦的な人物が，後のウマル 2 世（‘Umar b. ‘Abd al-‘Azīz, r. 99-101/717-720）の息子アブドゥルマリク（‘Abd al-Malik b. ‘Umar b. ‘Abd al-‘Azīz）に宛てたものとの仮説を提示する。ウィルキンソンはその理由として，イバード派とウマル 2 世が良好な関係であったこと，イバード派はウマル 2 世の息子アブドゥルマリクを次代カリフと目論み，接近を試みていたことを挙げる。

[3] [Madelung 2006][Madelung 2011]

[4] [Cook 1981, 20]

[5] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 299]

それらの著作がより後の時代に偽造されたとの立場にはない。

一方上記以外の，初期の時代の人物に帰される諸著作について，それらに資料批判を加えた研究は部分的であり，不十分な状態である。オマーンのイバード派に伝わる書簡（sīra）を網羅的に紹介する[al-Salmi 2009][al-Salmi 2010]は，著作名と帰されている人物，またその内容を簡潔に紹介するにとどまり，各著作の真正性については自らの見解を示していないようにみえる。そしてジャービル・イブン・ザイドやアブー・ウバイダら，2/8 世紀に活動した人物に帰される著作について，それらを使用する研究者は，書簡に十分な批評を加えることなく，真正なものとして使用する。例えばウィルキンソンは，ジャービル・イブン・ザイドに帰される法学的内容を扱った諸書簡を，「いささかおおざっぱな調査」（somewhat cursory study）に従って，ヒジュラ暦 70 年から 90 年に書かれた真正なものであると評価する[6]。同様にウィルキンソンやウハイビー[al-Wahaybī 2006]は，2/8 世紀に活動した人物に帰される著作を，その真正性に言及することなく用いる。そして 3/9 世紀以降に活動したイバード派の人物の著作は，その人物によるものとして扱われているようにみえる。クローネとツィンマーマンは，サーリム・イブン・ザクワーンの書簡の成立年代を確定するための比較資料として，同時代の他の資料とともに，3/9 世紀以降に執筆されたイバード派の著作を利用する。

先行研究が諸著作を真正なものとして扱っていることのみを理由として，これらの著作を用いて筆を進めることには問題があるだろう。たとえ初期イバード派の人物に帰されるこれらの資料は信頼に足るものである，という同じ結論になるとしても，各資料についてある程度詳しく吟味する必要がある。本補論では，本研究で使用した，主として 2/8 世紀から 3/9 世紀に活動した人物に帰される著作の真正性・信頼性について考察する。

B.1　イバード派『書簡集』の形成過程

B.1.1　イバード派共同体における「書くこと」および「書かれたもの」

後代のイバード派の資料などをもとにすれば，2/8 世紀から 3/9 世紀のイバード派共同体には，必ずしもすべての構成員が関わったわけではないだろうが，書くということとともに，書かれたものを筆写すること，そして書かれたものから学び，それらを大切に扱うという習慣があったことがわかる。6/12 世紀の北アフリカの学者ウィスヤーニー（Abū al-Rabī‘ Sulaymān b. ‘Abd al-Salām al-Wisyānī）は，ジャービル・イブン・ザイドの『ディー

[6] [Wilkinson 2010, xxxiv]

ワーン』（*al-Dīwān*）が，アブー・ウバイダから順に，ラビーウ・イブン・ハビーブ，マフブーブ・イブン・ラヒール，そして彼の息子ムハンマド・イブン・ラヒールへと伝えられたと報告する[7]。また書かれたものを写すという行為については，ラビーウ・イブン・ハビーブら連名の書簡の冒頭に記された，その書簡執筆の経緯[8]，マフブーブ・イブン・ラヒールがムハンマド・イブン・ハーシム・イブン・ガイラーン（Muḥammad b. Hāshim b. Ghaylān al-Sayjānī）に対し，「定命」についてのイバード派の見解を記した書を筆写する（nasakha）よう命じたこと[9]，さらにサイード・イブン・ムフリズ（Abū Ja‘far Sa‘īd b. Makhriz）による，アブー・マウドゥードから本を筆写した（nasakha min ‘inda Abī Mawdūd kitāb[an]）という証言[10]からその実践を窺い知ることができる。そしてこれらとあわせて，ルスタム朝のイマーム，アブドゥルワッハーブ・イブン・アブドゥルラフマーン（‘Abd al-Wahhāb b. ‘Abd al-Raḥmān, r. 168-217/784-832）による図書購入依頼に対し，バスラのイバード派がとった行動[11]は，書かれたものの保存，そして書かれたものによる知識および記録の伝承が，イバード派内で行われていたことを示す証拠である。また書から学ぶ，という態度については，ルスタム朝イマーム，アフラフ・イブン・アブドゥルワッハーブ（Aflaḥ b. ‘Abd al-Wahhāb, r. 217-258/832-872）がイバード派信徒に対して述べた「あなたがたは宣教の徒（ahl al-da‘wa，すなわちイバード派）の諸著作（kutub），その中でも特に『アブー・スフヤーンの書』を学ばなければならない」という言葉がそれを明瞭に表現している[12]。

これらはすべて，2/8 世紀から 3/9 世紀のイバード派共同体では，書かれたものが作成され，そして口述による伝承とともに，書物によっても知識の伝承が行われていたことを示

---

[7] al-Wisyānī, *Siyar al-Wisyānī*, II, 692. イバード派の歴史書では，『ディーワーン』とは本のコレクションを意味するとされる[Custers 2006, I, 78]。

[8] al-Rabī‘ al-Ḥabīb, Mukhlad b. al-‘Umurrud wa Wā’il b. Ayyūb, *al-Risāla al-Ḥujja*, 54-58. 書簡の序文には，書簡はマッカで作成されたこと，マフラド・イブン・ウムッルド（Abū Ghassān Makhrad b. al-‘Umurrud）がアブドゥルラフマーン・イブン・ムハンマド（Abū Muḥammad ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad b. Maslama）に，後世のムスリムたちの明証となるように，当該書簡を筆写（naskh）するよう命じたことが記される。

[9] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, II, 96.

[10] Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 273. その活動期間を考えると，「アブー・マウドゥード」はバスラでアブー・ウバイダと行動を共にしたハージブではなく，オマーンのイマーム，ガッサーン・イブン・アブドゥッラーに忠告の書簡をしたためた，ハビーブ・イブン・ハフス（Abū Mawdūd Ḥabīb b. Ḥafṣ al-Ṭā’ī, d. after 192/808）と考えることがふさわしい。

[11] アブドゥルワッハーブは，1,000 ディーナールをバスラのイバード派に送り，それで自分のために書を買うよう求めた。バスラのイバード派が資金を受け取ると，彼らはそれで羊皮紙を買い，羊皮紙に 14 冊分の分量を筆写し（ishtarū bi-hā raqq[an] fa-nasakhū la-hu fī-hā wafr arba‘īna jumal kitāb[an]），そしてマグリブへ送った。al-Shammākhī, *Kitāb al-Siyar*, I, 142.

[12] al-Wisyānī, *Siyar al-Wisyānī*, I, 511; al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā’ikh bil-Maghrib*, II, 290; [Ṭalibī (ed.) 1978, II, 284]

す証拠である[13]。

B.1.2　イバード派の『書簡集』

B.1.2.1　Sīra について

オマーンのイバード派に伝わる『書簡集』（*al-Siyar*）に採録される諸著作は，2-3/8-9 世紀のイバード派の動向と思想に関して，我々に重要な情報を提供する可能性を持つものである。Sīra の語について，イバード派研究者による『イバード派用語辞典』は，sīra は言語上，慣習（sunna）や作法（ṭarīqa），また習慣（‘āda）や態度（hay’a）を意味するが，東方イバード派（al-Mushāraqa）では政治的，神学的そして法学的性格を有する書簡（risāla）を表す語として用いられると説明する[14]。クローネとツィンマーマンは，教説的内容を含むオマーンの書簡の多くは，説教師がモスクで信徒に口頭で伝えるように作成された「説教壇のマニフェスト」であり，書簡のはじめに記された説教はその「生活の座」（Sitz im Leben）[15]を示していること，またオマーンの sīra には，ウマイヤ朝後期にその事例がみられる「教義的立場」や「見地」といった意味が含まれていると論じる[16]。アブー・アブドゥッラー・キンディーの『啓示法の解明』（*Bayān al-Shar‘*）では，『イブン・ジャアファルの集成』からの引用として，各時代のイバード派ムスリム（al-Muslimūn）は，sīra を作成し（ja‘ala），それを「イスラームの系譜」（nasab al-Islām）さらに「ムスリムたちの教え」（dīn al-Muslimīn）と名付け，その時代とその場所（miṣr）の人びとをそれによって治

---

[13] 口述伝承の例としては，ムハンマド・イブン・ラウフの口述（imlā’）が挙げられる。Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 85; al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 14.

[14] Majmū’a min al-Bāḥithīn. *Mu’jam Muṣṭalaḥāt al-Ibāḍiyya*, I, 520-522. また同項目の執筆者は，各書簡の作者の同時代あるいはそれ以前の諸問題，特にワラーヤとバラーアの問題を記録しており，オマーンの歴史に関する第一級の資料であること，いくつかは写本の状態であり，詳細な研究が待たれていることを解説する。

sīra は，イブン・ヒシャーム（Ibn Hishām, d. 213 or 218/828 or 834）の『預言者伝』（*al-Sīra al-Nabawiyya*）のように，「伝記」とも訳されうる。マグリブのイバード派のシャンマーヒーの著作 *Kitāb al-Siyar* は，イバード派の「伝記集」として訳されよう。オマーンのイバード派で，sīra の語が「伝記」の意味で用いられるのは，10/16 世紀のイブン・マッダードの著作である。またシャイバーニー（Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. al-Ḥasan al-Shaybānī, d. 189/805）の『大スィヤル』（*al-Siyar al-Kabīr*）や『小スィヤル』（*al-Siyar al-Saghīr*）は，戦争法，国際法に関する著作である。

[15] 「生活の座」とは，元来旧約聖書研究において H. グンケルが用いた方法論に関する用語である。グンケルはモーセ五書について，書に含まれているさまざまな材料は，もともと口伝伝承として存在し，またひとつづきの歴史の一部として現在のような形に整理される以前には，「独自に，個々の場所や習慣に結びつけられていた段階」があり，材料に保存されている諸相を理解するためには，そうした本来の「生活の座」を正しく理解する必要があると主張した[クレメンツ 1978, 28]。

[16] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 23]

めたと解説されるが，ここでの sīra は，『イバード派用語辞典』で説明される言語的意味から，またクローネとツィンマーマンの説明の両方から理解されよう[17]。

そしてオマーンのイバード派に伝わる『書簡集』は，書簡のみを採録したものではない。採録されたものには，書簡（risāla/sīra）のほか，法的回答（jawāb），また書（kitāb）さらには注解（ta‘līq）といった標題が付されている。

B.1.2.2 『書簡集』についての先行研究

この『書簡集』の編纂時期について，現代の研究者は様々な見解を提示する。『オマーンの指導者および学者たちの諸書簡と回答』（*al-Siyar wa al-Jawābāt li-‘Ulamā’ wa A’imma ‘Umān*）の前書きで，校訂者のサイイダ・カーシフは，同著作が，1 つの写本の中で，アブー・バクル・キンディー（Abū Bakr Aḥmad b. ‘Abd Allāh al-Kindī, d. 557/1162）の『分割されない実体の書』（*Kitāb al-Jawhar al-Muqtaṣir*）と『導きの書』（*Kitāb al-Ihtidā’*）に続いて筆写されていることを理由として，同著作はアブー・バクル・キンディーによって編纂されたものであると論じた[18]。アブドゥルラフマーン・サーリミーは，書簡を収集した最初の人物はアブー・ハサン・ビスヤウィーであるとするサーリム・ハーリスィー（Sālim al-Ḥārithī, d. 1427/2006）の見解を紹介する[19]。同じくカスタースも『書簡集』は 4/10 世紀のビスヤウィーによって編纂され，自らの著作もそこに加えたとするナースィル・サービイー（Nāsir al-Sābi’ī）の説を紹介する[20]。さらにアブドゥルラフマーン・サーリミーは，時期尚早の結論であるとしつつも，3-4/9-10 世紀の学者アブー・ハワーリー（Abū al-Ḥawārī Muḥammad b. al-Ḥawārī al-Ḥawārī）によってサルト・イブン・ハミースの書簡が考察されることから，理論的には 4/10 世紀の初めに彼がそれらを集め始めたという可能性を提示する[21]。そして別の箇所では，オマーンの『書簡集』は，11/17 世紀になるまで，今ある単体の

[17] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 133. この宗教上の生活様式は，時代に応じて変化すると説明される。
[18] SIYAR, I, 7-9.
[19] [al-Salimi 2010, 119] 筆者はサーリミーが注で示したハーリスィーの著作を確認したが，残念ながらそのような主張は見当たらなかった。
[20] [Custers 2006, I, 59] 筆者はカスタースが言及する，ウェブサイトを検索したが，当該 web ページは，2012 年 5 月現在削除されている。
[21] [al-Salimi 2010, 119] なおサーリミーが示した箇所は，アブー・ハワーリーの書簡ではなく，ハーリド・イブン・カフターン（Abū Qaḥṭān Khālid b. Qaḥṭān al-Hajjārī）の書簡中である。SIYAR, I, 144. ハーリド・イブン・カフターンは，オマーン湾沿岸のバーティナ地方に位置するワディー・バニー・ハルース（Wadī Banī Kharūṣ）のハッジャール村出身とされる。生没年など，詳しい経歴はわからない。イブン・マッダードは，彼がムハンマド・イブン・マフブーブの 2 人の息子のもとで学んだことを報告する。MakS, 574; MakKh2, 271a.

著作としての『書簡集』の編纂あるいは丁合はなかったこと，また書簡の収集は様々な時代に行われたことを主張する[22]。

B.1.2.3　本研究で用いる『書簡集』

カスタース[Custers 2006]は，イバード派の関係する文献を調査し，それらを「マシュリクのイバード派」「マグリブのイバード派（エジプトを含む）」「二次資料」の 3 巻に分けて出版した。このうち「マシュリクのイバード派」の巻には，『書簡集』の書誌情報が掲載される。彼によって紹介された計 10 件の写本および刊本のうち，筆者の手元には，カーシフによって校訂された刊本および 4 点の写本のコピーがある。

①SIYAR＝サイイダ・カーシフ校訂刊本『オマーンの指導者と学者たちの諸書簡と回答』（*al-Siyar wa al-Jawābāt li-'Ulamā' wa A'imma 'Umān*, ed. S. Kāshif, 2 vols.）

校訂には，オマーン国の国家遺産文化省（現在の遺産文化省）所蔵の写本が使用されている。最後に収録された著作には，ヒジュラ暦 1009 年ジュマーダー月 7 日火曜日の夜（西暦 1600 年 11 月 14 日）筆写完了の記載がある[23]。2/8 世紀後半から 6/12 世紀までの 34 著作が収められている。

②MakS＝サーリミー家所蔵写本『書簡集』（*al-Siyar*, Ms. Maktaba al-Sālimī）

本写本は, 西暦 19 世紀から 20 世紀にかけて活動したヌールッディーン・サーリミー（Nūr al-Dīn 'Abd Allāh b. Ḥumayd al-Sālimī, d. 1332/1914）が収集・使用したコレクションに含まれ，所蔵する図書館はオマーンのシャルキーヤ地方ビッディーヤ（Biddiyya）に位置する。サーリミーは，バーティナ地方ルスターク（al-Rustāq）から当地へ移住し，周辺地域のムフティーとして活動した。また歴史書やハディース注釈書など, 精力的に執筆活動を行い，同時代のイバード派知識人はもちろんのこと，現代のイバード派知識人にも多大な影響を

3/9 世紀の『集成』の作者であるイブン・ジャアファルの息子への書簡が残されており，またビスヤウィーがハーリド・イブン・カフターンに言及していることから，彼は 3-4/9-10 世紀に活動したと考えられる。SIYAR, II, 105.

現存が確認されるハーリド・イブン・カフターンの著作のうちの 1 つは，イスラーム初期から彼の時代までの歴史を扱っており，アブー・バクルの時代におけるディバーの人びとの棄教，またアリーのもとから出て行った集団の動向，オマーンのイバード派イマーム政権の分裂などを詳述する。

[22] [al-Salimi 2010, 121]

[23] SIYAR, I, 18.

与えている。

本写本は 653 ページ，預言者ムハンマドがしたためさせたと伝わる書簡から，10/16 世紀の学者の著作まで全 81 著作を収めている。ナスヒー体で筆写されており，筆写完了の日付はヒジュラ暦 1120 年（西暦 1708 年）である。

③MakSQ＝オマーン国国家遺産文化省（現遺産文化省）所蔵写本『イバード派書簡集』の電子複写版（*Siyar al-Ibāḍiyya*, Ms. Ministry of National Heritage and Culture, no. 543）

オマーン国のスルタン・カブース大学付属オマーン文化研究センターが所蔵し，一般公開されている「『イバード派書簡集』の電子複写版」の標題および著作の配列は，カスターース[Custers 2006, I, 61-62]が報告するオマーン国国家遺産文化省（現遺産文化省）所蔵写本『イバード派書簡集』のそれと全く同じである。カスタースは，オマーン国遺産文化省には，ブー・サイーディー図書館所蔵のものと同じ『イバード派書簡集』があると報告する[24]。電子複写には書誌情報が記されていないが，標題から判断して，また同大学は，国内唯一の国立大学であり，その整備には国家が大きく関与していることが考えられることから，同電子複写版は遺産文化省の写本から複写されたものであると考えることができる。

電子複写版の表紙には，「1173 年ズー・カアダ月 3 日の夜（西暦 1760 年 6 月 16 日）筆写完了」の記載がある。同電子複写版『書簡集』は，全 2 巻のものを 1 つにまとめたものであり，採録された書簡の配列は，内陸部ニズワーの名家サイフィー家に所蔵される一巻本の『イバード派書簡集』のそれと同一である。サイフィー家が所蔵する書簡集には，ヒジュラ暦 1141 年（西暦 1728 年）筆写完了の記述がある[25]。そのため同電子複写のオリジナルは，サイフィー家所蔵の写本からとられた，あるいは共通の写本からとられた可能性が高い。本文はナスヒー体で書かれている。

④MakKh1＝ハルースィー家所蔵写本『ムスリムたちの諸書簡』（*Siyar al-Muslimīn*, Ms. Maktaba Nāṣir b. Rāshid al-Kharūṣī）

ハルースィー家（Āl Kharūṣī）は，オマーンのイバード派の歴史において，何人ものイマームを輩出してきた家系として有名である。本写本が所蔵されているコレクションの名に冠されたナースィル・イブン・ラーシドは，前世紀前半に活動した法学者で，先述のヌー

[24] [Custers 2008, I, 68]
[25] [Crone and Zimmermann (ed. and. tr.) 2001, 7]

ルッディーン・サーリミーのもとで学んでいる。また彼は，実兄であり，西暦 20 世紀前半にオマーンの内陸に樹立されたイマーム国のイマーム，サーリム・イブン・ムハンマド（Sālim b. Muḥammad al-Kharūṣī, r. 1913-1920）と，その次代でありかつオマーンにおける最後のイマームであるムハンマド・イブン・アブドゥッラー・ハリーリー（Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Khalīlī, r. 1920-1954）に仕えた。

その奥付から，本写本はヒジュラ暦 1170（西暦 1757）年までにまとめられたことがわかる。各書簡は同一人物の筆跡によりナスヒー体で筆写されており，384 ページの中に，計 60 点の書簡が収録されている[26]。

⑤MakKh2＝ハリーリー家所蔵写本『書簡集』（*al-Siyar*, Ms. Maktaba al-Khalīlī）

筆者は同写本の電子版を，オマーン人研究者アブドゥルラフマーン・サーリミー博士から入手したが，残念ながら同写本の所蔵元がどのハリーリー家であるかを特定することができなかった[27]。同写本の最後に収録された著作は，ヒジュラ暦 1131 年サファル月 29 日（西暦 1719 年 1 月 21 日）に筆写されたことを我々に伝えている。各書簡は同一人物の筆跡により，ナスヒー体で書写されている。また目次部分には，1332 年ジュマーダー・アーヒラ月からラジャブ月（1914 年 4-7 月）にかけて，ユースフ・イブン・ムハンマド・バールーニー（Yūsuf b. Muḥammad al-Bārūn）が，知識のある者（min ahl al-idrāk）に，本文中の写字の間違い（taḥrīf）を修正するよう求めたことが記載される。バールーニー家は，リビアを中心に活動したイバード派の名家である。

なお本研究では，重複する著作についてはカーシフ校訂本（SIYAR）を第一に用いた。

B.1.2.4　所在が確認されている『書簡集』の写本

一方カスタースが言及し，筆者の手元にない『書簡集』の写本は以下の通りである。

⑥Lwów = *al-Siyar al-‘Umāniyya*, a MS in the library of the University of Lwów (no. 1082).

⑦SUIM = *Siyar al-‘Ulamā’al-Ibāḍiyya al-Maḥbūbiyyīn*, 3 vols. in the Ministry of National

[26] サーリミー博士によれば，同写本は現在，マスカット行政区スィーブ（al-Sīb）県に位置するブーサイーディー図書館（Maktaba al-Būsa‘īdī）に保管されている。
[27] ④で言及したイマーム，ムハンマド・ハリーリーの可能性もあるが，現在のオマーンのグランド・ムフティー，アフマド・ハリーリー（Aḥmad al-Khalīlī）の所蔵であるようにみえる。

Heritage and Culture (no. 3557-3559), date of copying 1299/1881.

⑧Damman = *al-Siyar wa al-Jawābāt*, a MS in the library of the former Imam Ghālib b. ‘Alī, al-Hinā’ī (d. 2009) in Damman, Saudi Arabia.

⑨SM = *Siyar Majmū‘a*, a MS in Maktaba al-Būsa‘īdī (no. 2110), date of copying 1183/1769-70, some *Siyar* are copied 1181/1767-8.

⑩Sayfi = *Siyar al-Ibāḍiyya*, a MS in the private collection of Aḥmad b. Nāṣir al-Sayfī（上記③を参照のこと）.

⑪Hinds = a Xerox of a MS Ennami passed to Martin Hinds, now in the Cambridge University Library microfilm Or. 1402.

B.1.3　書簡の収集と『書簡集』の編纂過程：『書簡集』の配列から

B.1.3.1　『書簡集』の型

ハサン・バスリーの書簡「カダル派反駁に関するアブドゥルマリクへの書簡」への資料批判において，ムラードはその書簡が採録された写本中のどこに収められているか，という配列に着目した[28]。現存する各『書簡集』の写本に，どのような書簡が，どのように採録されているかを調べることは，オマーンの『書簡集』の成り立ちを明らかにするために有益であるようにみえる。

本補論末の表（1）（421-422 ページ）は，上記カスタースの研究調査[29]に基づき，所在が知られている『書簡集』中の書簡の配列を，『書簡集』ごとに記録したものである。そして『書簡集』の構成を『書簡集』間で比較し，著作の配列順などの『書簡集』間で共通する部分を一まとまりにして便宜的に色分けした。

この分類に基づけば，現在所在が知られている『書簡集』は，その構成から大きく 4 つの型に分類することができる。そのうちの 1 つ目の型には，3 つの家族（MakKh2，Lwow，SUIM）が含まれる。この型の特徴として，3/9 世紀（一部は 2/8 世紀）から 6/12 世紀まで

[28] [Mourad 2006, 181-183]

[29] [Custers 2006, I, 59-72] カスタースは目録を作成するにあたって，アブドゥルラフマーン・サーリミーやムスリム・ウハイビー（Muslim al-Wuhaybī）の研究を利用したとする。筆者は，ウハイビー[al-Wuhaybī, 2003]の研究を未見だが，カスタースの説明によれば，同研究では書簡がビスヤウィーによって収集されたことが記されており[Custers, 2006, I, 59]，また 5 つの『書簡集』に採録された書簡の一覧が提示されているようである[Custers, 2006, III, 343]。以下本補論で示す 10 点の『書簡集』の写本および校訂本の配列上の特徴，および『書簡集』の形成過程について，ウハイビーは言及していないようにみえる。

の期間に活動したイバード派の人物に帰される書簡を多く採録することが挙げられる。そして 10/16 世紀のイブン・マッダード（Ibn Maddād）の書簡が最も時代を下るものであり，最終的にこの時代以降に，今に伝わる『書簡集』が整えられたと考えることができる。また採録されていない書簡があるなど，細かい部分での相違から，これらの 3 つの『書簡集』は，「預言者の書簡」を冒頭に収めた，より大きな『書簡集』から写字生によって抜粋された，あるいは共通の『書簡集』から写字生による追加・削除を経て成立したという可能性を指摘できる。

同様に 2 番目の型の家族（MakS，Damman，SM）は，黄色の部分の位置が異なるものの，水色から桃色のブロックの配列に共通点がみられる。1 番目の型にみられる書簡を含みつつも，その配列順は 1 番目のそれとは異なっている。さらにサーリム・イブン・ザクワーンの書簡やハラフ・イブン・ズィヤードの書簡のように，2/8 世紀に活動したと伝えられる人物に帰される書簡も採録される。採録された書簡は，6/12 世紀までに活動した人物にによるものがほとんどである（写本 SM は，『書簡集』の後に，さらに 11/17 世紀に活動した人物の書簡が追加される）。配列こそ違え，この型は 1 番目の型と近い関係にあることが指摘できよう。

刊本の『書簡集』は最初の型に属するようにも見えるが，赤色と橙色の逆転，また黄色の部分に引き続く部分に関して，最初に紹介した型と異なっている。さらに上述したように，カーシフによれば，サルト・イブン・ハミースの書簡から始まる刊本の『書簡集』は，『導きの書』に引き続く形で 1 つの写本に収録されているという。そしてカーシフによって校訂・出版された『導きの書と使徒，オマーンの指導者たちおよび学者たちの書簡からの抜粋』（*Kitāb al-Ihtidāʾ wa al-Muntakhab min Siyar al-Rasūl wa Aʾimma wa ʿUlamāʾ ʿUmān*）の最後は，「アラー・イブン・ハドラミーへの預言者の書簡」（*Sīra al-Nabī kataba-hā lil-ʿAlāʾ b. al-Ḥaḍramī*）である。カーシフによれば，「使徒，オマーンの指導者たちおよび学者たちの書簡からの抜粋」の部分は『導きの書』の第 2 部として『導きの書』に続いて写本に採録されている[30]。これらのことを踏まえると，刊本はこの 2 番目の型により近いと考えることができる。

3 番目の型に含まれる家族（Hinds，MakKh1）は，前の 2 つの型と同じように，一部で入れ替わりがみられるものの，書簡の配列に共通点がみられる。そしてアブー・ウバイダ

[30] Abū Bakr al-Kindī, *Kitāb al-Ihtidāʾ wa al-Muntakhab min Siyar al-Rasūl wa Aʾimma wa ʿUlamāʾ ʿUmān*, 12.

やアブー・マウドゥードの書簡など，2/8 世紀から 3/9 世紀前半にかけて活動した人物の書簡を多く採録するという特徴を持つ。またその冒頭ではワラーヤとバラーアに関する断片的な内容が続いており，編者がイバード派における同分野に関わる書簡の収集を目的として，この型の『書簡集』を編纂した可能性が高い。

これに対し 4 番目の型の家族（MakSQ，SUI）では，そのほとんどの書簡が，その帰されている人物が活動したと伝えられる時代順に並べられており，この点でそれまでの 3 つの型とは大きく異なっている。預言者ムハンマドの書簡に始まり，バスラのイバード派の人物に帰される諸著作，そして 10/16 世紀の学者イブン・マッダードまでの書簡を集めるこの型は，前述した 3 つの型が示す不自然な配列に比べると，より整然とした印象を与える。この型は最も早く形成されたと考えるよりも，編者が生きた時代に存在した『書簡集』を組み直して作成されたと考えることがふさわしいだろう。

サーリム・イブン・ザクワーンの書簡の校訂にあたって，クローネとツィンマーマンは，MakS，SUI，Hinds に収められた書簡を調べ，各書簡集に収められたサーリム・イブン・ザクワーンの書簡は，同一の原型から，別々に派生したものであると結論付けている。この結論は，筆者の行ったこの分類に一致する。各型に含まれる同一の書簡を比較することにより，この 4 つの類型化の正しさ，そして現在伝えられている『書簡集』の更なる細分化が可能となるだろう。

B.1.3.2 『書簡集』の編纂

次に色分けした各ブロックの構成に目を向けると，書簡の収集と『書簡集』の編纂の過程についての有益な情報を得ることができる。例えば，赤色のブロックと橙色のブロックは，もともと別々にまとめられており，2 つのブロックを 1 つにまとめるさい，2 通りの組み合わせが発生したことを示している。また黄色のブロック内では，2-3/8-9 世紀に活動したハーシム・イブン・ガイラーンの書簡に，5/11 世紀のアウタビーの著作が続く。黄色のブロックにはこのほか 4/10 世紀の学者ビスヤウィーの著作，またバスラのイバード派の指導者，ワーイル・イブン・アイユーブに帰される書簡などが含まれる。この黄色のブロック内の更なる細分化も可能かもしれないが，少なくともこのブロックは，5/11 世紀以降にまとめられたと考えることができる。同じように他のブロックも分類することができる。

そして 1 番目の型と 2 番目の型の中で，同一の著作が 2 つ以上のブロックに採録される例は見当たらない。またブロック内の順序も多くが定まっており，さらにまったく不規則

な配列をする『書簡集』も今のところ見当たらない。このことは，特に 2 つの型において，ブロック間の統合が特定の場所で，そして少数の人間によって集中的に行われたこと，そして作成された『書簡集』は，配列の改変を認めない「書物」として位置づけられたことを示している。

次に，3 番目の型（MakKh1 と Hinds）に目を向けると，この型には 1 番目と 2 番目の型にも採録される諸書簡も含まれているが，1 番目と 2 番目でみられるブロックの配列を無視した配列となっており，さらに 2 番目の型で茶色に色分けされた諸書簡との間での重複が多いことがわかる。このことは何を意味するのだろうか。『書簡集』の編纂についての報告がないため，仮説の域を超えることはないが，3 番目の型は，1 番目と 2 番目の型の形成時期とは別の時代，あるいは同時期であっても別の場所で，そして 1 番目と 2 番目の型あるいはブロックを作成した集団とは別の集団によって形成された可能性が考えられる。

この可能性を裏付ける証拠として，「サルト・イブン・ハミースの書簡」（*Sīra al-Shaykh al-Faqīh Abī al-Mu'thir al-Ṣalt b. Khamīs*）を挙げることができる。個別の著作の写本間の異文については後述するが，筆者の手元にある 1 番目（MakKh2），2 番目（SIYAR，MakS）そして 4 番目（MakSQ）の各型に含まれる「サルト・イブン・ハミースの書簡」には，「他の書簡から。アブー・マーリクは言った」（min ghayr al-sīra qāla Abū Mālik）という表現が見られる。研究者のなかにはこれを証拠の 1 つとして，同著作のサルト・イブン・マーリクへの帰属を否定する者もいる。一方 3 番目の型に属す MakKh1 には，後代の人物による追加の痕跡は全く含まれていないのである。

さてアブー・アブドゥッラー・キンディー（Abū ʻAbd Allāh Muḥammad b. Ibrāhīm al-Kindī, d. 508/1115）の『啓示法の解明』（*Bayān al-Sharʻ*）は 72 巻からなる大部の著作であるが，オマーン国家遺産文化省から刊行された版には，しばしば『書簡集』に採録される著作が引用される。『啓示法の解明』にはアブー・アブドゥッラー・キンディー没後に活動した人物の著作など，後代の人物による「補遺」が加えられるが，書簡が引用される部分は，アブー・アブドゥッラー・キンディーによる記述と判断される。本補論末の表（2）（423 ページ）は，その一部を示したものである。アブー・アブドゥッラー・キンディーは『啓示法の解明』第 2 巻「神を説明することなどで言われることが許されるもの」（mā yajūzu an yuqāla min dhikr Allāh wa mā ashbaha dhālika）の章において，14 件の著作を引用する。またこの『啓示法の解明』第 4 巻には，アブー・アブドゥッラー・キンディーが同時代の法官（al-Qāḍī），アブー・バクル・アフマド・イブン・ウマル・マンヒー（Abū Bakr Aḥmad

b. ‘Umar al-Manḥī）に宛てた返答が記録されるが，そこでも同様に 6 点が引用される。特に第 2 巻の部分では，同 14 点が集中的に引用されている。このことは，これらを収めた，例えば 4 番目の型のような『書簡集』の原型が，すでに彼に利用できる状態であったことを示している。

以上の点は，アブドゥルラフマーン・サーリミーによる，諸書簡の収集は様々な時代においてなされた，という主張を裏付けるものである。すなわちいくつかの諸書簡のまとまりが集積されることによって，現在の形の『書簡集』が生まれたと考えることができる。カーシフが主張する，アブー・バクル・キンディーによる編纂説は十分に考えられるが，彼は一連の編纂活動に従事した 1 人の学者としての位置づけにとどまる。彼が活動した時代以前にも，いくらかの著作を採録するより小さな『書簡集』があり，アブー・バクル・キンディーはそれを利用できる環境にあったことが想定されるのである。

またウハイビーやサーイビーが主張する，諸書簡を最初に収集した人物はビスヤウィーであるとする説について，バッラーディーは「ビスヤウィーの Siyar」という著作を紹介する[31]。この Siyar が，彼自身の複数の著作を指したものなのか，あるいはビスヤウィーが「まとめた」Siyar であるかは，ここからでは判断することができない。他方でビスヤウィーは，補論 A でみたように，イブン・バラカ→アブー・マーリク→アブドゥッラー・イブン・ムハンマド・イブン・マフブーブ→…という，バスラのイバード派にまでさかのぼる学統のつながりの中にいたと考えられている[32]。また彼は，自らの sīra の中で，ビスヤウィーの生きた時代までの学統を列挙するが，そこにはアブー・ウバイダやマフブーブ・イブン・ラヒールをはじめとして，サーリム・イブン・ザクワーンやハラフ・イブン・ズィヤードら，その著作が帰される人物の名を列挙する[33]。さらにビスヤウィーはその著作『集成』（*Jāmi‘ Abī al-Ḥasan al-Bisyawī*）の中で，ハラフ・イブン・ズィヤードに帰される著作にみられる，比較的長い表現と類似の文章を用いるほか[34]，同時代人のクダミーに宛てた書簡において「マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡」の一節を引用する[35]。そして先に考察した『書簡集』の型からみたとき，2 番目の型では，黄色のブロックの後に，ビスヤウィーの著作を最も時代の下るものとする黒枠のブロックが存在する。以上を踏まえると，ビスヤウィーは 2-3/8-9 世紀の人物に関する情報を有しており，また 4/10 世紀以前のいくつ

[31] [Ṭalibī ‘A. (ed.) 1978, II, 286]
[32] MakSQ, 574; MakKh2, 271a.
[33] SIYAR, II, 86.
[34] al-Bisyawī, *Jāmi‘ Abī al-Ḥasan al-Bisyawī*, 289.
[35] SIYAR, II, 118.

かの著作を手に取る環境にあったと考えることができる。最初の人物であるかは別として，『書簡集』に採録される諸著作を収集したこと，そして 2 番目の型にみられる黄色のブロックに続く黒枠のブロックから判断する限り，それらに自分の著作を加えたことは十分にあり得るものである。

そしてここまでの分析から，オマーンのイバード派に伝わる『書簡集』に採録された，2/8 世紀から 3/9 世紀の人物に帰される著作のうち一部は 4/10 世紀の，そしてそれ以外の著作の多くも，5-6/11-12 世紀以降のイバード派が有した思想を解明するための資料として使用することができる，と結論を下すことができる。

B.1.4　採録されなかった著作

オマーンのイバード派に伝わる『書簡集』は，イバード派内で流通した書簡を網羅してはいない。同時代のあるいは後代のイバード派の著作で，題名が伝えられるもの，あるいは題名と部分的な引用がされるものの，その全容がわからない書簡が数多くある[36]。例えば「ヒラール・イブン・アティーヤの書簡」は，すでにマフブーブ・イブン・ラヒールに知られており，また『啓示法の解明』でアブー・アブドゥッラー・キンディーが何度も引用するなど，同派における思想の形成と展開において一定の役割を果たしたことが推察される。しかしながら現在まで，ヒラール・イブン・アティーヤの書簡の全文を採録する『書簡集』，あるいは同書の全容を示すものは知られていない。ヒラール・イブン・アティーヤの著作が『書簡集』に採録されていない理由について，同著作は単体で存在しており，それが散逸してしまった，『書簡集』の編纂の動きが起こったときにはすでに散逸していた，また同書簡を採録した『書簡集』が何らかの理由によってイバード派に利用できなくなってしまった，さらにはヒラールの書簡には，イバード派の教義に抵触する思想が含まれており，そのために後代の学者たちは，彼らイバード派にとって問題のない部分のみを引用した，などさまざまな原因が考えられる。その特定は，興味深い課題ではあるが，それを実証するための手がかりは限られたものになっている。それ以外の未採録の著作についても，ワラーヤとバラーアというような，何らかの基準によって採録が見送られた，また内容が採録に値しなかったなど，さまざまな理由が考えられる。

[36] ベンドリース[Bendreissou 2003, 472-484]は，散逸したとされる著作を一覧にしてまとめて紹介する。

B.1.5　伝えられる著作の原型を復元することの難しさ

また一部を除いて，アブー・アブドゥッラー・キンディーの『啓示法の解明』で引用される著作は，ほとんどが断片的である。そして断片的に引用されるそれらの著作を，手元にある『書簡集』の写本に採録されたものと比較すると，著作の中にはいくらか目立った異文が存在するものもあることがわかる。例えば「ハラフ・イブン・ズィヤードの書簡」について，アブー・アブドゥッラー・キンディーが当時の同著作には神を称揚するための付加語として「神はいと高く力強い」（ta‘ālá Allāh wa tajabbara）という表現があったことを伝える一方，『啓示法の解明』の補遺者は，「力強いこと［という表現］は認められない」（tajabbur lā yajūzu）と記述する[37]。そして『書簡集』に採録された同著作に，アブー・アブドゥッラー・キンディーが引用する他の箇所を見つける一方，管見の及ぶ限りでは，この一句は見当たらない。これは，アブー・アブドゥッラー・キンディーあるいは補遺者の時代以降，イバード派の見解にしたがって当該箇所が削除されたことを示しているようにみえる[38]。

また同じく『啓示法の解明』に採録された「サーリム・イブン・ザクワーンの書簡」の部分は，『書簡集』に採録された同書簡の同じ箇所の要約的な内容となっている[39]。『啓示法の解明』に採録されたものは，原型の要約であると考えることもできるが，反対に，元々分量が少なかった原型に，様々な「補足」が加わって現在の形になったと考えることもできる。さらに各『書簡集』の間でも，異文が多くある。つまり現存する『書簡集』の写本に遺された各著作は，故意であれ不注意であれ，写字生や編者によって著作の原型にさまざまな削除，付加そして修正が加えられた産物である。そして，そこから原型を復元することは極めて困難な状況にある。

B.2　2-3/8-9 世紀の著作物の真正性・信頼性

B.2.1　検証の方法

B.2.1.1　検証のための視点

イバード派に伝わる初期時代の真正性・信頼性を考えるさい，1/7 世紀から 3/9 世紀の著

[37] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, II, 192.
[38] 一方，後述する「イマーム，ガッサーン・イブン・アブドゥッラーへのアブー・マウドゥードの忠言」（*Naṣīḥa Abī Mawdūd lil-Imām Ghassān b. ‘Abd Allāh*）には，al-tajabbur ‘alá Allāh という表現がみられる。MakSQ, 74; MakKh1, 300.
[39] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, XXVIII, 89.

作を取り扱った先行研究の方法論を参照することがふさわしいだろう。例えばクローネとツィンマーマンは，サーリム・イブン・ザクワーンの書簡の作成年代を確定するさい，同書簡を計 18 の項目から分析した[40]。このうち，本研究でも利用できる分析項目は，書簡中にみられる（2）術語，（3）歴史的事実への言及，（4）「今日」という表現，（6）死んだ敵対者への論争，（7）ウスマーンへの言及，（8）ハワーリジュ派への言及，また（11）（12）書簡導入部の表現，そして（16）書簡の古風な教義（archaic doctrine）である。またクックは，同書簡の成立年代の根拠として，同時期に執筆されたとされる他著作を持ち出し，書簡導入部の表現の類似，また本文中の表現の類似を挙げる[41]。術語について，クローネとツィンマーマンは，西暦 9 世紀以降のイバード派の著作では，イスラーム共同体の構成員はキブラの徒（ahl al-Qibla）ではなく一神教徒（al-muwaḥḥidūn）と表現されること，また罪人は罪を犯した者（muḥdithūn）ではなく大罪者（ahl al-kabā’ir）や圧政者（al-bughā）と表現されること，そして非イバード派のムスリムは我々の集団（qawmu-nā）ではなく反対者（mukhālifūn）と表現されることを明らかにするほか，偽信者たち（munāfiqūn）が非イバード派ムスリムに対する標準的なラベルとなっていると論じる[42]。クローネとツィンマーマンは術語に関するこの特徴を，主としてカーシフ校訂の『書簡集』から導き出したようにみえる。そのため写本の『書簡集』のうち，カーシフ校訂の『書簡集』にみられない著作について分析するさいには，彼らが挙げた成果を利用することができる[43]。

またワダード・カーディーは，ウマイヤ朝の書簡の真正性の吟味に関連して，（a）書簡が作成されたとされる時代から，書簡の内容がはじめて確認される時代までの期間をどのように説明するか，（b）より多くの書簡が後代に現れることについてどのように説明するか，（c）いくつかの書簡に 2 つ以上の形があることをどう説明するか，（d）その筆者とは別の人物に帰される書簡が紛れ込んでいるとき，それをどう説明するか，以上の問いを

[40] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 266-300]
[41] [Cook 1981, 6]
[42] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 197, 266]
[43] またハサン・バスリーの書簡が 1/7 世紀に執筆されたとする立場にある研究者たちは，その根拠として，預言者ムハンマドのハディースの不在，ユダヤ教思想およびキリスト教思想の影響がほとんどみられないことを挙げた[Mourad 2006, 190-193]。ジュインボルやファン＝エスによれば，イスラーム世界ではハディースは 2/8 世紀ごろから著作中にあらわれるとする。ムラードは, 4/10 世紀の著作にもハディースの含まれない著作があるとして，ハディースの有無を年代特定の判断材料とすることはできないとする。とはいえ著作中にみられるハディースの内容と著作内での使用状況，そして同一のテーマを扱った他の著作におけるハディースの有無は，対象とする著作の作成時期を判断するさいに参考となるかもしれない。

提起した[44]。これらの点のうち（a）に関連して，3/9 世紀のムハンマド・イブン・マフブーブの書簡やサルト・イブン・ハミースの著作が次世代のハーリド・イブン・カフターンらによって参照されていること，またこれら 3 名の書簡は，前節で考察した『書簡集』の型において，4/10 世紀後半を下限とするブロックにみられることから，3/9 世紀後半以降に執筆された著作は，執筆直後からオマーンのイバード派によって保持し続けられた，信頼性が高いものと判断することができる。そのため本補論では，主に 2/8 世紀から 3/9 世紀前半に作成されたとされる著作，また 3/9 世紀後半の著作で，写本の状態にある著作を取り上げる。

B.2.1.2　書簡導入部と書簡のひな型

クックは, アラビア文学の本流では, 書簡はヒジュラ暦 3 世紀までには時代遅れとなり，教義的な自己表現の媒介ではなくなったと論じる。またイバード派は, アラビア文学が「純文学」と表現されるものから影響を受ける前にイラクから去ったようにみえるため，イバード派の伝統は比較的潤色されていないものの，反面宗教的書簡の伝統が長く生き残ったということは，書簡の偽造技術も同じように残ったということも意味しうるとする[45]。

クックおよびクローネとツィンマーマンは，書簡冒頭の wa ūṣī-kum bi-taqwá li-Allāh という表現に着目する。クックはサーリム・イブン・ザクワーンの書簡の執筆の年代特定において，同表現および類似表現は初期の宗教関係の書簡にみられるとして，ハサン・イブン・ムハンマド・イブン・ハナフィーヤ（Ḥasan b. Muḥammad b. al-Ḥanafiyya）に帰される『イルジャーの書』（*Kitāb al-Irjā‘*）[46]，アブー・ハニーファ（Abū Ḥanīfa al-Nu‘mān b. Thābit, d. 150/767）の『ウスマーン・バッティーへの書簡』（*al-Risāla ilá Uthmān al-Battī*）そしてザイド派イマーム，ザイド・イブン・アリー（Zayd b. ‘Alī, d. 122/740）の『サフワの書』（*Kitāb al-Ṣafwa*）などをその例として挙げる[47]。またクローネとツィンマーマンは，あまり参考にはならないとしつつ，書簡冒頭の waṣiyya bil-taqwá という表現は，ウマイヤ朝後期までに教義に関する書簡の標準的な特徴となり，この特徴を有する宗教的書簡は，西暦 700 年頃

[44] [al-Qāḍī 1992, 234]
[45] [Cook 1981, 52]
[46] 同著作の作者をめぐっては，ファン＝エスやマーデルンクらがハサン・イブン・ムハンマド・ハナフィーヤとする一方，クック，クローネとツィンマーマンらはその帰属を否定する[Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 258]。
[47] [Cook 1981, 6]

から 900 年頃までに執筆されたものに多くみられると論じる[48]。

クローネとツィンマーマンは，イバード派の書簡は西暦 900 年頃から次第に減少してなくなる（peter out）と語る。確かに『書簡集』には，ヒジュラ暦 4 世紀（西暦 10 世紀）以降に執筆されたもので，書簡の形式をとるものは多くは採録されていない。しかしながら，宗教的書簡をしたためるという活動は，4/10 世紀以降も存続していたと考えられる。すなわちアブー・アブドゥッラー・キンディーの『啓示法の解明』の補遺に，そしてアブー・バクル・キンディー（Abū Bakr Aḥmad b. ‘Abd Allāh b. Mūsá al-Kindī, d. 557/1161-2）の『編纂されたもの』（*al-Muṣannaf*）には，イマームが書簡をしたためるさいの書簡冒頭部の「ひな型」が採録されており[49]，書簡の作成には一定の形式があったことを我々に知らせる。そしてその書簡の「ひな型」には，ūṣī-ka wa nafsī bi-taqwá Allāh という表現が含まれている。この「ひな型」は，偽書を造り出す過程で生み出された可能性もあるが，もっともらしくなり，受け入れられるためには，参考となる「前例」が必要である。そのことを考えると，この「ひな型」はイバード派内で流通した書簡に基づいて作成されたと考えることができる。しかしながら本研究で使用する著作が，この「ひな型」に基づいて作成された可能性もある。つまりクローネとツィンマーマンは，冒頭の表現のみから判断すれば，サーリム・イブン・ザクワーンの書簡の作成時期は西暦 700 年頃から 900 年頃に限定できるとするが，冒頭の表現のみからでは，執筆年代を限定することはできない。書簡冒頭における表現の類似は，真正性の証拠としてはいくらか弱いものであり，結局のところは書簡の内容を十分に吟味しなければならない。

一方「ひな型」の様式と異なる様式を有する著作は，そうした様式を知らない人物が作成した，あるいは様式が定められる前に作成したと考えられる。文学の 1 つのジャンルとして，書簡作成という実践がイバード派内にあり，そのさい書き手が，手元にある情報，知識をもとに書簡を偽造する時，書き手は自由に書くというよりも，人びとに受け入れられる形式で書くと考えられる。まとめれば，著作の内容を十分に吟味する必要はもちろんあるが，「ひな型」の様式を踏襲していないということは，その書簡の真正性を保証する証拠の 1 つにもなりうるのである。

B.2.2　バスラの（プロト・）イバード派の指導者たちに帰される著作

[48] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 290]
[49] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, LXVIII, 463; Abū Bakr al-Kindī, *al-Muṣannaf*, X, 137.

イバード派の名祖イブン・イバードに帰される 2 通の書簡については，すでに本補論の冒頭で言及した。研究者たちによる資料批判に基づけば，両著作はヒジュラ暦 2 世紀半ば（西暦 8 世紀後半）以降のイバード派が保持した思想として使用することができる。

B.2.2.1　ジャービル・イブン・ザイド

（1）ジャービル・イブン・ザイドの諸書簡（*Rasā'il al-Imām Jābir b. Zayd*）

（2）ジャービル・イブン・ザイドの文書（*Marāsīl al-Imām Jābir b. Zayd*）

（1）オマーン国の首都マスカットのルウィ地区にあるイスラーム図書館には，ジャービル・イブン・ザイドに帰される 17 通の書簡が所蔵されている。ウィルキンソンは，これらの諸書簡はチュニジアのジェルバ島の図書館に保存されていた写本をエンナーミーが活字化したものであると紹介する[50]。ジェルバ島における同諸書簡については，エンナーミー[Ennami 1974]やファン＝エス[van Ess 1976]が紹介し，そしてその内容についてはウィルキンソンやベンドリース，またウハイビーが紙面を割いている[51]。現代の研究者の使用状況について，クックは諸書簡冒頭の表現 innī ūṣī-kum bi-taqwá Allāh および類似表現を，自らが部分的に校訂したサーリム・イブン・ザクワーンの書簡の執筆年代の根拠として使用する[52]。またウィルキンソンは，書簡の多くが不詳の人物に宛てられていること，内容が実際的問題を取り扱っていることを理由の 1 つとして，同諸書簡はジャービル・イブン・ザイドによる真正な著作であると評価する[53]。

現在所在が知られている『書簡集』には，これらジャービル・イブン・ザイドの諸書簡は採録されていない。また『啓示法の解明』にも，ジャービル・イブン・ザイドの書簡からの引用はみられない。さらに北アフリカの学者バッラーディーやダルジーニーも，ジャービル・イブン・ザイドの諸書簡について沈黙している。一方シャンマーヒーの報告からは，現在伝わるこの諸書簡が，遅くとも 10/16 世紀の北アフリカで知られていたことが確認できる[54]。諸書簡は婚姻，離婚，奴隷の取り扱いなど，大部分が法学的内容を扱ってい

[50] [Wilkinson 2010, xxxiii]
[51] [al-Wuhaybī 2006, 104-107]
[52] [Cool 1981, 6]
[53] [Wilkinson 2010, 195-198] フランチェスカ[Francesca 2003]も諸書簡の真正性を支持する。また，ベンドリース[Bendrissou 2003, 399, 420]らイバード派ムスリム研究者も，同諸書簡を真正なものとして使用する。
[54] al-Shammākhī, *Kitāb al-Siyar*, I, 109.

る。異なるジャンルとして，これらが『書簡集』に採録されなかったことは十分考えられるが，『啓示法の解明』をはじめとする大部の著作の実定法の箇所で引用がみられないことは，編纂当時これらの書簡がオマーンで活動する学者たちに知られていなかった，あるいは知られていたが意図的に利用されなかったことを示している。

ベンドリースは，同諸書簡の問題点として，諸書簡をまとめた写本は 2 点知られているが，そのうち一方の写本には各書簡の導入部の言葉がなく，直接法学的問題が始まること，両写本にはウスマーン・イブン・ヤースィル（‘Uthmān b. Yāsir）への書簡が含まれるが，内容が異なること，両写本では書簡の配列が異なっていることを挙げる[55]。

ベンドリースは，書簡は 18 通あるとするが，オマーンのイスラーム図書館に所蔵される書簡は 17 通である。この 17 通の書簡のうち，最初の書簡は冒頭が欠けており，誰に宛てられたかはわからない。残る 16 通のうち，12 通目のヌウマーン・イブン・サラマ（Nu‘mān b. Salama）宛の書簡は，wa ūṣī-ka bi-taqwá Allāh が欠けているが，それ以外の 15 通は宛名の後に salām ‘alay-ka fa-innī aḥmadu ilay-ka Allāh alladhī lā ilāh illā huwa wa ūṣī-ka bi-taqwá Allāh の表現が続く。問いは ammā alladhī dhakarta min…という文言で紹介され，各書簡には主として法学にかかわる，様々な問いと回答が収録される。ただし，15 通目のマーリク・イブン・アスヤド（Mālik b. Asyad）宛の書簡のみ，問いは wa katabta ilay-ya an/fī..,という表現で紹介されており，他の諸書簡と文体の面で異なっている。またいくつかの書簡では，預言者ムハンマドの教友であり，ジャービル・イブン・ザイドがそのもとで学んだと伝えられる，イブン・アッバース（‘Abd Allāh b. ‘Abbās, d. 68/687）の名が見られる[56]。

フランチェスカは，初期の時代のものとしてイバード派に伝わる写本が扱うテーマは，ヒジュラ暦 2 世紀までに起きた法学的議論を映し出しており，それらの事例に対してイバード派の法学者が示す解決策はしばしば未発達であること，また展開される法的議論は，地域の法的慣習の継続とイスラームの伝統を確立しようとする法学者たちの努力という対立する 2 つの傾向がみられるとした。そして写本で議論される古風な問題の例として，女性奴隷との乱交の非難，自由人男性を奴隷として売買することの禁止を挙げる[57]。

注などをみる限りでは，フランチェスカは上記説明をするさい，本項で取り上げるジャービル・イブン・ザイドの諸書簡を利用していないようにみえる。女性奴隷との乱交と，奴隷として自由人男性を売買することは，書簡の中でも言及されている。例えば 3 通目の

[55] [Bendrissou 2003, 173, 174]
[56] 例えば，Jābir b. Zayd, *Rasā’il Jābir b. Zayd*, 1, 11, 15.
[57] [Francesca 2003, 265-266]

タリーフ・イブン・ハリード（Ṭarīf b. Khalīd）への書簡では，ある男が 2 人のうち一方の女性が穢れの状態（fī janāba wāḥida）で 2 人の女性奴隷と性交渉を持ったとき，それは同時に関係を持たない限り（mā lam yajma‘ bayna-humā）は問題ないが，どちらかの女奴隷と家で関係を持った後にその女を追い出し，それからもう 1 人の女奴隷のもとへ向かう（yursilu ilá al-ukhrá）ことは問題であると回答する[58]。同様にアニーファ（‘Anīfa）への書簡では，2 人の男が 1 人の女奴隷と関係を持ちその女奴隷が妊娠したことが話題に上る[59]。また，奴隷として自由人男性を売買することについては，10 番目に採録された，上記の書簡とは別のマーリク・イブン・アスヤドへの書簡中にみられ，売った者も買った者も等しく，それは信仰者たちにとってハラームであるとの回答が示されている[60]。

また 4 通目のガトリーフ・イブン・アブドゥッラー（Ghaṭrīf b. ‘Abd Allāh）への書簡，アニーファへの書簡，そしてヌウマーン・イブン・サラマへの書簡には，本研究にいくらか関係のある記述もみられる。ガトリーフへの書簡では，導入部で，偽信には様々な段階があり，最小の段階は破約（khulf）であると語られる[61]。またアニーファの書簡には「すべての被造物はイスラームをその真理とともに認知する」（wa al-lslām kullu al-khalq ya‘tarifu la-hu bi-ḥaqqi-hi）と記される[62]。そしてヌウマーン・イブン・サラマへの書簡には「信仰は増加については信仰者たちに結びつくが，減少については彼らに結びつかない」と，信仰の増減が話題に上る[63]。信仰の増減についてはイスラーム世界では 3/9 世紀前半には議論されていたことがわかる[64]が，例えばオマーンのイバード派では，この問題は 4/10 世紀以降に本格的に論じられ，後代ではクダミーの見解が引用される場合が多い[65]。

ヌウマーン・イブン・サラマへの書簡同様に，アニーファへの書簡では「もし～ができるのであれば，おこないなさい」（fa-in istaṭa‘ta…fa-if‘al）という表現がみられる。同書簡では，テント（al-fasāṭīṭ wa al-akhabiya）を家とする許可と承認についての質問，また夫の

---

[58] Jābir b. Zayd, *Rasā’il Jābir b. Zayd*, 5.
[59] Jābir b. Zayd, *Rasā’il Jābir b. Zayd*, 19.
[60] Jābir b. Zayd, *Rasā’il Jābir b. Zayd*, 26.
[61] Jābir b. Zayd, *Rasā’il Jābir b. Zayd*, 10. 同書簡では，1 つの衣服（burd）を 2 つの服（thawb）で貸し付ける男について，そして金曜礼拝をする導師をみつけたが，清めの状態になくまた水もなく，金曜礼拝に参加する場合，土（ṣa‘īd）で代わりの清め（yatayammamu）をしてよいか，という法学的問題が扱われる。
[62] Jābir b. Zayd, *Rasā’il Jābir b. Zayd*, 16.
[63] Jābir b. Zayd, *Rasā’il Jābir b. Zayd*, 30. このほか同書簡では，地代をめぐる法学的議論が展開されている。
[64] Abū ‘Ubayd al-Qāsim b. Sallām (d. 224/838), *Kitāb al-Īmān wa Ma‘ālimi-hi, wa Sunani-hi, wa Istikmāli-hi, wa Darajāti-hi*, 24-26.
[65] al-Kudamī, *al-Istiqāma*, III, 60; al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, II, 244-245.

あるホラーサーンの女性が，ホラーサーンを出て，キブラの徒との戦争の地（arḍ ḥarb）へ行き，そこでその地のキブラの徒の教えに従って（別の男と）結婚し，それからホラーサーンへ戻ると，最初の夫が死んでいたとした場合，（さらに別の）ある男は女が悔悟すればその女と結婚できるかという問い，そして妻に離婚を宣告した男が，2 年間の授乳に合意した時，2 人の間では復縁しないことを妻に条件付けることは妥当かという質問，また待婚期間完了前に，あなた以外とは結婚しないとする契約に関する質問などが出される。そしてこれらの質問に対し，回答者はイブン・アッバースの見解を引きつつ回答を示している。

問いは，その答えがわからないために出されるものであり，その時代の状況を映し出すものといえる。諸書簡にみられる問いは，フランチェスカの語る「古風な」内容に属するように見える。また回答者はイブン・アッバースの見解に言及するが，預言者ムハンマドの伝承を持ち出すことなく，回答を提示する。後代には，預言者の伝承が法学的議論の中で提示されるが，預言者ムハンマドからの言葉が現れない点でも，諸書簡は比較的早い段階に作成されたと考えることができるかもしれない。

（2）『ムスナド』（*al-Musnad*）は，イバード派で編纂されたハディース集である。シャンマーヒーは，同著作は 6/12 世紀の北アフリカの学者アブー・ヤアクーブ・ワルジラーニー（Abū Ya‘qūb Yūsuf b. Ibrāhīm al-Warjlānī）によって編纂，配列されたことを伝えるとともに，後述する『ラビーウの伝承』と同じくアブー・スフラ・アブドゥルマリク・イブン・スフラ（Abū Ṣufra ‘Abd al-Malik b. Ṣufra）が伝承者なのではないか，と論じる[66]。現在『ムスナド』は『真正集』（*al-Jāmi‘ al-Ṣaḥīḥ*）等の名で出版されている。

『ムスナド』は全 4 部からなり，最初の 2 部には，礼拝や喜捨などの法学的内容を項目ごとに集め，第 3 部は教義等に関して，他宗派に対する論拠となる伝承が採録される。フランチェスカやウィルキンソンは，この『ムスナド』は外部からの影響から自派を守り，また自派を他の法学派と同列に置くためにイバード派法学が経験した「正当化」（rationalization）の過程の産物であり，またこの過程の結果として，イバード派の法体系はいくらかその独自性を失ったと主張する[67]。

さて『ムスナド』第 4 部には，最後に「ジャービル・イブン・ザイドから伝えられる断

[66] al-Shammākhī, *Kitāb al-Siyar*, I, 109.
[67] [Francesca 2003, 274]

片的伝承」（no. 924-1005）と題される章がある。ウハイビーはこの部分を「ジャービル・イブン・ザイドの文書」（*Marāsīl al-Imām Jābir b. Zayd*）と名付け，その真正性について，ジャービル・イブン・ザイドの公正さと信頼性，正確さと名声および知識の広さ，そして預言者の時代の近くに生きたことなどを挙げる[68]。

全 82 件の伝承は，ジャービル・イブン・ザイド経由の預言者ムハンマドの言動，そしてジャービル・イブン・ザイド自身の言動が含まれる。結論から言えば，すべての情報が当時にさかのぼる真正なものであるとみなすことは難しい。例えば本研究が関係するワラーヤとバラーアについて，例えばジャービル・イブン・ザイドが伝えるものとして「占星術師あるいは占い師，もしくは詩人のもとへ行き，その者の言葉を承認する者は神がムハンマドに啓示したものと関わりがない」（man atā ‘arīf^{an} aw kāhin^{an} aw sāhir^{an} fa-ṣaddaqa fī-mā yaqūlu fa-huwa barī’^{un} min-mā anzala Allāh ‘alá Muḥammad），また「私は神かけてカダル派とは関わりがない，私はムルジア派とも関わりがない。神と神の使徒は，両集団とは関わりがない」（abra’a ilá Allāh min al-Qadariyya wa abra’u min al-Murji’a barī’^{un} Allāh wa min-humā wa rasūlu-hu）というムハンマドの言葉が記録される[69]。第 3 章でもみたが，前者と同様の内容を伝える伝承は，スンナ派世界で編纂された『六書』のいくつかにも採録され，ムハンマドが語ったものとしてある程度の信憑性があるようにみえる。一方後者は，ムハンマドの没後イスラーム共同体に出現する集団が，バラーアの宣告の対象となっている。ムハンマドの存命中にこれらの名前を有する集団が実際に存在したと考えること，また両集団の出現とそれへの対応をムハンマドが予言したと考えることは難しく，同伝承は，イバード派がワラーヤとバラーアの概念を形成していくさいに意図的に作成した伝承（ḥadīth mawḍū‘）として理解するのがよいだろう[70]。そのため同章の部分は，ある時期以降のイバード派の思想を知るためには有益であるが，初期時代のイバード派の思想動向を知るための資料として用いるさいには，採録された各伝承を 1 つ 1 つ考察する必要がある。

B.2.2.2 アブー・ウバイダ

アブー・ウバイダの書から（*Hādhā min Kutub Abī ‘Ubayda raḥima-hu Allāh*）（MakSQ, 61-63;

---

[68] [al-Wuhaybī 2006, 101-102]

[69] al-Warjlānī, *al-Jāmi‘ al-Ṣaḥīḥ*, 371 (no. 971, 974).

[70] 「意図的に作成された伝承」については，[Azami n.d. 68-69]を参照のこと。また，カダル派とムルジア派に言及する類似の伝承は，イブン・ウマルの伝えるものとしてスンナ派の伝承集にも記録されている[van Ess 1975, 128]。

MakKh1, 288-290）

筆者の手元にある『書簡集』の写本のうち，同著作は MakSQ および MakKh1 に採録される。分量は MakKh1 で全 43 行ほど，見開き 2 ページ弱である。また『啓示法の解明』第 5 巻の「ムスリムたちの知らせおよび彼らの美徳などについての章」（fī akhbār al-Muslimīn wa faḍā'ili-him wa mā ashbaha dhālika）には，MakKh1 の後半 25 行分が引用される[71]。MakSQ および MakKh1 ともに，書簡は後述する「アブー・ウバイダとハージブによるファドル・イブン・カスィールへの書」に続く形で採録され，ammā ba'du fa-innī ūṣī-kum bi-taqwá Allāh で始まり，al-salām 'alaykum wa raḥma Allāh で終わる。min kutub という表題が付されるが，laqad wajadtu 'alayya la-kum fī risālati-kum 'an ba'ḍi-kum（『啓示法の解明』では fī mas'alatī 'an ba'ḍi-kum）とあるように，先行する書簡，問いへの返答のかたちをとっている。

同書簡に特徴的な内容として，前半部分における定命への言及が挙げられる。書き手は，神の威厳（'aẓama Allāh）として，その地位（manāzil）に応じて被造物を創造すること，神は被造物を創造することを欲したものを，訓戒のまとまり（cf. Q. 21: 105）の中で完成させ，物事の諸規定を実行し，自らの予定（qaḍā）を実施することを挙げる。書中では，神の命令とは，それを定めるという知であり，定めることと定められること（qadar wa maqdūr）であると説明されるほか，神の友たちについての神の命令は無始（qadīm）であり，物事の根源は神の知に帰着すること，また神は神を崇拝する者どもを分類することを欲し，神はその恩恵により，崇高な祝福と偉大な地位を伝えることによって神の友たちを救済することなどが記述される。

そして『啓示法の解明』にも引用される後半部分は，共同体内のワラーヤが主題となっている。書き手は，神が我々に与えた恩恵（ni'ma Allāh）の中には，洞窟の人びと（aṣḥāb al-kahf）（cf. Q. 18: 9）や坑の住人（aṣḥāb al-ukhdūd）（cf. Q. 85: 4）また先行する預言者たちに自分たちの愛（mawadda）が届くことを我々が望むことがあるとする。そして反語的に，神を愛することとともに，自分たちの同胞や協力者への愛が不足することはないとする。また続く部分では，ジャービル・イブン・ザイドとアブー・ビラール・ミルダース・

[71] al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, V, 102-104. 直前では，マフブーブ・イブン・ラヒールからの話および分裂以前のハワーリジュ派に属した人物の事績が，詩とともに語られる。

イブン・フザイルのやりとりが記述される。

定命（qadar）の問題と，それに付随する神の意志（irāda），命令（amr），望み（mashī‘a）そして知は，ヒジュラ暦 2 世紀には盛んに論じられたテーマの 1 つであった。後代の著作では，楽園へ行くと神が知る多神教徒を，神は関わりを持つかと尋ねられたアブー・ウバイダが，神はその者を不信仰から出すまでは，神は関わりを持たないと答えたことが記録されるが[72]，これはアブー・ウバイダが神の知という概念と無縁ではなかったことを示す証拠である。またマフブーブ・イブン・ラヒールから伝えられるものとして，アブー・ウバイダは定命の問題に疎かった（yaḍ‘afu）と報告されるが，続く箇所では「神は諸物が存在する前にその諸物を知っていると告白する者は，神の定命を告白している」と彼が述べたことを記述する[73]。この立場は，書簡中の立場と一致する。そして神の命令が神の意思や知のようなものであるという考え方は，後代のイバード派によっても提示される[74]。

後代のイバード派では，誰が幸福な者であるかは神の真理の規定で定まっていると理解され，先行する人びとのうち，誰が信仰者として楽園へ行くか，あるいは誰が神の友であるかが議論された。クダミーは，洞窟の人びとについては，真実のワラーヤ（walāya al-ḥaqīqa）すなわち神のワラーヤが定まっており，来世における楽園行きが疑いのない人物たちとして取り上げる。そしてそれを疑う者は破滅するとして説明する[75]。一方クルアーン 85 章 4 節で語られる坑の住人について，スンナ派ではこの人びとは不信仰者として解釈される[76]。2/8 世紀に活動したシャビーブ・イブン・アティーヤに帰される書簡では，悪を行わなかった人物として，フィルアウンの女性（cf. Q. 28: 9）とともに坑の住人が挙げられる[77]。また 3/9 世紀のフード・イブン・ムハッカムが，住人は坑に投げ込まれ火刑に処せられた信仰者であるとするハサン・バスリーの見解を引用する[78]。来世で救われる集団として洞窟の人びとや坑の住人への言及がその著作中に現れることに，時代的整合性につ

---

[72] Anonymous, *Risāla ilá Ahl Khwārizm* (in [Salimi 2001, 95]) al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 359, 363; al-Shaqaṣī, *Manhaj al-Ṭālibīn wa Balāgh al-Rāghibīn*, I, 634.
[73] al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā’ikh bil-Maghrib*, II, 233.
[74] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 425.
[75] al-Kudamī, *al-Mu‘tabar*, II, 44-45.
[76] [三田 1982, 767, n. 3]; また al-Māturīdī, *Tafsīr al-Qur’ān al-‘Aẓīm al-Musammá Ta’wīlāt Ahl al-Sunna*, V, 424-425.
[77] SIYAR, II, 279.
[78] Hūd b. Muḥakkam al-Hawwārī, *Tafsīr Kitāb Allāh al-‘Azīz*, IV, 444. 一方 12-13/18 世紀の学者サイード・イブン・アフマド・キンディーのクルアーン解釈書では，不信仰者として描写される。Sa‘īd b. Aḥmad al-Kindī, *al-Tafsīr al-Muyassar lil-Qur’ān al-Karīm*, III, 473. エンナーミーやリヤーミーは，坑の住人はワラーヤの対象であると説明する[Ennami 1971, 293]; [al-Riyāmī 2008, 208]。

いての矛盾は生じない。

そしてジャービル・イブン・ザイドとアブー・ビラールのやりとりの中で語られる内容は, ダルジーニーやシャンマーヒーら, マグリブのイバード派の人名録には見当たらない。一方ジャービル・イブン・ザイドとアブー・ビラール両名に言及する著作は，マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡，またマフブーブ・イブン・ラヒールからの引用として上述の人名録にみられるほか[79]，後述するアブー・フッル・アンバリーからアブドゥッラー・イブン・ヤヒヤー・ターリブ・ハックへの書簡中にみられる。アブー・ウバイダが両名に言及すること自体には，同じように時代的錯誤はなく，また伝えられる学統からみても不自然ではない。そして本書簡は，イバード派構成員に対して宛てられた著作である可能性が高い。

なおアブー・ウバイダに帰される書簡には，このほか「喜捨に関するアブー・ウバイダの書簡」（*Risāla al-Imām Abī ʻUbayda fī al-Zakāt*）が伝わる。写本はエジプト国立図書館等に所蔵される。オマーン国国家遺産文化省から校訂・出版されたほか，ラーシュディーがその研究書に同書簡を全文掲載し, 内容を詳しく分析する[80]。書簡の文体上の特徴として，既述したジャービル・イブン・ザイドの諸書簡に見られる表現に類似する ammā mā dhakartum min…という表現が多用される。クルアーンの引用は 2 箇所（Q. 8: 4, 19: 103）にみられる。預言者のハディースは使用されない一方，第 2 代カリフ，ウマルに関する話が書簡の前半部で語られる。書簡では十分の一税やサダカ等が扱われている。

●アブー・ウバイダとアブー・マウドゥードの連名の著作

（i）アブー・ウバイダとハージブによるマグリブの徒への書

（*Hādhā Kitāb Abī ʻUbayda wa Ḥājib ilá Ahl al-Maghrib*）（MakSQ, 51-56; MakKh1, 275-281）

（ii）アブー・ウバイダとアブー・マウドゥードの書簡

（*Hādhihi Risāla Abī ʻUbayda wa Abī Mawdūd*）（MakSQ, 56-59; MakKh1, 281-285）

（iii）アブー・ウバイダとアブー・マウドゥードによるファドル・イブン・カスィールへの書（*Hādhā min Abī ʻUbayda wa Abī Mawdūd ilá al-Faḍl b. Kathīr*）（MakSQ, 59-61; MakKh1, 285-290）

---

[79] SIYAR, I, 302. 304; al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashāʼikh bil-Maghrib*, I, 206.
[80] [al-Rāshidī 1993, 513-531]

補論 A でも言及したように，後代の著作ではアブー・マウドゥードとアブー・ウバイダが行動を共にしていたことが報告されるが，『書簡集』には，アブー・ウバイダとアブー・マウドゥードの連名による書簡が採録される。マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡では，ジュランダー・イブン・マスウードが「アブー・ウバイダとハージブと両者のもとにいた法学者たちに書簡をしたためた」と記述する[81]。宛先としての両者の名の列挙は，両者が書簡をはじめとするイバード派構成員間のやりとりを共同管理する立場にあったことを示しており，転じて両名を差出人とする書簡が作成される可能性を表している。

（i）について，管見の及ぶ限り，同書簡は『啓示法の解明』では引用されない。同書簡は『書簡集』の第 3，第 4 の型に採録されるほか，アブー・ウバイダの研究書を執筆したラーシディーは，その巻末に同書簡を採録する[82]。一方北アフリカのイバード派の歴史書では，書が執筆され，送付されることになった経緯が詳しく語られる。アブー・ザカリーヤー・ワルジラーニー（Abū Zakariyyā’ Yaḥyá b. Abī Bakr al-Warjlānī, d. after 504/1110-1）によれば，「ハーリスとアブドゥルジャッバールの問題」が東方のイバード派に伝わったとき，彼らはそれについて意見を異にしたこと，北アフリカのイバード派ではそれについての意見の対立がさらにひどかったため，アブー・ウバイダとハージブは，ムスリムたちは両者について語ることを慎むよう命じる旨の書を北アフリカに送付したこと，そしてその後ムスリム集団は 1 つにまとまり，潜伏（kitmān）の状態に入ったこと，その後アブー・ハッターブ・アブドゥルアアラー・イブン・サムフ（Abū al-Khāṭṭāb ‘Abd al-A‘lá b. al-Ṣamḥ）が北アフリカへ行き，ヒジュラ暦 140 年にタラーブルスでイマーム位に就いたことを記述する[83]。

ハーリス（al-Ḥārith b. Tulayd al-Ḥaḍramī）とアブドゥルジャッバール（‘Abd al-Jabbār b. Qays al-Marādī）の問題とは，この 2 名がウマイヤ朝カリフ，マルワーン・イブン・ムハンマド配下の太守（‘āmil）に対して立ち上がり，タラーブルス方面にいたが，あるときある家で，2 名がともに手に武器を持ったまま死んでいるのが見つかるという事件を指す[84]。一般化をすれば，イバード派のワラーヤのある 2 名が互いに戦い，そして第三者にはそれについての状況証拠がなくどちらに不正があるか分からないまま共に死んでしまった場合，2 名のワラーヤとバラーアはどのように判断されるか，という問題である。オマーンのイバ

[81] SIYAR, I, 284.
[82] ラーシディーは，同書簡は研究者ファルハート・ジャアビーリーのノートに採録されたものを使用したと説明する[al-Rāshidī 2003, 579-584]。
[83] al-Warjlānī, *Kitāb Siyar al-A’imma wa Akhbāri-him*, 57-59.
[84] al-Shammākhī, *Kitāb al-Siyar*, I, 105.

ード派の著作では，類似の議論として，理由が分からない状態で，ワラーヤのある 2 名の男のうち，一方が他方を殺した場合，加害者にワラーヤの状態にあるか，という問題が論じられる。

ウマイヤ朝カリフ，マルワーン・イブン・ムハンマドのカリフ位は，ヒジュラ暦 127 年から 131 年である。シャンマーヒーは，この事件の起きた年を報告していないが，イエメンで蜂起したアブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーへの対応[85]から，アブー・ウバイダはすでにヒジュラ暦 130 年以前にバスラのイバード派においてリーダーシップをとる立場にあったと考えられる。時代的観点から判断すれば，彼がアブー・マウドゥードとともにイバード派の代表者として書簡を執筆することは十分可能である。

書簡の内容について，ワルジラーニーが語る書簡の大要は，『書簡集』に採録される書簡の大要と一致する。冒頭は ilá man balagha-hu kitābu-nā hadhā min al-Muslimīn salām ‘alay-kum fa-innā naḥmadu Allāh alladhī lā ilāh illā huwa wa innā nūṣī-kum bi-taqwā Allāh wa al-ijtimā‘ ‘alá ṭā‘ati-hi wa al-iṣlāḥ li-dhāti al-bayyin で始まり，fa-bi-Allāh tawfīqu-nā wa īyā-kum ‘aṣama-nā Allāh wa īyā-kum bi-al-taqwā wa al-salām ‘alay-kum wa raḥma Allāh wa barakātu-hu で終わる。書簡中ではハーリスとアブドゥルジャッバールという固有名詞はみられず，2 人の男（rajlayn）として言及されるのみである。また書簡にはそのほかの特定の人物名は現れず，またクルアーンの節が引用される一方，預言者ムハンマドのハディースは引用されない。

本文では導入文に続いて「私たちは，彼らにあなたがたのことについて尋ね，彼らは取るに足らない話（khabar^{an} rā‘in^{an}）を我々に伝えた」という，問題についてのやりとりを伝える一節が記述される。本題に入る前に，書簡の書き手は，物事が 1 つの言葉に集まった後で，論争をすることは最も甚だしい背信であると断じる。そしてイスラーム共同体の分裂は，あるものをハラールとするかハラームとするかに関する意見の相違によって生まれたものであり，各集団は自らの手のうちにあるものを教えとして採用し，それに従う者たちにワラーヤを認め，それに反する者と袂を分けたと続ける。そして神とムスリムたちにとって最も好ましい事柄とは，（イバード派）ムスリムの言葉に同意することであり，最

[85] アブドゥッラー・イブン・ヤヒヤー・キンディー（‘Abd Allāh b. Yaḥyá al-Kindī “Ṭālib al-Ḥaqq”, d. 130/748）が，アブー・ウバイダとバスラのイバード派に，蜂起について協議するための書簡をしたためたさい，バスラのイバード派は「一日でもその状態にあることができないのならば立ち上がりなさい，良き行いに急ぐことはよりよいことである」と，彼の蜂起を支持する立場を表明した。al-Balādhurī, *Ansāb al-Ashrāf*, IX, 285.

も憎むべきことは統一（al-jamāʻa）から分離することであり，不穏を引き起こすことであるとする。

そして 2 人の問題について，書き手は両者を称賛されるものではない（ghayr maḥmūd）と評価するとともに，2 人への対応について，たとえ神のもとで正しい者であっても，証拠がムスリムたちの間で定まれば，ムスリムたちの友である者にバラーアを宣告することをしなければならないが，沈黙すること（ṣamt）は許されるとする。そして殺人者へのバラーアを内密に行い，それを公にしないことが，2 人の判断について求められるものであると結論付ける。

書き手は，ワラーヤとバラーア，そしてウクーフの原則に関する議論である，神のもとでの状態と人間の判断の違い，また内面と外面という 2 つの相からの説明という問題を提示する。ワラーヤとバラーアの判断には，神の側からと人間の側からの 2 つの観点からの考察が可能であるとの理解は，先のアブー・ウバイダの書の部分でも触れた[86]。真理の規定や外面の規定という表現が使用されていないことは，同著作がそうした概念の影響を受けていないことを意味する。また外面と内面について，後代の著作の中では，預言者ムハンマドは，人間の活動を心で行われる内面（sarīra）の活動と，また舌で語り，身体を用いる外面（ʻalāniya）の活動に分類していたという話が，教友ムアーズ・イブン・ジャバル経由の伝承として記録される[87]。外面と内面に分けるという考え方をアブー・ウバイダらが知っていることに問題はない[88]。

（ii）について，アブドゥルラフマーン・サーリミーは，ワーイル・イブン・アイユーブとの連名の書簡として紹介するが[89]，ワーイル・イブン・アイユーブへの直接的な言及はみられず，表題にはハージブと記載される。（i）や（iii）のように，アブー・マウドゥ

[86] このほかにもアッザーン・イブン・サクルは，信仰者でありワラーヤのもとで死ぬと神が知る多神教徒について尋ねられ，イバード派にはその男について「神の敵である」「神の友である」「友とされない友であり，敵とされない敵である」という 3 つの見解があると語る。そして神の友であると主張する集団は「永久不変の（lā yataḥawwala abad[an]）神の知」という概念を持ち出したことに触れる。al-Shaqaṣī, *Manhaj al-Ṭālibīn wa Balāgh al-Rāghibīn*, I, 634.

[87] al-Kudamī, *al-Istiqāma*, III, 244.

[88] 対象者へのバラーアを内密に行い，それを公にしないという行動は，3/9 世紀のオマーンのイバード派政権のイマーム，ムハンナー・イブン・ジャイファルに対してムハンマド・イブン・マフブーブやバシール・イブン・ムンズィルがとった行動としても伝えられる。SIYAR, I, 123-124.

[89] [al-Salimi 2010, 127]

ードとの連名の著作として伝えられた考えたほうがよいようにみえる。同書簡も，（i）と同じく『啓示法の解明』での引用は見当たらない。書簡は ammā ba‘du fa-inna-hu kāna badw al-īmān ‘alá al-ma‘rifa と，書簡に特有の冒頭表現はなく直ぐに本題に入り，また ḥattá yaḥbiṭa a‘māla-hum bi-hā wa dhālika bi-iṣrār tammat と唐突に終わる。一方，本文中には fa-balagha bi-ka al-qawl ilay-ya an taqūla inna Allāh lā yughadhdhibu aḥad^{an} min ahl al-tawḥīd bi-sayyi’at^{in} ‘amila-hā（MakKh1, 283）/fa-balagha bi-ka al-qawl inna Allāh lā yughadhdhibu aḥad^{an} min ahl al-tawḥīd bi-sayyi’at^{in} ‘amila-hā（MakSQ, 58）という表現がみられ，同著作が返答のために作成されたことがわかる。そして宛先は，上述の内容およびその直後に続く wa dhālika anna-ka taqūlu [inna] al-tawḥīd wa al-shahāda ma‘a al-īmān bi-nafsi-hi，すなわち神はタウヒードの徒に属す人間をその犯した悪行によって罰しない，そして信仰証言あるいは神の唯一性を承認する者は信仰者であるとする，後代にムルジア派的思想として紹介される思想を有する者とわかる。シャフラスターニーによれば，ムルジア派のうち，ウバイド・ムクタイブ（‘Ubayd al-Mukta’ib）とその支持者が，神は多神崇拝以外の罪を許すという見解を有していたことを紹介する[90]。このウバイドはムジャーヒド（Abū al-Ḥajjāj Mujāhid, d. 104 or 105/722 or 723）らのもとで学んでおり，アブー・マウドゥードやアブー・ウバイダの同時代人である。この書簡の論敵が誰かはわからないが，少なくとも 2 人が生きた時代には，著作中で述べられるような見解は存在しており，著作の原型成立時期に関して時代錯誤はないことがわかる。

書簡では，神が人間を創造したさい，人間に神を知るという本性（fiṭra）を創造したという話（cf. Q. 30: 30）にはじまり，信仰の後に不信仰が現れ，その不信仰はイブリースの罪への固執であったこと，アーダムは悔悟により罪を赦されたことが説明される。続いて書き手は，イブリースは人間を唆し，それにより人間は様々に迷妄の道を進むこと，クルアーンの引用とともに，悔悟によって神はその者の罪過を赦すこと，一方固執によって神はその者の善行を消滅させることが説明され，上記の反駁がはじまる。

書簡のテーマは，罪の由来と，固執と悔悟あるいは善行と悪行の問題である。アブドゥルラフマーン・サーリミーは，同書はイバード派による最初の神学的論考であると評価する[91]。人間の本性について，人間の本性と神の知に関する議論は古い。シャフラスターニーによれば，ガイラーン・イブン・マルワーン（Ghaylān b. Marwān al-Dimashqī, d. 105/723）

[90] al-Shahrastānī, *Kitāb al-Milal wa al-Niḥal*, I, 163.
[91] [al-Salimi 2010, 127]

は，神に関する知を①世界には作り手がいて，自分自身には創造者がいるという必然的かつ本性的な知，②現世において獲得によって得られる知の 2 種類に分類した[92]。神による人間の創造と神を知るという人間の本性が，本著作中で出ていることにも時代錯誤はみられない。そしてクダミーは，天性（fiṭra）についての議論で，預言者のハディースを取り上げる[93]。「天性」の議論における預言者のハディースの不在は，早い時代に執筆されたことを示す証拠として考えることができる。

また作者は，人類の宗教的分化を説明するが，人間が多神崇拝ではない背信であるものを犯す原因として，魂がこの世の快楽を欲すること，また心のかたくなさ，粗雑さ，傲慢さ，横柄さを挙げる。この心理的原因について，3/9 世紀前半のムニール・イブン・ナイイルの書簡では，多神崇拝の原因として，欲望の保持者が禁じられていると信じるものに走ってしまうことを挙げる[94]。またワーイル・イブン・アイユーブに帰される『イスラームの系譜』では，心を魂がもつ憎しみと嫉妬から清め，魂の持つ忌避されるものから舌を守り，そして魂が命じるものの悪さについての魂の反逆からも身を守るよう読者への呼びかけが行われている[95]。すなわち 2/8 世紀末から 3/9 世紀前半のイバード派においては，人間の活動の心理的側面に関心が向けられていたと考えることができ，本書もその問題を扱った著作として位置づけることができるのである。

さらに著作中では，殺人，窃盗，姦通，ワインを飲むこと，利子が大罪（kabbā'ir）の例として挙げられる。イバード派では 3/9 世紀以降大罪が様々に挙げられるが，本著作にはその影響はみられず，クルアーンに示される行為のみが挙げられている。そして固執と悔

---

[92] al-Shahrastānī, *Kitāb al-Milal wa al-Niḥal*, I, 168. イバード派の著作では，ムファッダル（al-Mufaḍḍal）という人物が「子どもはみな天性に基づいて生まれる」という預言者のハディースの「天性」を，神の知と解釈したと伝えられる。al-'Awtabī, *al-Diyā'*, III, 76.このムファダルが誰であるかは分からないが，ムファッダル・イブン・ウマル（al-Mufaḍḍal b. 'Umar）と考えた場合，同人はムファッダル・イブン・ウマル（al-Mufaḍḍal b. 'Umar）の父親である。al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, V, 338-339. そしてこのウマル・イブン・ムファダルは，オマーンにイバード派の知識を運んだバシール・イブン・ムンズィルを訪れたことが知られる。al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, V, 22. またムハンマド・イブン・マフブーブからハドラマウトのイバード派に送られた書簡では，ワッダーフ・イブン・ウクバやハーシム・イブン・ガイラーンの息子ムハンマド・イブン・ハーシムとともにウマル・イブン・ムファッダルの名が挙げられる。al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, I, 61. さらに彼はヒラール・イブン・アティーヤからの言葉を伝えるが，これが直接の見聞によるかはわからない。al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, LXIX, 29-30.このことからその父親のムファッダル・イブン・ウマルは 2/8 世紀後半から 3/9 世紀前半に活動した人物であり，内容面から，アブー・ウバイダとアブー・マウドゥードの同書簡の真正性を確かなものとする証拠になる。

[93] al-Kudamī, *al-Mu'tabar*, I, 46.

[94] SIYAR, I, 237.

[95] SIYAR, II, 50.

悟について，アブー・ウバイダは，固執者とは（固執の状態から）戻らず，後悔せず，悔悟しない者であると語ったとされ[96]，固執と悔悟の問題について考察できる状態にあったことがわかる。

以上のことを考えれば，同著作の原型がアブー・マウドゥードの存命中に執筆されたことは，十分に考えられると結論付けることができる。

そして（iii）について，本研究では用いなかったが，『書簡集』には両名に帰される書簡がもう一通採録される。上記（i）および（ii）の両著作と異なり，同書簡の一部は，『啓示法の解明』第 2 巻の，神を記述するさいに用いてよい表現に関する議論で引用される[97]。ウィルキンソンはアブー・ウバイダとハージブの著作として紹介し，用いている[98]。その冒頭は salām ‘alay-kum fa-innā naḥmadu Allāh alladhī lā ilāh illā huwa wa la-hu kull shay^{in} al-jabbār al-kabīr で始まり，wa-raḥima-nā Allāh wa-īyā-kum bi-mā raḥima bi-hi al-muttaqīn wa al-salām ‘alaykum wa raḥma Allāh で終わる。

アブー・ウバイダの書簡と同様に，本著作の主題は定命である。アブー・ウバイダの書簡同様に，管見の及ぶ限り，同著作はイバード派の著作では定命の文脈で引用されていない。書き手は fa-inna al-qadar ḥaqq^{un} khayra-hu wa sharra-hu とその立場を記述する。そして論敵として ahl al-shaghb wa al-taklīf/al-takalluf という集団が挙げられる。同集団は，神は人間がある行為を行う前に，その行為を人間に書いているという立場に反対する集団として描写され，ムウタズィラ学派やカダル派を指していると考えられる[99]。

A.2.2.3　ラビーウ・イブン・ハビーブ

（1）『ラビーウの伝承』（*Āthār al-Rabī‘ b. Ḥabīb*）

（2）『明証の書簡』（*al-Risāla al-Ḥujja*）

既述したように，北アフリカの学者シャンマーヒーは，アブー・スフラ・アブドゥルマ

---

96 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, V, 26.
97 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, II, 193.
98 [Wilkinson 2010, 222]; またウハイビーも両者の著作として書簡を紹介する[al-Wuhaybī 2006, 123]。アブドゥルラフマーン・サーリミーは，両者の著作として，自由意志と神の定命についてのイバード派の見解を論じていると簡単に説明する[al-Salimi 2010, 127]。
99 イバード派が予定説に立つことについて，例えばビスヤウィーの著作では「私はあなたの予定とあなたの定命に満足するように，あなたに問う」というムハンマドからの伝承が提示される。al-Bisyawī, *Jāmi‘ al-Bisyawī*, I, 193.

リク・イブン・スフラが伝承者である著作として（1）『ラビーウの伝承』に言及する。カハラーン・ハルースィー[al-Kharusi 2003]は，博士論文においてチュニジアおよびエジプトの図書館に保存される手稿本の一部を『ラビーウの伝承』として校訂した[100]。その冒頭では「これはジャービル・イブン・ザイドからドゥマーム・イブン・サーイブを経たラビーウ・イブン・ハビーブの伝承の第 1 巻である。我々にアブー・スフラ・アブドゥルマリク・イブン・スフラが話す。我々にハイサムが，ジャービル・イブン・ザイドから［伝わるものを］ドゥマーム・イブン・サーイブ，ラビーウ・イブン・ハビーブ経由で話す…」と記述される[101]。その形式からみると，ハルースィーが校訂した著作は，この『ラビーウの伝承』であるようにみえる[102]。

ウィルキンソンは，『ラビーウの伝承』は『ムスナド』とは関係がないこと，同著作には教義あるいは政治に関する議論が含まれていないこと，その見解がプロト・スンナ派ともプロト・イバード派とも区別がつかないことから，同著作はジャービル・イブン・ザイドがプロト・イバード派であったことへの否定的な証拠となると主張する[103]。

著作では，全 324 件の，1 行から 5 行ほどの短いジャービル・イブン・ザイドの見解が雑多に配列される。そのほとんどは礼拝，喜捨，巡礼，婚姻，離婚等の法学的見解である。ハルースィーは各伝承を説明した後で，ラビーウ・イブン・ハビーブの成立年代およびその真正性・信頼性について論じている。著作の帰属について，著作の冒頭で「アブー・スフラが報告する」という表現は，マーリク・イブン・アナスの『大ムダウワナ』でサハヌーン・イブン・サイードやアブドゥルラフマーン・イブン・カーシムの名が伝承の冒頭で現れ，シャイバーニーの『マブスート』の冒頭で「アブー・スライマーン・ジューザジャーニーが語る」と表現されることと同じ形式であり，『大ムダウワナ』や『マブスート』がそれぞれマーリク・イブン・アナスやシャイバーニーに帰されるように，ラビーウの伝承もラビーウ・イブン・ハビーブに帰してもよいとする。また成立年代について，ハルースィーは，マーリク・イブン・アナスが語る 2/8 世紀前半の法学の状況に著作の内容が合

[100] ウィルキンソンの説明によれば，『ラビーウの伝承』は「伝承」（riwāya）と「法的見解」（fatwá）からなり，このうちハルースィーの博士論文は，「伝承」の部分についての校訂および研究である[Wilkinson 2010, 190-192]。ハルースィーは，同著作は初期時代の伝承者の動向を明らかにする有益な情報を含んでおり，イバード派研究に価値のあるものであると説明する[al-Kharusi 2003, ix]。

[101] [al-Khurusi 2003, 38]

[102] またバッラーディーは『真理を知ることのための明証の書，すなわちドゥマーム，ラビーウ経由でアブー・スフラ・アブドゥルマリク・イブン・スフラが伝えるドゥマームの書』という名の著作に言及する[Ṭalibī (ed.) 1978, II, 284]。

[103] [Wilkinson 2010, 190-192]

致していること，また見解が無秩序に配列されていることなどを理由に，この著作は，ラビーウ・イブン・ハビーブによって 2/8 世紀前半（100-130/719-748）に纏められたと結論づける[104]。

（2）について，2009 年にオマーン国遺産文化省から公刊された『明証の書簡』（*al-Risāla al-Ḥujja*）は，バスラのイバード派の指導者ラビーウ・イブン・ハビーブ，マフラド・イブン・ウムッルド（Abū Ghassān Makhlad b. al'Umurrud），ワーイル・イブン・アイユーブらの連名による書簡と伝えられる。校訂者スライマーン・ワルジラーニーはその解説の中で，同書簡はジャイターリーの『諸善のそり橋』（*Qanāṭir al-Khayrāt*）の手稿本の欄外に筆写されていること，同写本の筆写年はヒジュラ暦 825 年であることを記述する。シャンマーヒーの著作には，同書簡の内容に一致する歴史的出来事が要約的に記載される[105]。

書簡の序文では，書簡はマッカで作成されたこと，マフラド・イブン・ウムッルドがアブドゥルラフマーン・イブン・ムハンマド（Abū Muḥammad ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad b. Maslama）に，後世のムスリムたちの明証となるように，当該書簡を筆写（naskh）するよう命じたことが記される。そして 170/787 年のルスタム朝におけるヌッカール派の乱をはじめとする歴史的経過が語られる。アブー・ウバイダのもとを追放された，シュアイブ・イブン・マアルーフ（Abū al-Ma‘rūf Shu‘ayb b. al-Ma‘rūf, d. after 170/787），アブー・ムアッリジュ（Abū al-Mu‘arrij ‘Amr b. Muḥammad al-Sadūsī），そしてアブドゥッラー・イブン・アブドゥルアズィーズ（‘Abd Allāh b. ‘Abd al-‘Azīz）ら 4 人の若者が，アブー・ウバイダらの死後，自らの思想をイバード派の知識の乏しい者（al-ḍa‘f）に吹き込むようになる。これに対しバスラのイバード派は，それらの言葉に惑わされないように呼びかけた。そしてシュアイブ・イブン・マアルーフはエジプトへ行き，ルスタム朝イマーム，アブドゥルワッハーブ・イブン・アブドゥルラフマーン・イブン・ルスタムのイマーム位を認めず，反乱を起こすことになる。書簡中では，西暦 800 年代初頭にルスタム朝下で起きた第 2 のイバード派の分裂や，ラビーウの世代後の学者については説明されない。

書簡の宛先は不明である。また連名になっているが，ラビーウ・イブン・ハビーブは三人称で描かれるため，同人が本書簡の執筆者である可能性は低いようにみえる。執筆者の 1 人とされるマフラド・イブン・ウムッルドの没年は不詳であるが，アブー・ウバイダか

[104] [al-Khurusi 2003, 139-144]
[105] al-Shammākhī, *Kitāb al-Siyar*, I, 134-136.

ら学んだことが伝えられる。また彼が書簡の書写を命じたアブドゥルラフマーン・イブン・ムハンマドは，マディーナ出身で，同じくアブー・ウバイダから学んだことが知られている。シャンマーヒーは，彼をヒジュラ暦 150-200 年に活動した人物として言及する[106]。書簡冒頭の記述に従えば，書簡の原型はヒジュラ暦 2 世紀末から 3 世紀初頭に求めることができる。

書簡ではシュアイブ・イブン・マアルーフ以前に起きたアブー・ウバイダとサフル・イブン・サーリフ（Sahl b. Ṣāliḥ）との意見の対立と，アブー・ウバイダによるサフルの追放が語られる。対立の原因となった問題については明言されていないが，追放後に彼がアブー・マウドゥードのもとへ行き，語ったものによれば，キブラの徒が論争している問題でについて，サフルはアブー・ウバイダにイバード派の見解を聞こうとしたこと，アブー・ウバイダはイバード派の見解にすでに同意し，正しいとしていたため，怒り，サフルを追放したと説明される。

ダルジーニーの人名録には，同書簡で語られる，アブー・ウバイダと若者たちの対立の話を思わせる話が採録される。そこでの意見の対立は，最果ての土地（ghurba min al-arḍ）のこのキリスト教徒の男がマギ教徒をキリスト教に呼びかけ，マギ教徒がそれに応えて改宗したらどうなるかという問題であり，アブー・ウバイダは，そのマギ教徒は「ムスリム」であると応えた。これに対してサフルを含む若者たちは，教宣者の男は「ムスリム」であり，応答者は不信仰者であるとした。このあと若者たちは自らの見解を繰り返すと，アブー・ウバイダは怒り，出て行けと言い彼らにバラーアを宣告したとされる[107]。

同一の内容を扱っているが，登場人物の役割の違い[108]など，話が細部で異なっている。また用いられている言葉も異なる。このことは，同一事件を異なる人物が記したことを意味し，書簡の真正性を支持する証拠となる。『明証の書簡』では，その後に現れたシュアイブ・イブン・マアルーフ，アブー・ムアッリジュ，そしてアブドゥッラー・イブン・ア

---

[106] al-Shammākhī, *Kitāb al-Siyar*, I, 111.

[107] al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā'ikh bil-Maghrib*, I, 242. 『啓示法の解明』では，アッザーン・イブン・サクルが伝えるものとして，宣教者は「ムスリム」で応答者は不信仰者であるとする見解は，シュアイブ・イブン・マアルーフに帰される。al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, II, 303.

[108] ダルジーニーの伝承では，以下のように説明される。アブー・マウドゥードがアブー・ウバイダのもとへ行き，若者たちが悔悟していることを伝えると，アブー・ウバイダは彼らをラビーウ・イブン・ハビーブとアブドゥルサラーム・イブン・アブドゥルクドゥース（'Abd al-Salām b. 'Abd al-Qudūs）のもとに連れて行き，両者に悔悟を知らせろと答えた。彼らはラビーウのもとへ行ったが，ラビーウは彼らの話を知らず，彼らは悔悟をしたので，ラビーウは彼らとともにアブー・ウバイダの元へ行き，彼に彼らの悔悟を知らせた。

ブドゥルアズィーズは，サフル・イブン・サーリフの見解を支持したと説明されており，話の内容は一致する。

シュアイブ・イブン・マアルーフらの主張の中には，法学的問題として 3 つの問題が挙げられる。すなわち（a）不正なイマームのもとには集まってはいけないので，金曜礼拝を行う必要はないこと，（b）酩酊飲料を飲む男たちの頭からその飲み物を注ぎ，また男たちの一人一人の男根を膣内に挿入させることなく，太腿の間で挟むあるいは膣外で射精させ，赦しを乞うことも悔悟もしない女性について，その女性は不信仰者ではないこと，（c）そしてキブラの徒の一部は多神教徒であるという主張があったことである。回答では，（a’）金曜礼拝は神が定めた義務であり，2 ラクアをすることを求めている。また（b’）女性は不義者であり，不信仰者であること，そして（c’）キブラの徒は多神教徒ではないことが語られる。金曜礼拝については，上述のジャービル・イブン・ザイドの書簡にもみられる問題であり[109]，また男たちに対する女性の行為とその地位についても，フランチェスカが説明する「古風な問題」として取り扱うことができるだろう。

そして 3 番目の問題である，①アズラク派やスフラ派，そしてすべての al-Khawārij が，キブラの徒を多神教徒と名付け，預言者が多神教徒に下した法規定を彼らに定めたこと，②それによりムスリムたちは al-Khawārij の分派すべてと袂を分けた（‘alá hādhā fāraqa al-muslimūna aṣnāf al-Khawārij kullahā）ことについて[110]，クローネとツィンマーマンは「al-Khawārij とは，自らに属さないキブラの徒を多神教徒と名付ける集団である」という al-Khawārij の否定的表現は，西暦 9 世紀以降にみられるとする[111]。一方『啓示法の解明』では，同時代の学者で，ラビーウ・イブン・ハビーブのもとで学んだムーサー・イブン・アビー・ジャービルが「al-Khawārij はタウヒードの徒を多神教徒の地位に据えている」と論じたことが記録される[112]。ムーサー・イブン・アビー・ジャービルは 181/797 年に没している。このことを考えれば，al-Khawārij の否定的表現はヒジュラ暦 2 世紀後半（西暦 8 世紀後半）には知られた考え方で，そして 9 世紀には確立された表現であったと考えることができる。そのため『明証の書簡』における多神崇拝の語を用いた al-Khawārij の否定的表現も，時代錯誤ではないようにみえる。

---

[109] 金曜礼拝については，後述するマフブーブ・イブン・ラヒールの書簡でも取り上げられている。SIYAR, I, 291.

[110] al-Rabī‘ b. Ḥabīb al-Farāhīdī, Mukhlad b. al-‘Umurrud wa Wā’il b. Ayyūb, *al-Risāla al-Ḥujja*, 54-58.

[111] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 275-278]

[112] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 171.

以上のことを踏まえると，同書簡はラビーウ・イブン・ハビーブがしたためた書簡と考えることは難しいが，その冒頭にあるように，ムフラド・イブン・ウムッルドのようなラビーウ・イブン・ハビーブの近くにいた人物が，当時の状況を後日まとめて書いた書簡であると考えることができよう。

B.2.2.4　ワーイル・イブン・アイユーブ

『イスラームの系譜』（*Sīra ‘an al-Shayḥ al-Imām Wā’il b. Ayyūb* (*Nasab al-Islām*)）（SIYAR, II, 46-61 (no.24); MakS, 20-27; MakSQ, 182-190; MakKh2, 140a-144a）

『イスラームの属性』（*Ṣifa al-Islām*）

ヒジュラ暦 2 世紀後半（西暦 8 世紀末）のバスラのイバード派の指導者であったワーイル・イブン・アイユーブに帰される著作として『イスラームの系譜』（*Nasab al-Islām*）および『イスラームの属性』（*Ṣifa al-Islām*）の 2 件がある。前者について，アブドゥルラフマーン・サーリミーはその博士論文において，イブン・バラカ（Abū Muḥammad ‘Abd Allāh b. Muḥammad b. Baraka, d. between 342-355/953-966）の『結びつけること』（*al-Taqyīd*）という著作中に採録された「我々に手紙を送ったホラーサーンの同胞へ」という書簡中に，この『イスラームの系譜』がほぼそのままの形で引用されていることを明らかにした。この書簡に採録された『イスラームの系譜』には，ワーイル・イブン・アイユーブの名は見当たらない。アブドゥルラフマーン・サーリミーはこのホラーサーンの同胞への書簡の執筆時期を，4/10 世紀に定める[113]。これに基づけば，同著作は，遅くとも 4/10 世紀には存在が知られていたと考えることができる。

前節で紹介した『書簡集』の 1 番目および 2 番目の型では，『イスラームの系譜』は 5/11 世紀のアウタビーの著作と 4/10 世紀のビスヤウィーの著作に挟まる形で採録される。一方『イスラームの属性』は，オマーン国国家遺産文化省から出版された『イブン・ジャアファルの集成』（*al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*）の第 1 巻に収録される[114]。同箇所ではイブン・ルスタムの書簡やハラフ・イブン・ズィヤードの *Sīra* など，いくつかの著作からの引用に続く形で採録されており，直前では「私は真に信仰者です」（innī mu‘min ḥaqq^{an}）という表現をめぐる議論が展開される。

[113] [al-Salimi 2001, 100] サーリミーは，2 つの異なる書簡が 1 つにまとめられ，ホラーサーンの民への書簡が作成されたとする。

[114] Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 98-115.

研究者による著作の使用状況について，ウハイビーは『イスラームの系譜』をワーイルによる著作として，ヒジュラ暦 2 世紀のイバード派思想の究明のために用いる。クローネは，ハワーリジュ派あるいは少なくともイバード派は，初期の他のムスリムたちと同じように，公正な指導者たちを神の代理（khalīfa Allāh）として理解していたとし，その証拠として『イスラームの系譜』の関係箇所を引用する[115]。またファン＝エスは，ワーイル・イブン・アイユーブの著作として『イスラームの属性』に言及する[116]ほか，クックはイバード派における「善を命じることと悪を禁じること」を考察するさい，ワーイル・イブン・アイユーブの著作として『イスラームの系譜』に言及する[117]。

『イスラームの系譜』と『イスラームの属性』には宛名が書かれておらず，両著作は特定の人物に宛てて作成された書簡ではないようである。『イスラームの系譜』は，Allāh rabbu-nā wa Muḥammad nabiy-nā wa al-qur'ān imāmu-nā wa bayt al-ḥarām qiblatu-nā wa al-Islām dīnu-nā という表現とともにはじまるが，同表現の類似のものが，アブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーによる，サナアでのフトバ（nada'ū ilá Allāh…al-Islām dīnu-nā wa Muḥammad nabiy-nā wa al-ka'ba qiblatu-nā wa al-qur'ān imāmu-nā）にみられる[118]。

『イスラームの系譜』では，最後の部分で「2 つの地位の間の徒」（ahl al-manzila bayna al-manzilayn）が，イスラームに入り，イスラームの権利義務を承認し，ムスリムたちに同意（al-riḍā）を示したものの，彼らの教義に隠れた欠陥の方へと消えてしまった（ghābū ilá ghayy-him）と説明される[119]。「2 つの地位の間の徒」はムウタズィラ学派をさす語である。さらに同著作では，受け入れられない主張をする者として，①定命はないと主張し，人間に神の事柄を委ねられていると主張する者，②信仰は言葉であり，行為は含まれないと主張する者，③信仰告白をした一神教徒を多神崇拝者と名付ける者，④神人同形説を唱える者，⑤見神を支持する者，⑥神による火獄の威嚇は無効であるとする者，⑦一神教徒の背信者は，火獄へ行った後に楽園に入ると主張する者，を挙げる[120]。

『イスラームの系譜』には，クルアーンの引用とともに，後代に預言者ムハンマドに帰される「最も強固なイスラームとは，神の友を愛し，神の敵を憎むことである」という表

---

115 [Crone 2000, 85]
116 [van Ess 1992-1997, IV, 754]
117 [Cook 2000, 424]
118 al-Balādhurī, *Ansāb al-Ashrāf*, IX, 288.
119 SIYAR, II, 60; MakS, 26; MakKh2, 144a. SIYAR では ghābū が ghalabū となっている。
120 SIYAR, II, 51.

現がみられる[121]。またイスラームの諸義務行為の実践を履行した者はワラーヤの認定，怠った者はバラーアの宣告に値するという説明は，『イスラームの属性』とともに著作における中心的テーマの 1 つであるが，そこにはイマームのワラーヤとバラーアを巡って 3/9 世紀末に起きた，オマーンのイバード派の分裂の思想的影響はみられない。また『啓示法の解明』に採録されたガラーファキー（Abū Bakr Aḥmad b. Muḥammad b. Ṣāliḥ al-Ghalāfaqī, d. 576/1180）の信仰箇条[122]そしてスィルハーン・イズカウィー（Sirḥān b. ‘Umar b. Sa‘īd al-Izkawī, d. after 1140/1728）の『共同体の伝承を集めた悲しみの開示』（*Kashf al-Ghumma al-Jāmi‘ l-Akhbār al-Umma*）に採録された信仰箇条では，誰にバラーアを宣告するかが抽象的な表現で語られる。一方『イスラームの系譜』と『イスラームの属性』には，そうした部分は挿入されず，これらの形の信仰箇条が執筆される前に成立したものと考えられる。また人間の宗教的分類において偽信者として表現される集団は「（イスラームの）告白をしたキブラの徒で悪事を犯した徒」（ahl aḥdāth fī al-iqrār min ahl al-qibla）と表現される[123]。同表現は，後述するハラフ・イブン・ズィヤードの書簡にもみられ，両著作が比較的近い時期に執筆されたことを示している。

『イスラームの系譜』の執筆年代を把握する手がかりは，3/9 世紀の北アフリカの学者イブン・サッラームの書中にある。同書には，ルスタム朝のイマーム，アブドゥワッハーブ・イブン・アブドゥルラフマーンによる「トリポリの民への書簡」が続く。挿入という形のため，同書簡の終わりがどこまでかは不明瞭だが，クルアーンにもみられるイスラームの信仰証言と諸義務の列挙，そしてそれらを実践した者にワラーヤが与えられること，そうでない者はアダーワに相当すること，さらに罪を犯した者についての規定などが説明される[124]。つまり 2/8 世紀後半のイバード派には，自派の信仰と実践を解説する文章を作成する習慣があったと考えることができ，したがって『イスラームの系譜』のような著作の原型がワーイル・イブン・アイユーブの存命中に作成されたと結論付けることに，何ら問題はないようにみえる。

一方『イスラームの属性』について，同著作では，執筆年代を特定できるような社会情勢あるいは事件，また人物への言及はみられない。冒頭は al-Islām shahāda an lā ilāh illā Allāh

---

121 SIYAR, II, 60.
122 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 295-296.
123 SIYAR, II, 53.
124 またこの書簡の直前で展開される，イスラームの諸義務についての解説は，アブドゥルワッハーブのこの書簡の内容を含んでいる。Ibn Sallām, *Kitāb fī-hi Bad’ al-Islām wa Sharā’i‘ al-Dīn*, 86-93.

waḥda-hu lā sharīk la-hu wa anna Muḥammad[an] ‘abdu-hu wa rasūlu-hu と始まり，いわゆる「六信五行」などの説明が続き，それらを内面（sirr）でも外面（alāniya）でも遵守した者には，ワラーヤと信仰の名が認められる一方，反する者にはバラーアと不信仰が定まるとする。すなわちその記述は信条に関する内容よりも，儀礼行為やふさわしいふるまいの列挙に重点がおかれており，その点「トリポリの民への書簡」とほぼ同じ形式になっている。

また同著作には，4/10 世紀以降の著作で語られる「ワラーヤとバラーアは果たさなければならない義務である」（al-walāya wa al-barā’a farīḍatān wājibatān）という，ワラーヤとバラーアの義務性に関する表現がみられるほか[125]，サーリム・イブン・ザクワーンや 3/9 世紀の学者ムニール・イブン・ナイイルの各書簡に用例がある，タキーヤの圏域（dār al-taqiyya）という表現がみられる。

B.2.2.5　マフブーブ・イブン・ラヒール

（1）『アブー・スフヤーンの書』（*Kitāb Abī Sufyān*）

（2）「ハールーン・イブン・ヤマーンについてのオマーンの徒への書簡」（*Sīra ilá Ahl ‘Umān fī Amr Hārūn b. al-Yamān*）（SIYAR, I, 276-307 (no.7); MakS, 298-307; MakSQ, 162-174; MakKh2, 95b-104b (incomplete)）

（3）「ハールーン・イブン・ヤマーンについてのハドラマウトの徒への書簡」（*Sīra ilá Ahl Ḥaḍramawt fī Amr Hārūn b. al-Yamān*）（SIYAR I, 308-324 (no.8); MakS, 307-312; MakSQ, 174-182; MakKh2, 95b-104b (incomplete)）

バッラーディーの報告によれば，（1）には，歴史的出来事（akhbār）のほか，法学（al-fiqh）や神学（al-kālām），また信仰箇条（al-‘aqā’id）に関する教説が含まれていた。先のアフラフ・イブン・アブドゥルワッハーブの言葉が示すように，北アフリカのイバード派共同体では，同書が高い権威を有していた。そしてアフラフの言葉は，この『アブー・スフヤーンの書』は，遅くとも 3/9 世紀には成立していたことを示している。

ウィルキンソンは，この『アブー・スフヤーンの書』について，証明することはできないと前置きしつつ，イバード派では，ある学者に帰される著作が，その弟子あるいはその弟子の弟子によって編纂されていることから，同書はアブー・スフラ・アブドゥルマリク・

[125] 例えば，SIYAR, I, 133.

イブン・スフラが，彼の師であるマフブーブ・イブン・ラヒールから聞いたものを，北アフリカのイバード派，とくにアフラフのために編纂したものであるという仮説を提示する[126]。『アブー・スフヤーンの書』の編纂者について言及する同時代以降のアラビア語資料はなく，また「アブー・スフヤーンの書からの引用」と明言する，3/9 世紀から 4/10 世紀に執筆されたイバード派の著作は，現在までのところ見つかっていないようにみえる。また『アブー・スフヤーンの書』は散逸し，その全体像は不明である。マフブーブ・イブン・ラフールから伝わるものとして，『啓示法の解明』や北アフリカで編纂された人名録などにみられる記述は，この『アブー・スフヤーンの書』からの抜粋と考えることができるかもしれない。

（2）および（3）について，マフブーブ・イブン・ラヒールは，バスラのイバード派の分裂に関して，ハドラマウトとオマーンの人びとに対して書簡をしたためた。両書簡は『書簡集』では連続して採録され，第 1 および第 2 の型ではその後にハールーン・イブン・ヤマーン（Hārūn b. al-Yamān）が，マフブーブ・イブン・ラヒールについてオマーンのイマーム，ムハンナー・イブン・ジャイファルに宛てた書簡が続く。ウスマーン・イブン・アビー・アブドゥッラーが，ムハッキマはハールーン・イブン・ヤマーンを長とするハールーン派（al-Hārūniyya）とマフブーブ・イブン・ラヒールに連なるマフブーブ派の 2 つに分かれたと説明するように[127]，ハールーン・イブン・ヤマーンはバスラのイバード派から分離し，イエメンを活動の拠点としたイバード派の枝派の長である[128]。

マフブーブ・イブン・ハビーブはムハンナー・イブン・ジャイファルのイマーム就任以前には死亡したと考えられている。そのため，オマーンに宛てたマフブーブ・イブン・ラヒールの書簡と，ハールーン・イブン・ヤマーンの書簡の関係についていえば，先行するハールーン・イブン・ヤマーンの思想に対してマフブーブ・イブン・ラヒールが応答し，そしてそれに対してハールーン・イブン・ヤマーンが，彼の死後，ムハンナー・イブン・ジャイファルに向けて応答したという流れを想定できる。またハドラマウトの民に送付された書簡について，書簡の冒頭には送付されるいきさつは書かれていないため，それがハドラマウトの民への返書であったのかどうかはわからない。

---

126 [Wilkinson 2010, 163]

127 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 208-209.

128 『イブン・ジャアファルの集成』には，当時のイエメンの人びとが，ハールーン・イブン・ヤマーンの教えに従っていたことを知らせる内容が掲載されている。Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 226.

オマーンの徒に宛てられた書簡は，ハールーン・イブン・ヤマーンの思想に関するオマーンの民からの書簡を受け取ったマフブーブ・イブン・ラヒールが，ハールーンの思想の誤りをオマーンの民に伝えるために書をしたためた，という形式になっている。書簡中では，イバード派による人間の宗教的分類の方法，ハワーリジュ派とイバード派の関係，神の擬人的解釈そして罪の問題が論じられ，当時のイバード派の思想の形成と展開を知る上で貴重な著作となっている。人間の宗教的分類に関する説明では，イバード派以外のキブラの徒に対し，偽信者や不信仰者そして不義者などの語を付し，また解釈の違いによるイスラーム共同体の分裂にも言及するが，それらに対して西暦 9 世紀半ば以降の著作にみられる忘恩（kufr al-ni‘ma）の語は用いられていない。また書簡の作者は，イバード派の先人に言及する際，ジャービル・イブン・ザイドやアブー・ウバイダら 1/7 世紀から 2/8 世紀のバスラで活動した指導者，人物，学者の活動に触れる一方，イバード派の名祖イブン・イバードには言及せず，また 3/9 世紀以降に活動した人物の名も挙げていない。

そして『書簡集』に採録される多くの書簡と異なり，マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡は，4/10 世紀に執筆された著作の中に言及がみられる。すなわちビスヤウィーは「ムハンマド・イブン・サイードへの反論」において，オマーンの民に宛てられたマフブーブ・イブン・ラヒールの書簡の一部を引用する[129]。クローネとツィンマーマンは，マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡は西暦 815 年頃に執筆されたと主張する[130]が，これを踏まえると，彼らが主張するように，マフブーブ・イブン・ラヒールによる著作と考えることができる。

一方ハドラマウトの民に送付された書簡について，オマーンの民への書簡と同じように，同書簡でもイバード派の先人が言及されるほか，人間の宗教的分類の方法が語られ，キブラの徒を多神教徒と名付けるハワーリジュ派諸派への批判が展開される。また金曜礼拝についてのジャービル・イブン・ザイドの実践が報告される。書簡の形式について，オマーンの民への書簡では，ハールーンの主張が取り上げられ，それに対して作者が反駁を加えるという形式がとられていたが，ハドラマウトの民への書簡は，作者による一方的な説明という形式になっている。また「ハールーン・イブン・ヤマーンについて」と表題が付されているが，ハールーンを直接名指しで批判してはいない。イブン・イバードへの言及の不在，3/9 世紀に活動した人物への言及の不在，そしてオマーンの民への書簡の内容との類似性から，同書簡はオマーンの民への書簡とほぼ同時期に執筆されたものと考えること

[129] SIYAR, II, 108. また後代の人物による挿入の可能性もあるが，『イブン・ジャアファルの集成』にも一部引用がみられる。Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 170-172.
[130] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 277]

ができる。

このほかダルジーニーは，イエメンのイバード派政権を打ち立てたアブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーに宛てたとされる，マフブーブ・イブン・ラヒールの手紙（‘Ahd）を人名録中に全文掲載する[131]。同手紙はバッラーディーによってもその名が伝えられる[132]。しかしながらアブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーとマフブーブ・イブン・ラヒールは，活動時期が異なるため，その扱いをめぐっては研究者の対応は異なっている。ファン＝エスは，同著作は別人に宛てられたマフブーブ・イブン・ラヒールの書簡であるとし，またクーペルリーも同人の作として使用する。イバード派のムスリム研究者も，同じくマフブーブ・イブン・ラヒールが別人に宛ててしたためたものとして扱っている。一方クローンとツィンマーマンは，ファン＝エスの主張は検証する必要があると述べている[133]。

また北アフリカの学者ジャイターリーは，「マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡」からとする引用を著作中で提示するが，当該部分は，上記の書簡にはみられない内容である[134]。上記 2 つの著作の他にも，北アフリカのみに伝わった，あるいはオマーンのイバード派の間では散逸してしまった書簡があるようにみえる。

B.2.3　2/8 世紀に活動した人物に帰される著作

B.2.3.1　アブー・マウドゥード

（1）「アブー・マウドゥードの書簡」

（*Risāla Abī Mawdūd ilá man balagha-hu kitābu-nā hādhā min al-Muslimīn*）（MakS, 576-578 (incomplete); MakSQ, 67-74; MakKh1, 150-159）

（2）「アブー・フッルへの書簡」

（*Risāla Abī Mawdūd Ḥājib ilá Abī al-Ḥurr*）（MakSQ, 63; MakKh1, 290-291）

（1）書簡の一部は『啓示法の解明』に引用されており[135]，6/12 世紀には知られた著作であったことがわかる。書簡は salām ‘alay-kum fa-innā naḥmadu Allāh alladhī lā ilāh illā huwa wa nūṣī-kum bi-taqwá Allāh wa nada‘ū ilay-hā bil-nuṣḥ で始まり，wa salām ‘alá jamī‘ man

[131] al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā’ikh bil-Maghrib*, II, 279-290.
[132] [Ṭalibī (ed.) 1978, II, 284]
[133] 以上は[van Ess 1992-1996, II, 224][Cuperly 1983, 29][Crone and Zimmermann (ed. and. tr.) 2001, 312]による。
[134] al-Jayṭālī, *Qanāṭil al-Khayrāt*, I, 183.
[135] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, XXVIII, 139-140.

sallama Allāh ‘alay-hi wa nas’alu an yajma‘a qulūb jamā‘a al-muslimīn wa al-mu’minīn ‘alá ṣaḥbati-hi wa ṭā‘ati-hi thumma yajma‘a bayna-nā wa bayna-kum fī jannāt al-na‘īm ṣallá Allāh ‘alá Muḥammad al-nabiy wa ‘alay-hi al-salām で終わる。

同著作の帰属をめぐっては，若干の見解の相違あるいは混乱がみられる。現代の研究者は，同書簡を，アブー・ウバイダと行動を共にした，アブー・マウドゥード・ハージブ・イブン・マウドゥードの著作とする[136]。『書簡集』のうち MakS では，不完全な形ではあるが，「アブー・マウドゥード・ハージブの書簡」として，「サーリム・イブン・ザクワーンの書簡」の後，「ハラフ・イブン・ズィヤードの書簡」の前に採録される。また 4 番目の型では，「アブー・マウドゥードの書簡」として，「アブー・ウバイダとハージブの時代に書かれたオマーンの民への書」の後，「イマーム，ガッサーン・イブン・アブドゥッラーへのアブー・マウドゥードの忠言」の前に採録される。MakKh1 では，同じく「アブー・マウドゥードの書簡」として，「ハラフ・イブン・ウズラに宛てたムハンマド・イブン・マフブーブの書簡」の後に採録される。

同書簡には「ムスリムたちの教えには，以下のものがある。背信行為の大罪を犯した者，あるいは背信の小罪に固執する者，あるいは神について，神がその書の中で啓示した真理や預言者の慣行，あるいは神の友たちの慣行や彼らが信じていたものと異なることを言う者は皆，悔悟するまで道を誤った者であり，不信仰者である」という表現があるが[137]，これと類似の表現が『啓示法の解明』では「アブー・マウドゥード・ハビーブ・イブン・ハフス・ハージブの書簡から」と紹介される[138]。一方 13/19 世紀のサアディーによる『シャリーア辞典』では，単に「アブー・マウドゥードから」と紹介される[139]。

アブー・マウドゥード・ハビーブ・イブン・ハフス（Abū Mawdūd Ḥabīb b. Ḥafṣ）について，アブー・マウドゥード・ハージブの孫であるとする説もあるが[140]，それについての証拠はなく，彼の経歴は不詳である。『書簡集』には上述の「イマーム，ガッサーン・イブン・アブドゥッラーへのアブー・マウドゥードの忠言」（*Naṣīḥa Abī Mawdūd lil-Imām Ghassān b. ‘Abd Allāh*）が採録されているが，その表題から判断する限り，彼がヒジュラ暦 2 世紀末／西暦 9 世紀初頭に生きていたことが確認される。同忠言は ammā ba‘du fa-inna al-muslimīn

136 [al-Wuhaybī 2006, 149]; [al-Salimi 2010, 128]
137 MakS, 577; MakSQ, 70; MakKh1 152.
138 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, V, 59.
139 al- Sa‘dī, *Qāmūs al-Sharī‘a*, X, 130.
140 [al-Sa‘dī 2007, I, 135-137]

min ṣulaḥā' 'ibād Allāh で始まり，忠言の一部は，アブー・アブドゥッラー・キンディーの『啓示法の解明』に引用される[141]。忠言の書き手は，読み手に対して，イスラームの基礎とは正義と公正であること，また敬虔な徒の善を受け取り，臣民の過ちを赦すこと，預言者ムハンマドや人びとを導く指導者（imām al-hudá）が進んだ道を歩むことなど，イマームが行うべき事柄を説明する。同忠言では契約（mīthāq）や（預言者の命令を）聞くことと従うこと（al-sam' wa al-ṭā'a）という，アブー・マウドゥードをはじめとする 2/8 世紀に活動した人物に帰される書簡にみられる表現が欠如している。この文体上の観点などから，忠言の作者は「アブー・マウドゥードの書簡」の作者ではないことが推定される[142]。

「アブー・マウドゥードの書簡」中には，アブー・バクルやウマルへの言及はみられるが，時代を特定するような人物，出来事への言及はみられない。指導者が誤ることは，人びとにとっては重大で甚だしい誤りとなることなど，イマーム論が主題となっている。そのため，イバード派の政権がイスラーム世界各地で樹立された時期以降に執筆されたと考えることができよう。また 3/9 世紀半ば以降に話題に上る，1 つのミスルに複数のイマームがいることなどの問題については言及されず, さらに書簡では物事が不明瞭な場合には，ウクーフが認められることが説明されるが，3/9 世紀後半に執筆された，オマーンのイバード派政権のイマーム，サルト・イブン・マーリク宛の書簡にみられるような，体系的な説明とはなっていない。このほか「魂を売るイマーム」や「防衛のイマーム」という概念にも言及されない。これらの点は，同書簡がそうした問題について理論や実践が整備される前に執筆されたことを示すものである。

書簡では，協議（shūrá）の原則とその功徳は，正しいことをする時に，イマームの前で知識の徒が集まり，真理を求めることであること，協議の実施はクルアーンやムハンマドのスンナ，また正しいと証明された健全な者たちの事績にも見られるものであり，それに基づいて学者たちはイマームに忠言をすること，イマームは，学者たちを集め，イマームと学者たちに義務である，神の真理（の施行方法）について学者たちに助けを求めることなど，統治の方法が説明される。すなわち同書簡は，各地方にイバード派政権が樹立されたさい，それを維持，運営するための指針として，バスラのイバード派集団から送付され

[141] al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, XXVIII, 140.

[142] 2/8 世紀の著作にみられる mīthāq や al-sam' wa al-ṭā'a という表現は，例えば MakS, 576; MakSQ, 67, MakKh1, 150, 151（アブー・マウドゥードの書簡）; MakS, 583, 584, MakSQ, 107; 215, 216（ハラフ・イブン・ズィヤードの書簡）; MakSQ, 53; MakKh1, 277（マグリブの徒へのアブー・ウバイダとアブー・マウドゥードの連名による書簡）.

た書簡であると考えることができる。

（2）アブー・フッル・アンバリー（Abū al-Ḥurr ‘Alī b. Ḥusayn al-‘Anbarī）はマッカを中心に活動した人物である。ウマイヤ朝カリフ，ウマル 2 世への使節団に随行する[143]など，その活動はマフブーブ・イブン・ラヒール経由で，ダルジーニーの人名録で説明される[144]。

アブー・フッルにはアラビア半島南部で蜂起したアブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーに宛てたと伝えられる書簡がある。書簡の一部は，7/13 世紀の学者ジャイターリーが引用するほか，その引用部分を含んだより長い書簡の一部が，ファルハート・ジャアビーリーによるムフタール・イブン・アウフ（Abū Hamza al-Mukhtār b. ‘Awf, d. 130/747）についてのモノグラフの巻末に付録されている[145]。ジャイターリーは，ウラマーがとるべき資質に関する章の中で，書簡の一部を引用し，これは長い書簡の一部で，『指導者たちの諸書簡』（*Rasā’il al-‘Aimma*）に採録されていること，その中には預言者の時代についてのことをはじめ，マシュリクのイバード派やマグリブのイバード派の動向が記されていることを報告する[146]。

手元にある MakSQ および MakKh1 に採録された書簡の一部は，アブー・アブドゥッラー・キンディーの『啓示法の解明』で「アブー・ハサン」（Abū al-Ḥasan）への書簡として言及される表現と一致する[147]。Abū al-Ḥurr と Abū al-Ḥasan の書き間違いは，あり得るようにみえる。本研究では取り上げなかったが，同書簡では書き手が旅行（irtaḥaltu）中に体験したことがらが記述されている。

B.2.3.2　ハラフ・イブン・ズィヤードの著作

---

[143] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, LIX, 69.
[144] al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā’ikh bil-Maghrib*, II, 269-270.
[145] [al-Ja‘bīrī 2009, 173-176] ジャアビーリーは出典元などその書誌情報を詳しく説明していない。同書簡の標題には，アブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーがアラビア半島南部でイマームとなったときに，アブー・フッルが彼に宛てて書いたと説明される。内容は来世志向の生活を送ることを求めている。そしてアブー・バクルとウマル，アンマール・イブン・ヤースィル，またアブー・ビラールやジャービル・イブン・ザイドらの活動について，さらにその反対にウスマーンやアリー，ズバイルやムアーウィアらの活動についても考えるように求めている。
[146] al-Jayṭālī, *Qanāṭil al-Khayrāt*, I, 170. また，シャンマーヒーは，アブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーについての説明の中で，アブー・フッルが「アブー・ヤヒヤー」に書簡を送った（kāna yukātibu abā Yaḥyá）と語る。同部分はイブン・ヤヒヤーと読み替えることもできる。al-Shammākhī, *Kitāb al-Siyar*, I, 92.
[147] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, II, 193.

（*Sīra Khalaf b. Ziyād al-Baḥrānī*）（MakS, 583-613; MakSQ, 107-136; MakKh1, 215-254）

ハラフ・イブン・ズィヤードの著作として現在まで伝わるものは一点（*Sīra Khalaf b. Ziyād al-Baḥrānī*）のみである。同著作について，ウハイビー[al-Wuhaybī 2006, 140]は，ブー・サイーディー図書館所蔵の『書簡集』中に採録されたものを紹介する。すでに示したように，同書簡はいくつかの『書簡集』中に採録される。同著作は 20 葉ほどと，比較的長い分量を有する。研究者の使用状況について，クローネとツィンマーマンは，同著作の帰属が正しいかについてはまだ立証されていないとする[148]。一方ウハイビーは，ヒジュラ暦 2 世紀のイバード派の思想を含んでいるものとして使用するほか[149]，ウィルキンソンは著作の使用こそしないが，彼の sīra は現存すると述べる[150]。

タイトルは sīra であるが，特定の人物に宛てたというような書簡の形式にはなっていない。この著作のおおまかな年代特定について，マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡では，ハラフ・イブン・ズィヤードの書（kutub）という表現がみられるが，これが現存する書簡を指しているかはわからない。また『イブン・ジャアファルの集成』には「ハラフ・イブン・ズィヤード・バハラーニーの sīra から」とする文章がある[151]が，引用された文章は，『書簡集』中のハラフ・イブン・ズィヤードの本作中にはみられない。一方アブー・アブドゥッラー・キンディーの『啓示法の解明』中で引用される表現[152]は，本作中でも確認することができる。さらにビスヤウィーは，この著作にみられる人間の宗教的分類の方法に関する説明をほぼ同じ形で記録する[153]。つまり同著作にみられる表現・内容は，遅くとも 4/10 世紀半ばには知られたものであったと考えることができる。

著作の表現上の特色として，冒頭は al-ḥamd li-Allāh ūṣī-kum bi-taqwá Allāh al-malik al-ḥaqq で始まる。著作は人間に法規定を定めるための方法，キブラの徒との社会関係，預言者ムハンマドの死後オマーンのディバー（dibā）で起きた棄教（al-ridda），信仰と行為の関係という大きく 4 つの部分から構成される。また固有名詞として，第二次内乱において預言者を僭称したシリアのハーリス（al-Ḥārith bil-Shām），そしてクーファの「嘘つき」ムフタール（al-Mukhtār al-Kādhib bil-Kūfa），そしてイブン・アズラクの名がみられる。また書

148 [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 339]
149 [al-Wuhaybī 2006, 179]
150 [Wilkinson 2000, 194]
151 Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 95.
152 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, VI, 25-26.
153 al-Bisyawī, *Jāmi‘ Abī al-Ḥasan al-Bisyāwī*, I, 289.

簡中には「今日のムスリムたちの行い」（sīra al-muslimīn al-yawm）という表現が現れるが，この「今日」を特定できるような歴史的事件は記録されていない。

著作の導入部では「神は禁じたものを合法とすることを嘉し給わず（lā yarḍā），合法としたものを禁じることを嘉し給わない。また神はある人間が神の敵である者どもを友とする（yatawallá）ことを嘉し給わず，神の友である者どもを敵とすることも嘉し給わない。同じく虚偽（bāṭil）を真理とすることを神は嘉し給わず，反対に真理（ḥaqq）を虚偽とすることも嘉し給わない。さらに神は教え（dīn）における疑いを嘉し給わず，教えにおける誇張（ghulūw）も嘉し給わない。そして神は，神の書の［正しい］解釈ではないものによって神の書を解釈することを嘉し給わず，神の書にないものをつけ加えることも嘉し給わない」[154]などと説明される。この二項対立的説明は『アブー・ウバイダとハージブの時代にオマーンの民の間で意見の相違が起きた時の，イブン・ドゥルハムの騒動についての説明が書かれた，オマーンの民への書』（*Kitāb ilá Ahl ʻUmān fī-hi Dhikr Fitna Ibn Durham ḥīna waqaʻa al-Ikhtilāf bayna Ahl ʻUmān fi Zaman Abī ʻUbayba wa Ḥājib*）と題される書簡の導入でもほぼ同じ形で記述される[155]。文章の完全な一致は，両著作が同一人物によって執筆された可能性，また書き手による借用（盗用）あるいはそのような共通のひな型の存在（後代あるいは別の人物によるその部分の複製）など，様々な理由が考えられるが，両著作が親近関係にあることは確かである。ハラフ・イブン・ズィヤードはオマーンへ移動したとの報告もあり，彼の周辺でこの「オマーンの民への書」が執筆されたことも十分に考えられる。

そして導入に続く人間の宗教的分類で，著作の筆者は人間をムスリム，偽信者（munāfiq），多神教徒に分類する。クローネとツィンマーマンは，西暦 9 世紀以降のイバード派の著作では，偽信者の語が非イバード派ムスリムに対する一般的なラベルとして用いられることを指摘しつつ，サーリム・イブン・ザクワーンの書簡でも偽信者の語が用いられているこ

---

[154] MakS, 584; MakSQ, 108; MakKh1, 216; cf. Ibn Jaʻfar, *Jāmiʻ Ibn Jaʻfar*, I, 85. ハラフ・イブン・ズィヤードについては，第 1 章第 2 節を参照のこと。

[155] MakSQ, 63-69; MakKh1, 292-296. 同書の一部は，アブー・アブドゥッラー・キンディーの『啓示法の解明』に引用される。al-Kindī, *Bayān al-Sharʻ*, II, 193-194; VI, 28. サーリミー[al-Salimi 2010, 129]やウハイビー[al-Wuhaybī 2006, 123]は，同書をアブー・ウバイダとハージブの執筆として紹介する。クタイバ・イブン・ディルハム（Qutayba b. Dirham）とサドゥース・イブン・ユースフ（Sadūs b. Yūsuf）という人物による，自由人の売買と奴隷化という「古風な問題」が話題となっている。アブドゥラフマーン・サーリミーは，その内的証拠から，同書はジュランダー・イブン・マスウードのイマーム位以降（132-134/750-752）に執筆されたとする。

と，そして彼の著作では偽信者の語は法的状態を示す語として用いられていることを説明した。ハラフ・イブン・ズィヤードの著作における munāfiq も，人間の地位を論じる文脈で議論されており，クローネとツィンマーマンの主張に合致する。そしてワーイル・イブン・アイユーブの『イスラームの系譜』と同じく，munāfiq は「（イスラームの）告白をしたキブラの徒で悪事を犯した徒」（ahl aḥdāth fī al-iqrār min ahl al-qibla）[156]と表現され，大罪者（ahl al-kabā'ir）という語は用いられていない。

また西暦 9 世紀の半ば以降，偽信者の分類に属す集団は，忘恩者（kāfir al-ni'ma）とも表現される。キブラの徒の間での解釈の相違は，マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡でも話題となるが，ハラフ・イブン・ズィヤードの書簡は「解釈による不信仰を，啓示を虚偽であるとする不信仰と同一と考えてはいけない」[157]と説明するにとどまる。そしてオマーンのイバード派のイマーム，ムハンナー・イブン・ジャイファル（al-Muhannā b. Jayfar al-Fajḥī al-Yaḥmadī, r. 226-37/841-51）の書簡では，この解釈の不信仰に対して「忘恩」（kufr al-ni'ma）の語が与えられる[158]。解釈による不信仰に対して忘恩の語が用いられていない点において，それ以前のイバード派の知的水準を現しているといえる。

本文最後の内容である信仰についての議論は，「もし彼らが～と主張したら」（fa-in za'amū…），あるいは「彼らに問え」（silū-hum）という論争形式で展開される。そしてそのうちの 1 つとして，fa-in za'amū anna al-īmān tawḥīd Allāh wa al-taṣdīq bi-hi laysa ma'a dhālika sharā'i' Allāh wa farā'iḍu-hu wa al-'amal bi-mā 'arrafa-hum Allāh min ḥaqqi-hi とあるように，信仰の部分は，信仰に行為を含めない立場への反駁となっている。後代のイバード派の学者たちは，この立場をとる集団を「疑いの徒」あるいは「ムルジア派」と名付けているが，本文中にはそうした呼称は現れない。論敵は「虚偽を語る者ども」（mutaqawwilūn）と表現される。さらに著作では，この論敵が主張する，人間の信仰が天使の信仰と同じであるとする「信仰の同質性」が紹介されるが，この問題はアブー・ウバイド（Abū 'Ubayd al-Qāsim b. Sallām, d. 224/838）が取り上げており，またアブー・ムカーティル・サマルカンディー（Abū Muqātil Ḥafṣ b. Muslim al-Samarqandī, d. 208/823）の著作にも，天使の確信（yaqīn）と人間の確信の同質性，また一般の信徒と天使や諸使徒の信仰の同質性が語られる[159]。つまりこれらは，ハラフ・イブン・ズィヤードに帰される同著作の原型が，ヒジュ

---

156 MakS, 585; MakSQ, 109 MakKh1, 218.
157 MakS, 586; MakSQ, 110; MakKh1, 218.
158 MakS, 624; MakSQ, 212; MakKh1, 355.
159 al-Samarqandī, *al-'Ālim wa al-Muta'allim*, 14; Abū 'Ubayd al-Qāsim b. Sallām; *Kitāb al-Īmān*

ラ暦 3 世紀初頭までに執筆されていても問題がないことを示している。

著作は，術語に関するクローネとツィンマーマンの基準に合致する。以上の点を踏まえれば，同書簡の原型はヒジュラ暦 2 世紀半ば（西暦 8 世紀後半）に執筆されたと十分に考えることができる。

B.2.3.3　シャビーブ・イブン・アティーヤ

（1）「アブドゥルサラームに宛てた，懐疑論者とムルジア派についてのシャビーブ・イブン・アティーヤの書」（*Kitāb Shabīb b. ʻAṭīya ilá ʻAbd al-Salām ʻalá al-Shukkāk wa al-Murji'a*）（MakSQ, 153-155; MakKh1, 159-163）

（2）「シャビーブ・イブン・アティーヤの Sīra」（*Sīra Shabīb b. ʻAṭīya*）（SIYAR, II, 346-383 (no.33); MakS, 205-223; MakKh1, 79-103; MakKh2, 166a-178a）

シャビーブ・イブン・アティーヤの作として伝えられる著作は，オマーンのイバード派の『書簡集』中に 2 件確認できる。北アフリカのバッラーディーは，シャビーブの著作として「アブドゥルサラームに宛てた，懐疑論者とムルジア派についてのシャビーブ・イブン・アティーヤの書」（*Kitāb Shabīb b. ʻAṭīya ilá ʻAbd al-Salām ʻalá al-Shukkāk wa al-Murji'a*）という書名を挙げる。バッラーディーは，シャビーブはスフラ派であるが，書にみられる彼の言葉はイバード派にふさわしいものであると評価する[160]。『啓示法の解明』には，（1）の一部が引用されるほか[161]，（2）は，その大部分が 6/12 世紀のオマーンの学者カルハーティーの著作に，そのままの形で引用される[162]。

（1）について，ウハイビーは，宛先のアブドゥルサラームを，アブー・ウバイダのもとで学んだバスラのアブドゥルサラーム・イブン・アブドゥルクドゥース（ʻAbd al-Salām b. ʻAbd al-Qadūs al-Baṣrī）であるとする[163]。書簡は ūṣī-ka bi-taqwá Allāh wa ḥusm al-naẓar fī aṣl al-ḥikma で始まり tadarrara mā katab-tu bi-hi ilay-ka tawaqqafa ʻinda-hu bil-tafakkur fī-hi walī-ka

wa Maʻālimi-hi, wa Sunani-hi, wa Istikmāli-hi, wa Darajāti-hi, 22.

[160] Ṭalibī (ed.), *Ārā' al-Khawārij al-Kalāmiyya*, II, 281. アブドゥルラフマーン・サーリミーは同著作の執筆年代を 160 年代/780 年代に定めている。オマーンのイバード派の著作では，ヒラール・イブン・アティーヤはスフラ派からイバード派に改宗したと説明される一方，シャビーブ・イブン・アティーヤの信仰については言及されていない。al-Ḥawāri, Jāmiʻ Abī al-Ḥawārī, I, 52; al-Kindī, *Bayān al-Sharʻ*, V, 91; SIYAR, II, 25.

[161] al-Kindī, *Bayān al-Sharʻ*, XXIX, 139.

[162] al-Qalhātī, *Kitāb al-Kashf wa al-Bayān*, 181a-195b.

[163] [al-Wuhaybī 2006, 148] このイブン・アブドゥルクドゥースは，定命の問題について詳しかったと報告される。al-Kindī, *Bayān al-Sharʻ*, II, 82.

khāḍir^{un} wa lā quwwa wa bi-hi wa al-salām ‘alay-ka wa raḥma Allāh で終わる。導入部では疑いと疑念の徒（ahl al-shakk wa al-rība）による「神は人間たちに，明らかになる言葉と行為によって人間の諸名称を知ることを求めておらず，また人びとのうち誰が道を迷った者であり，また誰が導かれる者かを知ることも，さらに彼らの諸規定を知ることも求めていない」という人間の宗教的分類を否定する論敵の主張が紹介される。そして信仰は言葉と行為から構成されるなど，信仰のシャリーア上の定義を中心とする問題が「もし彼らが…のように述べたら，以下のように言え」（fa-in qālū…, qul…）という形式で展開される[164]。ハラフ・イブン・ズィヤードに帰される書簡にもみられるように，信仰と行為の問題そしてそれに関する論争は，2/8 世紀後半のイバード派内で扱われたテーマの 1 つである。

（2）について，クローネとツィンマーマンはその内容から，アッバース朝によるオマーン侵攻後に執筆されたと主張する[165]。同書簡は護教的な内容で，「疑いと盲目の徒」（ahl al-shakk wa al-‘amā）による，救済される統一体（al-jamā‘）や集団（al-firqa al-nājiya）といった概念への反駁，ナフラワーンの徒は逸脱した集団ではないこと，またウスマーンが犯した悪行が説明される。そしてその議論は「我がウンマは 73 の分派に分かれるだろう」をはじめとして，預言者ムハンマドのハディースの解釈が軸となって展開される[166]。

また書簡中では，ナフラワーンの徒を擁護した後で，ナーフィウ・イブン・アズラク（Nāfi‘ b. Azraq），ダーウード（Dāwūd）やアティーヤ（‘Aṭiyya）が，逸脱した人物として列挙される[167]。イバード派の著作では，ハワーリジュ派として列挙される人物あるいは分派は，時代が下るとともに増える傾向にある。すなわち 3/9 世紀のマフブーブ・イブン・ラヒールや，オマーンのイバード派政権のイマーム，サルト・イブン・マーリクに宛てられた書簡では，共通する人物や枝派として，イブン・アズラク，ナジュダ・イブン・アー

[164] この形式は（2）の著作にもみられる。ファン＝エス[van Ess 1973, 90][van Ess 1982, 111-112]は，神学的著作にみられる形式（in qāla…, fa qul/yuqālu la-hu）に着目し，この形式は，キリスト教世界の神学的弁証法の影響を受けたものであり，ヒジュラ暦 2 世紀前半にはムスリムにも知られていたと主張する。表現形式の面では時代錯誤はみられないようにみえる。

[165] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 343]

[166] 花田は，ジャマーアの語は第二次内乱後のウマイヤ朝で，同政権の正統性を確立するために発展した語であると論じる[花田 1999, 208]。シャビーブの著作で，ジャマーアの概念や大多数の民（sawād al-a‘ẓam）が話題に上ることについて，問題はないようにみえる。

[167] クローネとツィンマーマンは，彼らを 1/7 世紀後半に活動したハワーリジュ派の人物と同定する。[Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 170]

ミル（Najda b. ‘Āmir），アティーヤ，ズィヤード・アァサム（Ziyād al-A‘sam），サーリフ・イブン・ムサッリフ（Ṣāliḥ b. al-Musarriḥ），シャビーブ・イブン・ズィヤード（ヤズィード？）・シャイバーニー（Shabīb b. Ziyād/Yazīd al-Shaybānī），アブー・バイハスそしてスフラ派に言及する[168]。

形式そしてその内容からみて，両作の原型が，ヒジュラ暦 2 世紀半ばから後半に執筆されたと考えることに問題はないようにみえる。

B.2.3.4　ムーサー・イブン・アビー・ジャービルの書簡

（*Sīra al-Imām Musá b. Abī Jābir*）（MakSQ, 190-192; MakKh1, 296-299.）

『書簡集』の 3 番目と 4 番目の型に採録されるムーサー・イブン・アビー・ジャービルの sīra は，その一部が『啓示法の解明』で引用される[169]。その冒頭は，バスマラの直後に ūṣī-kum bi-taqwá Allāh fa-inna Allāh iṣṭafá al-taqwá…と続き，筆者はこの書をムスリムたちへの忠告としてしたためたこと，神は啓示で人びとを導く指導者たち（a’imma al-hudá）について語ったが，ウスマーンの時代にムスリムたちは分裂し，互いにバラーアを宣告したこと，当時信徒たちの長（amīr al-mu’minīn）と呼ばれたウスマーンが身内や不誠実な人びとを重用（istijātha）したため，彼の殺害を合法とし，彼にバラーアを宣告したことを説明する。

そして話題はオマーンの状況に移る。書き手は①ムスリムたちはムハンマド（・イブン・（アブドゥッラー）・イブン・アビー・アッファーン（Muḥammad b. ‘Abd Allāh b. Abī ‘Affān al-Yaḥmadī, r. 177-9/794-6）に対して，「彼に魂を売る者」（shirā’）としての誓いを立てたこと，②その後彼は徳のあるムスリムたちが信じないようなことを信じ，自分はイマームであると主張したこと[170]，③ムスリムたちの間で協議（al-shūrá）が行われ，彼が貧者たち

---

[168] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘,* III, 421-424; SIYAR, II, 208-209. サルト・イブン・マーリクへの書簡はその後，ジャフム派，サアラブ派という分派とともに，迷妄の指導者として，シュアイブ・キルマーニー，ダーウード，マタル，マンスール，ハイダム，アズィーズ，ハムザ，アブー・イスハークそしてアブー・アウフというハワーリジュ派に属したとされる名が列挙される。これらの人物の列挙は，ハワーリジュ派の分派であるハムザ派に属したイーサー・イブン・フーラク（Abū al-Faḍl ‘Īsá b. Fūraq al-Khārijī）の書簡のような，外部からの情報を利用した可能性を指摘できる。al-Kindī, *Bayān al-Shar‘,* III, 279. そしてムハンマド・イブン・マフブーブは，このイブン・フーラクの書簡に注を付している。

[169] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, II, 194.

[170] 『啓示法の解明』では，イブン・アビー・アッファーンについては「防衛のイマーム」（imam al-difā‘）とする説と，軍の司令官（amīr jayth）とする説に分かれていたが，いずれも「魂を売る者としてのイマーム位」（al-imāma al-shāriya）としてのイマーム位は定まっていないと説明される。al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, LXVIII, 166.

に辛く当たっていること，彼らを不義者（fassaqa）とするなど，彼の行いが法学者たちの教条（sīra）に反したことを説明する。そしてムスリムたちに許されたことは，彼の行いを改めることであり，彼にそれからの悔悟を求めることであり，彼が固執した場合にはバラーアが宣告されるとし，書簡の受け取り手であるオマーンの民に対し，神が定めた教えに集い，ムスリムの敵に立ち向かえと語る。

書簡の内容から，書簡が執筆された時点ではまだイブン・アビー・アッファーンには悔悟は求められていないようにみえる。彼の退位をめぐるムーサー・イブン・アビー・ジャービルの活動は，ハーリド・イブン・カフターンの書簡の中で語られるが，そこでの内容は本書簡には含まれない。オマーンのイバード派の指導者が，イブン・アビー・アッファーンからワーリス・イブン・カアブ（al-Wārith b. Ka‘b al-Kharūṣī, r. 179-92/796-808）に代わるのは 179/796 年であり，ムーサー・イブン・アビー・ジャービルの没年は 181/797 年とされている。そのため，書簡作成における時代錯誤の問題は生じない。そして後半部における書簡の宛先である戦士たち（shurāt）への激励は，当時のオマーンの状況を表すものとして理解できる。イブン・アビー・アッファーンの指導者としての期間は 177-9/794-6 年である。こうした書簡が出回った後も指導者の地位に居続けることは難しいと考えられるため，その状況から判断すれば，書簡はイブン・アビー・アッファーンのイマーム在位中の後半あるいは末期に書かれたと判断される。

なお『啓示法の解明』第 68 巻「ジハードの書」で引用される「ムーサー・イブン・アビー・ジャービルの sīra」の部分は[171]，『書簡集』に採録された本書簡には見当たらない。このことは「ムーサー・イブン・アビー・ジャービルの sīra」は複数存在した，あるいは『書簡集』に現存する sīra は，sīra 全体の一部のみである可能性を示している。また『啓示法の解明』には「ムーサー・イブン・アビー・ジャービルは言った」という引用があるが[172]，その内容も『書簡集』に採録された sīra にはみられない。このことは，彼の見解が本書簡とは別の形でも後代に伝えられたことを示している。

B.2.4 3/9 世紀に活動した人物に帰される著作

B.2.4.1 ムニール・イブン・ナイイルの書簡（*Sīra Munīr b. al-Nayyir al-Ja‘lānī ilá al-Imām Ghassān b. ‘Abd Allāh*）（SIYAR, I, 233-253; MakS, 284-291; MakSQ, 76-84; MakKh1, 188-199;

[171] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, LXIX, 174.
[172] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 171.

MakKh2, 111a-115b）

書簡はイマームのガッサーン・イブン・アブドゥッラー（Ghassān b. ‘Abd Allāh al-Fajḥī al-Yaḥmadī, r.192-207/808-23）宛と題名に記される。冒頭は salām ‘alay-ka ammā ba‘du fa-innī aḥmadu ilay-ka Allāh wa ūṣī-ka wa nafsī bi-taqwá Allāh とあり，後代に提示される「ひな型」よりも簡潔な表現となっている。同書簡は後代の著作でも引用される[173]。

書簡では，クルアーンが引用される一方，預言者ムハンマドのハディースは引用されない。そしてアンマール・イブン・ヤースィル，アブドゥッラー・イブン・ワハブ・ラースィビー，アブー・ビラール・ミルダース・イブン・フダイルそしてアブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーやジュランダー・イブン・マスウードら，ジハードのために立ち上がった人物が叙述される。ムハンマド・イブン・マフブーブの書簡とともに，イブン・イバードの名が現れない点で，書簡はヒジュラ暦 3 世紀半ば以前の特徴を示している。同書簡では，バスラとオマーンの海上通行を妨害する湾岸の海賊問題が話題に上り[174]，またムーサー・イブン・アビー・ジャービルを筆頭に，学者たちあるいは模範となる者たちの道を進んだ者として人物たち[175]が列挙されるが，これらは当時を生きた人物にしか知り得ない情報であり，同著作の真正性の証拠ともなる。このほかキブラの徒の他集団は qawm と表現され[176]，人間の宗教的分類は，多神教徒，偽信者で提示される。そして偽信者の説明はワーイル・イブン・アイユーブの『イスラームの系譜』中の表現と類似する[177]。これらのことから，同著作の原型は彼によって執筆されたと考えることができる。

B.2.4.2　ハーシム・イブン・ガイラーンの書簡

（1）*Sīra lil-Shaykh Hāshim b. Ghaylān ilá al-Imām ‘Abd al-Malik b. Ḥumayid*（SIYAR, II, 36-38; MakS, 17; MakSQ, 199-200, MakKh2, 138a-138b）

（2）*Sīra ilá al-Imām ‘Abd al-Malik b. Ḥumayid min Hāshim b. Ghaylān wa Muḥammad b. Mūsá wa al-Azhar b. ‘Alī wa al-‘Abbās b. ‘Alī wa Sa‘īd b. Ja‘far*（MakSQ, 203-204; MakKh1, 200-202）

（1）はハーシム・イブン・ガイラーンがイマーム，アブドゥルマリク・イブン・フマイ

[173] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, XXVIII, 70; V, 308.
[174] SIYAR, I, 242, 249.
[175] SIYAR, I, 252.
[176] SIYAR, I, 235, 241.
[177] SIYAR, I, 235; SIYAR, II, 59.

ドに宛てた書簡である。ベンドリース，またクローネとツィンマーマンは，同人の著作として紹介する[178]。その活動や交友関係から，ハーシム・イブン・ガイラーンはアブドゥルマリク・イブン・フマイドのイマーム在職中に存命したと考えられており，両者の間での書簡のやりとりということに無理はない。同書簡は校訂本では 2 ページ強ほどの短い著作で，salām ‘alay-ka fa-innā aḥmadu Allāh alladhī lā ilāh illā huwa wa ūṣī-ka bi-taqwā Allāh で始まり，aḥbabu-nā an nu‘llima–ka wa naktubu ilay-ka bil-ladhī balagha-nā min dhālika wa ḍāqat bi-hi ṣudūru-nā unẓur fī dhālika naẓara Allāh ilay-ka wa ilay-nā bi-raḥmati-hi wa al-salām ‘alay-ka wa raḥma Allāh で終わる。書き手はイマームに対して，先人たちは，正しい教えを人びとに教え，イスラームの系譜（nasab）を示したこと，また神が命じた服従行為と禁止した背信行為を人びとに明らかにしたことを記述する。一方書き手は，（正しい）イスラームの教えにないハワーリジュ派や疑いの徒は，それに基づいて人びとを呼びかけることはなく，人びとは正しいイスラームを呼びかけられていない状態でイスラーム共同体に加入したと説明する。そして歴史的出来事を表した記述として，話者はカダル派やムルジア派がオマーンのスハール（Ṣuḥār）に現れ，教義を明らかにしていること，それらの教えに転向する者が多くいることを明らかにする。そして宛先であるイマームに対して，スハールのヤズィードという者に対し，ビドアの徒の教宣活動を止めさせ，彼らを否定するように書簡をしたためることを求めている。

カダル派とムルジア派の到来について，同時代資料でのこの動きを知らせる著作はない。一方後代の歴史書は，イマーム，ガッサーン・イブン・アブドゥッラーの時代，ニズワーの邸宅に，ムルジア派の別称である疑いの徒（ahl al-rība）が住んでいたことを知らせる[179]。

後代の思想的影響を受けた内容は見当たらないため，同書簡は，彼の活動時期に執筆されたものと判断することができる[180]。

（2）は第 3 の型と第 4 の型に採録される。salām ‘alay-ka fa-innā naḥmadu Allāh alladhī lā ilāh

[178] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 336][Bendrissou 2003, 217] また『書簡集』の 1 番目，2 番目，3 番目の型では，同書簡の後にアウタビーの「注解」（ta‘līq）という著作が続くが，内容的な連続性はみられない。

[179] [Klein 1938, 22] またナースィル・イブン・アビー・ナブハーン（Nāṣir b. Abī Nabhān al-Kharūṣī, d. 1263/1847）が語るように，近現代のイバード派の間では，オマーンにはイバード派のみならずスンナ派やシーア派そしてムウタズィラ学派など，複数の教えが広まっていたとの理解がある。al-Sa‘dī, *Qāmūs al-Sharī‘a*, VII, 278-279.

[180] なお，MakSQ に採録された同書簡には，200-202 にかけて他の書簡にはみられない内容が続く。

illā huwa wa nūṣī-ka bi-taqwá Allāh で始まり，wa-qad balagat bi-ka al-sinn ilá ghāya al-kifāya wa al-intifā‘ bi-mā jará ‘alayka waffaqa-ka Allāh wa al-salām ‘alay-ka wa raḥma Allāh wa barakātu-hu で終わる。同書簡について，アブドゥルラフマーン・サーリミーは，イマームの周りにいる人びとに関して，イマームに忠告をした著作であると紹介する[181]。書簡中には時期を特定するような出来事，人物への言及はみられない。その内容は，サーリミーが述べるように，イマームの周りにいる教えの人びと（ahl al-dīn）は，イマームへの忠告を怠りそれを放棄することは，バラーアと分離を意味し，またそれらを行う者は神に逆らう者であるため，彼らにはイマームに忠告（naṣīḥa）をする役割があることを説明する。

文体上の特徴として，同書簡には次項のムーサー・イブン・アリーらとの連名の書簡（2）との共通点がある。すなわち導入部に続く ammā ba‘du ‘āfā-ka Allāh ayyuhā al-imām wa īyā-nā ‘āqiba はムーサー・イブン・アリーらとの連名の書簡でも同様にみられる。またムーサー・イブン・アリーの（1）の書簡では，最後の部分が min-mā al-‘āfiya となっている。そして先にみたアブドゥルマリク・イブン・フマイドへのハーシム・イブン・ガイラーンの書簡は ammā ba‘du ayyuhā al-imām min-mā al-‘āfiya/ammā ba‘du ‘āfā-ka Allāh ayyuhā al-imām min-mā al-‘āqiba となっている[182]。これは，この書簡の形式が，当時のイマームに対する書簡の一般的様式であること，そしてムーサー・イブン・アリーらとの連名の書簡と親近関係にあることを示すものであり，同著作の真正性・信頼性を裏付ける証拠である。

なお，MakKh1 には，同書簡に続く形で，アリー・イブン・アビー・ターリブのイブン・アッバースへの書簡，そしてイブン・アッバースからアリーへの返書が採録される。アリーとイブン・アッバースのやりとりは，『啓示法の解明』にも部分的に引用される。そして同やりとりは，ハーシム・イブン・ガイラーンからアブドゥルマリク・イブン・フマイドへの書簡中にみられると説明される[183]。

B.2.4.3　ムーサー・イブン・アリーの著作

（1）*Sīra Abī ‘Alī*（MakSQ, 208-210; MakKh1, 302-305）

（2）*Jawāb min Mūsá b. ‘Alī wa Hāshim b. Ghaylān wa Ahl Izkī ilá al-Imām ‘Abd al-Malik b. Ḥumayid*（MakSQ, 204-205; MakKh1, 199-200）

---

181 [al-Salimi 2010, 133]
182 SIYAR, II, 37; MakKh2, 138a.
183 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, XXVIII, 90.

（1）冒頭は ilá man balagha-hu hādhā al-kitāb min ashyākh al-muslimīn wa al-shurāt とあり，特定の人物の名は出てこない。また MakSQ や MakKh1 では Sīra の題名が付されるが，『啓示法の解明』では Kitāb の名で，部分的な引用がみられる[184]。書簡の冒頭は salām ‘alay-kum fa-innā naḥmadu ilay-kum Allāh alladhī lā ilāh illā huwa wa nūṣī-kum bi-taqwá Allāh ではじまり，as’alu Allāh al-‘āfiya wa tamām al-ni‘ma ‘akay-nā wa ‘alay-kum wa al-fawz min al-nār inna Allāh ‘alay-ya kull shayy^{in} qadīr^{un} wa al-salām ‘alay-kum wa raḥma Allāh で終わる。別の箇所で筆者は，jā‘a-nā kitāb min ashyākh Ṣuḥār wa kitāb min al-shurā と書いており，同書簡がスハールにいたイバード派構成員を念頭においていたことがわかる。

同書簡では，イバード派による他宗教および他派との関係が主題となる。冒頭で神の書，預言者の慣行，そして（イバード派が自派の先達とみなす）ムスリムたちの指導者たち（a’imma al-Muslimīn）が残した（athara）ものを遵守することを読者に求めている。そして書き手は，神がムハンマドを遣わしたとき，人びとはユダヤ教徒，キリスト教徒，マギ教徒，サービア教徒そして偶像を拝むアラブの多神崇拝者であったこと，ムハンマドは多神崇拝者に対し，信仰告白とともに，神，最後の審判，復活，楽園と火獄を信じること，そして礼拝，喜捨，ラマダーン月の斎戒，契約に忠実であること，親孝行，親族を敬うこと，神に服従する徒をワラーヤとし，迷妄の徒をバラーアとすることに呼びかけたことを説明する。

サーリム・イブン・ザクワーンやハラフ・イブン・ズィヤードの書簡には，多神教徒としてサービア教徒はまだ含まれない[185]一方，マフブーブ・イブン・ラヒールの書簡では，イスラームのウンマも含めた「六宗団」（al-milal al-sitt）として，上述の宗教宗団が列挙される[186]。ムーサー・イブン・アリーが活動した時期を考えれば，多神教徒としての宗団の列挙は，時代に合致するものである。またその後に列挙されるムスリムが行うべき項目は，アブドゥルラフマーン・イブン・ルスタムの書簡やワーイル・イブン・アイユーブの著作にもみられる[187]。

この書簡を術語の面からみたとき，書簡では預言者と 2 人のカリフが死亡した後，ムスリムたち，すなわちイバード派が自派の先達とみなす人びとと，他集団との間で戦いと意

[184] al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 127, LXVIII, 452.
[185] [Crone and Zimmermann (ed. and tr.) 2001, 106]
[186] SIYAR, I, 320.
[187] Ibn Sallām, *Kitāb fī-hi Bad’ al-Islām wa Sharā’i‘ al-Dīn*, 93; SIYAR, II, 46-49; Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 98-102.

見の相違が起こり，ムスリムたちは他集団に対し，他集団が破棄している神の教えを完成するよう呼びかけ，ムスリムたちはこの他集団を圧政者そして偽信者（bughā wa munāfiqīn）と名付けたと説明される。クローネとツィンマーマンは，圧政者という表現は西暦 9 世紀以降に用いられたとする。またムーサー・イブン・アリーの活動時期以降の偽信者と表現される集団には，忘恩者（kāfir al-ni‘ma）という語も付される。アブドゥルラフマーン・サーリミーは，同書簡では人間は信仰者，多神教徒そして忘恩者に分類されると改題するが[188]，管見の及ぶ限りでは，本文中には忘恩者という語は現れない。また書簡の作成者は，論争が起きた場合には「我々の教えはムスリムたちの教えであり，我々の見解はムスリムたちの見解です」と言うよう命じているが，この実践はすでに西暦 9 世紀前半には存在したことが知られている[189]。

これらのことを考えると，同書簡は 3/9 世紀に活動したムーサー・イブン・アリーによって執筆されたと判断することに，問題はないようにみえる。

（2）同著作は MakKh1 ではムニール・イブン・ナイイル・ジャアラーニーのガッサーン・イブン・アブドゥッラーへの書簡に続く形で採録される。『啓示法の解明』に部分的な引用がみられる[190]。宛先の後，nūṣī-ka bi-taqwá Allāh wa ṭā‘ati-hi wa al-qiyām li-Allāh fī sabīli-hi min dīni-hi で始まり，wa tawallā-ka Allāh wa ḥafiẓa-ka aḥsana bi-ka fī jamī‘ umūri-ka wa al-salām ‘alay-ka wa raḥma Allāh で終わる。アブドゥルラフマーン・サーリミーは，前掲のハーシム・イブン・ガイラーンらの書簡のように，イスラーム法を遵守することをイマームに忠告する内容であると解題する[191]。本研究では用いなかったが，同書簡は，特に神のためのジハードに関する，イマームからの書簡への返書という形式になっている。書簡では神に向かい，その報酬を求める者は，神に選ばれた者であることなどが説明される[192]。

---

188 [al-Salimi 2010, 134]

189 例えば SIYAR, I, 280; al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, 121.

190 al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, XXVIII, 139.

191 [al-Salimi 2010, 133-134]

192 このほかムーサー・イブン・アリーに帰される書簡として，*Kitāb min Abī ‘Alī ilá al-Imām*（MakSQ, 205-208; MakKh1, 211-214）という著作が伝わる。同書簡は，ūṣī-ka wa nafsī bi-taqwá Allāh wa ṭā‘ati-hi wa al-ijtihād li-Allāh fī iqāma mā ibtilā-ka bi-iqāmati-hi wa ḥafiẓa mā istaḥafẓa-ka min iqāmati-hi で始まり，wa ḥasuba-ka Allāh wa īyā-nā wa ni‘am al-ḥasīb wa al-mawlá wa al-naṣīr wa al-salām ‘alay-ka wa raḥma Allāh wa barakātu-hu で終わる。また本題に入るさいには，ammā ba‘du ‘āfā-ka Allāh ayyuhā al-imām min kull balā’と表現されており，イマームに宛てられた書簡であることがわかる。同書簡は，書き手が読み手に対して，ある男を雇用しないように忠告するという内容になっている[al-Salimi 2010, 134]。

B.2.4.4 アブー・ガーニム・フラーサーニーの『纏められたもの』（*al-Mudawwana*）

ダルジーニーは，本書がアブー・ガーニム・フラーサーニーによってルスタム朝のイマーム，アブドゥルワッハーブ・イブン・アブドゥルラフマーンに献呈されたものであること，原本はルスタム朝の図書館が破壊されたさいに失われたが，アブー・ガーニム・フラーサーニーがジャバル・ナフーサからターハルトへ赴くさい，アムルース・イブン・ファトフ・ナフースィー（Abū Ḥafṣ ‘Amrūs b. Fatḥ al-Nafūsī, d. 283/897）が彼の原本を複写したことを報告する[193]。西暦 19 世紀から 20 世紀にかけて活動したイトファイイシュ（Muḥammad b. Yūsuf Iṭfayyish, d. 1332/1914）によって，この『纏められたもの』は再構成され，三巻本で *al-Mudawwana al-Kubrá* の名で出版されている。

このほか現在出版されているものとして，『アブー・ガーニム・フラーサーニーの纏められたもの』がある。こちらはアトファイイシュが再構成をする以前の『纏められたもの』を反映しているとされ，採録されている内容や順序も一部異なっている。預言者ムハンマドのハディースとともに，ジャービル・イブン・ザイドやアブー・ウバイダをはじめとする，イバード派に関係の深い人物の法学的見解が纏められる。本書の最大の特徴は，アブドゥッラー・イブン・アブドゥルアズィーズとアブー・ムアッリジュという，ラビーウ・イブン・ハビーブと袂を分けてイバード派を離脱し，後にヌッカール派と呼ばれるイバード派の枝派を形成した人物が，伝承者として登場する点にある[194]。

ファン＝エスは，同著作はアブー・ガーニムのいくつかの著作が，後代に合成されたものであると理解する[195]。ウィルキンソンは，時系列およびテクストに改竄の跡があると主張し，また同著作の時代には，イバード派では mursal や munqaṭi‘という技法が知られていたが，marfū‘の伝統はほとんどなかったと論じる。そして『アブー・ガーニム・フラーサーニーの纏められたもの』には，『ラビーウの伝承』の内容が含まれていることから，『ラビーウの伝承』の資料の一部は，『纏められたもの』から引用されたものであると論じた[196]。

本研究では，ムスタファー・バージューによって校訂，出版された *al-Mudawwana al-Kubrá* の巻末に補遺として掲載された「報告集」（*al-dīwān al-ma‘rūḍ*）を利用した。同著作には，

---

[193] al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā’ikh bil-Maghrib*, II, 323.

[194] シャハト[Schacht 1956, 381]は，この点から同著作をイバード派の枝派ヌッカール派のアブドゥッラー・イブン・ヤズィード・ファザーリー（‘Abd Allāh b. Yazīd al-Fazārī）に帰した。

[195] [van Ess 1976, 38-42]

[196] [Wilkinson 2010, 386-387]

イマーム論やワラーヤとバラーアに関する部分的記述がみられる。形式は『纏められたもの』と同様に，バスラのイバード派から追放されたアブー・ムアッリジュとアブドゥッラー・イブン・アブドゥルアズィーズらをはじめとして，ヒジュラ暦 2 世紀半ば以降 3 世紀前半にかけて活動した人物の見解が採録される。バージューによれば，同「報告集」はアルジェリアのバヌー・ヤスジン（Banū Yasjn）州にあるサーリフ・ライリー（Ṣāliḥ laylī）図書館と，エジプト国立図書館に所蔵される[197]。サーリフ・ライリーの写本には，アブー・ウバイダの喜捨の書簡など，様々な著作が収録される。

B.2.4.4　ムハンナー・イブン・ジャイファルの書

Min al-Imām al-Muhannā b. Jayfar ilá Mu'ādh b. Ḥarb（MakS, 621-634; MakSQ, 210-223; MakKh1, 352-372.）

ムハンナー・イブン・ジャイファルはヒジュラ暦 3 世紀前半のオマーンのイマームである。同時代人として，ハーシム・イブン・ガイラーンやムーサー・イブン・アリー，またムハンマド・イブン・マフブーブらが知られている。またムハンマド・イブン・マフブーブからムハンナー・イブン・ジャイファルに宛てられた書簡の一部も知られている[198]。

『書簡集』に採録される本著作が宛てられたムアーズ・イブン・ハルブという人物についての詳しい情報はない。著作では「神の唯一性について」「定命について」「子どもについて」あるいは「慈善」（muwāsāt）や「礼拝時の清め」等の，神学的内容や法学的テーマが，項目ごとに取り上げられ，「定命」（qadar）の部分が『啓示法の解明』（*Bayān al-Shar'*）に引用される[199]。ムアーズ・イブン・ハルブの問いに対する項目ごとの回答という形式は，それ以前の sīra には見当たらない。

年代を示すものとして，話者は礼拝時の清めにおいて預言者ムハンマドは足のかかとを拭ったとする見解を主張する者を「嘘つきのハディースの徒」（ahl al-aḥādīth al-kādhiba）と表現しており，書き手の生きた時代には「ハディースの徒」という集団がいたこと，またハディースの信憑性に関しての意識が存在していたことを伝える。同様に書き手は虚偽の徒の一部が「ジャマーアとスンナとウラマー」（al-jamā'a wa al-sunna wa al-'ulamā'）と自称していたことを報告し，これに対し話者は，彼らはジャマーアではなく白内障を患った者（al-sādda）であり，また知る者ではなく無知の者であると論じる。イバード派の著作

197 al-Khurāsānī, *al-Mudawwana al-Kubrá li-Abī Ghānim al-Khurāsānī*, I, 81-83.
198 al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, XXVIII, 148-150.
199 al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, II, 112.

では「ジャマーアとスンナの徒」という表現は，例えばマフブーブ・イブン・ラヒールに帰される，アブドゥッラー・イブン・ヤヒヤーへの契約（‘ahd），またビスヤウィーによるハシュウィーヤの紹介などに見られる[200]。

これらのテーマのうち，多神教徒と偽信者の子どもについての議論では，先人の諸著作（āthār）や預言者からの諸伝承（aḥādīth）に見解の相違がみられること，クルアーンには彼らの属性（ṣifa）についての説明がないとした上で，①ハディージャがムハンマドに対し，夭折した自分の子はどこにいるかと尋ねたさい，彼は，彼女と自分との間に生まれた子は楽園にいるが，自分以外の男との間に生まれた子は火獄にいると答えたこと，②また多神教徒の幼児は楽園の徒の伺候者（khuddām）であるとする 2 つの伝承を紹介する。そしてムハンマドの言葉は真理であるが，どちらの伝承を述べたかは分からないため，判断を停止することが認められるとし「神がより良く知りたまう」とまとめる。

一方 4/10 世紀の学者イブン・バラカは，ムハンナー・イブン・ジャイファルが提示した，相反する内容の伝承の調和的解釈を試みる。多神教徒の幼児は楽園の徒の伺候者であるという伝承について，多神教徒の幼児たちが神の敵でなければ，神が彼らに恩寵を授け，彼らに神の友たちを伺候させることは可能であるため，この伝承はあり得るとする。一方ハディージャに対するムハンマドの答えについて，アラブ詩には成人（bāligh）を ṭifl と表現する例があるとし，ハディージャが問うた自分の子どもたち（awlād）とは，成人になった子どもたちを指すと解釈する。そして以上のことから 2 つの伝承は，その内容において矛盾は生じないと結論付ける。すなわちムハンナー・イブン・ジャイファルの書簡は，2 つの伝承の調和を図ろうと試みていない点で，またそれを記録していない点で，4/10 世紀以前に作成されたものであると判断することができる。

さらに同著作では不信仰が否定の不信仰と，恩恵の不信仰（あるいは忘恩）に分類されるが，後者は kufr al-ni‘ma という表現が用いられ，忘恩とは解釈の不信仰であると言い換えられる。クローネとツィンマーマンは，同著作に言及せずに，オマーンのイバード派著作の中で，忘恩の語が初出するのは，西暦 900 年頃に執筆されたと思われるアブー・カフターンの著作であると主張する。忘恩の語は，4/10 世紀以降のイバード派の著作では，偽信と同じように用いられる。本稿でも明らかにしたように，2/8 世紀後半から 3/9 世紀前半

[200] al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā’ikh bil-Maghrib*, II, 285; SIYAR, II, 137. 花田[花田 1999, 206-210]は，ジャマーアの概念は第二次内乱の終息に対して用いられること，ウマイヤ朝はその滅亡に至るまで，ジャマーアとその守護者としての自らを，自らの存在根拠として主張し続けたと論じる。

にかけて，イバード派は解釈の相違による共同体の分裂，という考え方を有していた。その点からみれば，解釈による不信仰という考え方がヒジュラ暦 3 世紀前半（西暦 9 世紀半ば）にも存続することは容易に想定され，そしてその解釈による不信仰を別の言葉で言い換えるという動機も，あり得るようにみえる。

以上のことから，本著作はヒジュラ暦 3 世紀前半から半ばごろに執筆されたものであり，後述するサルト・イブン・ハミースに帰される sīra のような形式の先駆けとして，位置づけることができる[201]。

B.2.4.5　ムハンマド・イブン・マフブーブ

（1）*Sīra Abī ʻAbd Allāh Muḥammad b. Maḥbūb ilá Imām Ḥaḍramawt*

（2）*Sīra Abī ʻAbd Allāh Muḥammad b. Maḥbūb ilá Ahl al-Maghrib*

（3）*Sīra Muḥammad b. Maḥbūb ilá Abī Ziyād Khalaf b. ʻUzra*

ムハンマド・イブン・マフブーブに帰される著作は数多くある。上記の 3 つの著作のうち，（1）はジハードや善を命じることと悪を禁じることを扱った書簡であり，『啓示法の解明』第 69 巻の冒頭に採録される[202]。また（2）はイマーム論を扱った書簡であり，1 つのミスルに 2 人のイマームは存在しないこと，イバード派のイマームは信徒たちの長（amīr al-mu’minīn）とは呼ばれないことなどが説明される。

そして（3）について，同書簡は 6/12 世紀の学者アブー・バクル・キンディーの『編纂されたもの』にその一部が引用される[203]。その冒頭は ilá Abī Ziyād Khalaf b. ʻUzra min akhī-hi Muḥammad b. Maḥbūb salām ʻalay-kum fa-inna aḥmadu ilay-ka Allāh alladhī lā ilāh illā huwa wa ūṣī-ka bi-taqwá Allāh で始まり，wa Allāh hadá man yashā’u ilá ṣirāṭ mustaqīm wa jamaʻa-nā wa īyā-kum ʻalá al-taqwā wa al-salām ʻalay-ka wa raḥma Allāh で終わる。宛先のハラフ・イブン・ウズラの経歴は不詳であるが，同書簡は，ウスマーンとアリーに関するハラフ・イブン・ウズラからの問い（katabta ilay-ya tas’alu-nī ʻan amr ʻUthmān wa ʻAlī）に対する返書の形式を

[201] 第 6 章でも言及したように，イブン・ジャアファルの集成には，ムハンナー・イブン・ジャアファルからムアーズ・イブン・ハルブへの書簡はムーサー・イブン・アリーによって執筆されたという記述がある。ムーサー・イブン・アリーはムハンナー・イブン・ジャイファルの同時代人であり，同書簡が 3/9 世紀前半に執筆されたことについては，問題はないようにみえる。

[202] al-Kindī, *Bayān al-Sharʻ*, LXIX, 4-20.

[203] Abū Bakr al-Kindī, *al-Muṣannaf*, X, 136.

とっている。ハラフ・イブン・ウズラの問いは，彼が住む地域の人びとの書記たち（あるいは貴人たち）（kuttāb/kibār）が，アリーとウスマーンはバラーアとされない，と主張していたことについてであり，この一節は，ハラフ・イブン・ウズラが，イバード派の圏域ではないところに住む者であることを示している。

これに対してムハンマド・イブン・マフブーブは，ウスマーンとアリーが犯した誤りを説明し，両名が不信仰者であることを明らかにする。そしてそのさい，アブー・スフラ・アブドゥルマリク・イブン・スフラから伝えるものとして，ワーイル・イブン・アイユーブとマフブーブ・イブン・ラヒールが，アリーとウスマーン，またタルハやズバイル，イブン・ウマルにバラーアを宣告していたことを報告する。ムハンマド・イブン・マフブーブは，アブー・スフラを信頼できる人物（al-thiqa）として紹介する。アブー・スフラには，ムハンマド・イブン・マフブーブの兄弟とも交流があったことが伝えられており[204]，時代的な錯誤は生じてはおらず，またアブー・スフラとムハンマド・イブン・マフブーブの交流の設定も問題はない。このほか書き手は「ウスマーンは不信仰者として墓穴に入った」というフザイファ・イブン・ヤマーンの言葉を伝えている。さらに書き手は，自集団がワラーヤを認めなければならない相手として，ナフラワーンの徒，ヌハイラの徒，アブー・ビラール，ジャービル・イブン・ザイド，アブー・ウバイダそしてラビーウ・イブン・ハビーブを挙げる。イバード派の名祖であるアブドゥッラー・イブン・イバードが挙げられていないことは，同著作がムハンマド・イブン・マフブーブの活動時期に作成されたことの証拠である。

このほか，書簡中ではウスマーンとアリーへのバラーアに関連して，知識のある者がウスマーンとアリーについて判断を停止し，2 人とナフラワーンの徒について疑うことは受け入れられないこと，2 人をバラーアとする者たちについて判断停止することは，彼らがバラーアとする者へのバラーアが止まることになるので，ナフラワーンの徒にワラーヤを認めるまでは，その者は受け入れられないことなど，イバード派におけるワラーヤとバラーアの原理と規則が説明される。また 3/9 世紀末に起きたサルト・イブン・マーリクの退位への言及はみられず，さらに 4/10 世紀以降の複雑な議論の影響を受けていない。以上のことから，同書簡が彼によって作成されたと考えることができる。

B.2.4.6　サルト・イブン・ハミース

[204] al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, I, 64.

サルト・イブン・ハミースの著作として『出来事と諸属性の書』（*Kitāb al-Aḥdāth wa al-Ṣifāt*）また『開示と証拠の書』（*Kitāb al-Bayān wa al-Burhān*），「イブン・ジャアファルへの書簡」（*Sīra min Abī al-Mu'thir al-Ṣalt b. Khamīs ilá Abī Jābir Muḥammad b. Ja'far*）そして「サルト・イブン・ハミースの *Sīra*」（*Sīra al-Shaykh al-Faqīh Abī al-Mu'thir al-Ṣalt b. Khamīs*）が知られている。このうち前者の 2 つの著作はしばしば『啓示法の解明』にも引用が見られ，ともにイマーム，サルト・イブン・マーリクの退位の問題を扱う。

一方「サルト・イブン・ハミースの *Sīra*」について，カーシフの校訂本を利用したベンドリースは，著作中に①「アブー・マーリクの書簡から」という引用がみられることに加えて，②カーシフが便宜的に符号を付けた，同著作に続くアリフからラームまでの部分について，著作のテーマが，彼の作とされる他の 2 つの著作のテーマと異なる，③項目ごとのテーマという形式が，カーシフの校訂本の他の著作にはみられない，またヒジュラ暦 3 世紀にはテーマごとに配列するという形式はみられない，④「タウヒードの節」のはじめの表現は『書簡集』の他の著作にはみられない，⑤サルト・イブン・マーリクのイマーム退位を語るさい，その過ち（al-khaṭa'）をオマーンの人びとに帰している，⑥書簡の最後が「書簡が終わる」ではなく，「ムスリムたちの諸書簡が終わる」となっていることから，同部分はサルト・イブン・ハミースの著作ではないとした[205]。一方ファン＝エスやウィルキンソン，またクローネとツィマーマンは，サルト・イブン・ハミースの著作として当該部分を使用する[206]。

これらの指摘について，①'『書簡集』の写本 MakKh1 には，アブー・マーリクの書簡からという追加は含まれていない，②'サルト・イブン・ハミースが様々なテーマについて論じ，書き記したことは十分考えられる，③'既にみたように，イマーム，ムハンナー・イブン・ジャイファルの著作はテーマごとに配列されており，3/9 世紀にはすでに存在した形式である。④'上記②'の観点から，2 つの著作とは異なる種類の著作として，サルト・イブン・ハミースが「タウヒードの節」などにみられる i'lamū raḥima-nā Allāh wa iyyā-kum という表現を用いることは十分に考えられる。⑥'カーシフ校訂本以外の『書簡集』に採録される著作では「ムスリムたちの諸書簡が終わる」という表現にはなっていない。

そして⑤'について，当該部分は預言者ムハンマドの死後のイスラーム共同体の分裂を説明する。そしてそれを受けて「同じようにオマーンの人びともサルト・イブン・マーリク

[205] [Bendrissou 2003, 218-219]
[206] [van Ess 2010, 123-126][Wilkinson 2010, 133][Crone and Zimmerman (ed. and tr.) 2001, 199, 333]

について過ちを犯した」と記述される。すなわち当該部分は，上記 2 つの著作に見られる，自らの立場を示すことから距離をとり，オマーンのイバード派の分裂，またそれに対する人びとの対応を，イスラーム共同体の分裂とともに客観的に記述したと考えることができる。そしてこの部分に続く説明も，ワラーヤ，バラーアそしてウクーフの普遍的原則を説明するものとして理解することができるのではないだろうか。

この他の証拠として，⑦'『啓示法の解明』の定命（al-qadar）の章では，同著作の ب の部分がサルト・イブン・ハミースの書簡として引用される[207]。これらを踏まえると，アリフからラームの部分も，その原型はサルト・イブン・ハミースによって執筆されたとする立場は，正しいと判断できるだろう。

またバッラーディーは，サルト・イブン・ハミースの『ハラールとハラームに関する 500 の節の解釈』（*Tafsīr Khamsami'a Āya fī al-Ḥalāl wa al-Ḥarām*）という著作に言及する[208]。現在までに刊行されるものは，彼と交流のあった次世代のアブー・ハワーリー（Abū al-Ḥawārī Muḥammad b. al-Ḥawārī al-Ḥawārī）[209]によるクルアーン解釈書である。この解釈書は，ムカーティル・イブン・スライマーン（Abū al-Ḥasan Muqātil b. Sulaymān al-Balkhī, d. 150/767）の解釈書を，イバード派の教義に合致するように改作したものと評価されている[210]。同解釈書の大部分は，法学にかかわる節を扱っているが，大罪者の地位など，本研究

---

[207] SIYAR, II, 284-288; al-Kindī, *Bayān al-Shar'*, II, 109-112. 『啓示法の解明』で引用される箇所には，『書簡集』では，連続的に記述される部分に「著者ではない補遺者は語る」（qāla ghayr al-mu'allif lil-kitāb wa al-muḍīf ilay-hi）という一文が挿入され，直後に「たぶんそれは li-dhālika である」という語が続く。その直前では khalafa-hum muḥtamilīn li-dhālika となっている。MakKh1 では khalaqa-hum muḥtamilat^{un} bi-dhālika である。MakKh1, 336. すなわち『啓示法の解明』の一文は，結局修正されていないが，その直前の li-dhālika のみを指していると考えることができる。また後代の人物による補遺の可能性が高いが，『イブン・ジャアファルの集成』には ي の部分が，サルト・イブン・ハミースの書簡として引用される。Ibn Ja'far, *al-Jāmi' li-Ibn Ja'far*, I, 220.

[208] Ṭalibī (ed.), *Ārā' al-Khawārij al-Kalāmiyya*, II, 284.

[209] アブー・ハワーリーは，オマーン内陸部ニズワーで活動した法学者で，視覚障害をもっていたと伝えられる。彼は，ムハンマド・イブン・マフブーブ，イブン・ジャアファル（al-Izkawī, Abū Jābir Muḥammad b. Ja'far, d. after 280/893），サルト・イブン・ハミース，ナブハーン・イブン・ウスマーン（Abū 'Abd Allāh Nabhān b. 'Uthmān, d. after 280/893）のもとで学んだ。後代には，彼らの次世代における代表的人物の一人として名が挙げられる。al-Shaqaṣī, *Manhaj al-Ṭālibīn* I, 494; al-Izkawī, *Kashf al-Ghumma* II, 893; [al-Jazā'irī and al-Shaybānī 2006, 379-380]; [al-Sa'dī 2007b, III, 66-70] また『書簡集』には，アブー・ハワーリーの書簡も収録されている。

[210] [al-Kharusi 2004, 272] イバード派では古くからクルアーンの解釈書が編纂されていたとされるが，現在校訂・出版されているもののうち，最古のイバード派のクルアーン解釈書は，3/9 世紀の北アフリカのイバード派の学者フード・イブン・ムハッカム・ハッワーリー（Hūd b. Muḥakkam al-Hawwārī, d. between 280/887-290/893）によって著された著作である。ハルースィー[al-Kharusi 2004, 271]は，フード・イブン・ムハッカムの解釈書は，同時

に関わる内容もいくつか含んでいる。

B.3　オマーンのイバード派の『集成』

イバード派では，3/9 世紀から『集成』（*al-Jāmi‘*）と標題が付けられた著作物が執筆されるようになる。『集成』では，前半で「宗教基礎」（uṣūl al-dīn）に関する議論が展開された後，宗教儀礼行為（‘ibādāt）や人間関係上の諸規定（mu‘āmalāt）に関するイバード派の学説が設例（mas’ala/pl. masā’il）形式とともに提示される[211]。この点において『集成』は，『書簡集』とは異なる性格を有している。『集成』で語られる内容は，モスクでの一般信徒への「説教」とは異なり，イスラーム的知を修めた／修めようとする者たちを読者として想定している。

諸集成の冒頭には，人間の宗教的分類と法規定についての記述，ワラーヤとバラーアに関する記述が含まれている。またいくつかの設例形式には，発題者や回答者の名前が明記されている。以下時代順に列挙する。

①al-Izkawī, Abū Jābir Muḥammad b. Ja‘far (d. after 280/893). *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*.

②al-Ḥawārī, Abū al-Ḥawārī Muḥammad b. al-Ḥawārī. *Jāmi‘ Abī al-Ḥawārī.*

③al-Kudamī, Abū Sa‘īd Muḥammad b. Sa‘īd (d. after 361/972). *al-Jāmi‘ al-Mufīd min Aḥkām Abī Sa‘īd*.

④al-Bisyawī, Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Muḥammad (d. after 363/973-4). *Jāmi‘ Abī al-Ḥasan al-Bisyawī.*

③は 12/18 世紀の学者スィルハーン・イズカウィーによって編纂されたものである。①について『イブン・ジャアファルの集成』と呼ばれる著作は，後述する『啓示法の解明』の主たる典拠になっており，またバッラーディーによっても紹介されることから[212]，イバード派の宗教基礎論，法源論，そして実定法にとって貴重な資料であったことがわかる。一方で①の校訂者アーミルが指摘するように，オマーン国国家遺産文化省から出版された

代のヤヒヤー・イブン・サッラーム・バスリー（Yaḥyá b. Sallām al-Baṣrī, d. after 273/887）の注釈をベースにしつつ，そこにイバード派の見解が加えられたものであると分析する。

[211] 設例形式とは「個々の，現実または架空の事案に対して解決を示すというカズイスティークな体裁を取っていて，体系的・理論的な記述にはなっていない」形式を指す[柳橋 1998, i]。

[212] [Ṭālibī (ed.) 1978, II, 285]

同著作がイブン・ジャアファルによって編纂されたと考えることは難しい。なぜなら，イブン・ジャアファルの活動時期以降に活動したと考えられるクダミーの見解[213]やビスヤウィーの見解[214]がしばしば引用されるからである。さらに本文中には「アブー・ジャービル・ムハンマド・イブン・ジャアファルに帰される集成から」という表現もみられる[215]。しかしながら，著作中には 2-3/8-9 世紀のイバード派の動向について，他の著作にはみられない情報も含まれており，同校訂本がイブン・ジャアファルの編纂によるものでなくとも，イバード派思想研究にとって有益な著作である。本研究では『イブン・ジャアファルの集成』として言及した。

このほか②も「アブー・ハワーリーの回答から」という表現がみられるように，彼の見解を次世代以降の人物がまとめたという形になっている。また④の第 1 巻は，イスラーム神学の分野で取り上げられる神の諸属性やカダル論に関する記述を，体系的・理論的に解説しており，他の著作とは性格を異にしている[216]。

[213] Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 118.
[214] Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 139.
[215] Ibn Ja‘far, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, 95.
[216] このほかイバード派で編纂された『集成』には，法学的問題を扱った『ファドル・イブン・ハワーリーの集成』（*Jāmi‘ al-Faḍl b. al-Ḥawārī*）や，法源論および実定法を扱ったイブン・バラカの『集成の書』（*Kitāb al-Jāmi‘*）がある。ハーリド・イブン・カフターンの『集成』など，まだ校訂・出版されていない著作もあり，今後の研究が待たれる。

参考文献一覧

略号

MakKh1 *Siyar al-Muslimīn*, Ms. Maktaba Nāṣir b. Rāshid al-Kharūṣī.

MakKh2 *al-Siyar*, Ms. Maktaba al-Khalīlī.

MakS *al-Siyar*, Ms. Maktaba al-Sālimī.

MakSQ *al-Siyar al-Ibāḍiyya,* Ms. Ministry of National Heritage and Culture, no. 543, a photocopy preserved in the Omani Study Center, Sultan Qaboos University.

SIYAR S. Kāshif (ed.), *al-Siyar wa al-Jawābāt li-'Ulamā' wa A'imma 'Umān*, 2 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1986.

A イバード派資料

al-'Abdī, Abū Sufyān Maḥbūb b. al-Raḥīl. *'Ahd ilá Ṭālib al-Ḥaqq (sic.).* in: al-Darjīnī, *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā'ikh bil-Maghrib*, ed. I. Ṭallāy, n.d., II, pp. 279-290.

-----. *Sīra ilá Ahl Ḥaḍramawt fī Amr Hārūn b. al-Yamān.* in: SIYAR, I, pp. 308-324 (no.8); MakS, pp. 307-312; MakSQ, pp. 174-182; MakKh2, 105a-107b (text incomplete).

-----. *Sīra ilá Ahl 'Umān fī Amr Hārūn b. al-Yamān.* in: SIYAR, I, pp. 276-307 (no.7); MakS, pp. 298-307; MakSQ, pp. 162-174; MakKh2, 95b-104b (text incomplete).

(att.) 'Abd Allāh b. Ibāḍ. *Risāla 'Abd Allāh b. Ibāḍ ilá Abd al-Malik b. Marwān.* in: SIYAR, II, pp. 325-345 (no.32); MakS, pp. 224-229; MakSQ, pp. 45-51; MakKh1, pp. 265-275; MakKh2, pp. 178a-183a.

al-Afwī, Abū Sulaymān Muḥammad b. 'Āmir (d. 1190/1776). *Qiṣaṣ wa Akhbār Jarat fī 'Umān.* ed. S. al-Hāshimī, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 2007.

Anonymous. *Kitāb ilá Ahl 'Umān fī-hi Dhikr Fitna Ibn Durham ḥīna Waqa'a al-Ikhtilāf bayna Ahl 'Umān fi Zaman Abī 'Ubayba wa Ḥājib.* in: MakSQ, pp. 63-67; MakKh1, pp. 292-296.

Anonymous. *Sīra li-Ba'ḍ Fuqahā' al-Muslimīn ilá al-Imām al-Ṣalṭ b. Mālik.* in: SIYAR, I, pp. 186-232 (no.4); MakS, pp. 268-284; MakSQ, pp. 469-489; MakKh2, 26a-38a.

Anonymous. *Kitāb fī-hi Radd 'alá Ahl al-Shakk.* in: MakSQ, pp. 37-45; MakKh1, pp. 254-264.

Anonymous. *Risāla ilá Ahl Khurāsān*. in 'A. al-Salimi, *The Omani Siyar as a Literary Genre and Its Role in the Political Evolution and Doctrinal Development of Eastern Ibāḍism, with Special Reference to the Epistles of Khwārizm, Khurāsān and Manṣūra.* PhD.

Thesis, Durham University, 2001, pp. 107-121.

Anonymous. *Risāla ilá Ahl Khwārizm*. in ‘A. Al-Salimi, *The Omani Siyar as a Literary Genre and Its Role in the Political Evolution and Doctrinal Development of Eastern Ibāḍism, with Special Reference to the Epistles of Khwārizm, Khurāsān and Manṣūra.* PhD. Thesis, Durham University, 2001, pp. 93-95.

Anonymous. *Tārīkh Ahl ‘Umān*. ed. S. ‘Āshūr, 2nd ed., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 1984.

Anonymous. *Kitāb al-Mu‘allaqāt fī Akhbār wa Riwāyāt Ahl al-Da‘wa.* ed. S. I. al-Wārijlānī, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqafa, 2009.

al-Aṣamm, Abū ‘Abd Allāh ‘Uthmān b. Abī ‘Abd Allāh (d. 631/1234). *Kitāb al-Nūr.* Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1983.

-----. *Risāla fī al-‘Aqīda.* in: Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Ibrāhīm al-Kindī, *Bayān al-Shar‘*, III, pp. 201-224.

al-‘Awtabī, Abū al-Mundhir Salama b. Muslim al-Ṣuḥārī. *Kitāb Ansāb al-‘Arab.* ed. M. al-Naṣṣ, 2 vols., 4th ed., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 2006.

-----. *al-Ḍiyā’.* ed. N. al-Mundhirī, 21 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1990-6.

-----. *Kitāb al-Ibāna fī al-Lugha al-‘Arabiyya.* eds. ‘A Khalīfa, N. Abd al-Raḥmān, Ṣ. Jarrār, Ḥ. ‘Awwād and J. Abū Ṣūfīya, 4 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1999.

-----. *Ta‘līq fī Ma‘ná ‘an al-Shaykh Abī Mundhir Salama b. Muslim.* in: SIYAR, II, pp. 39-45 (no.23); MakS, pp. 18-20; MakKh2, 138b-140a.

al-Azdī, Abū al-Sha‘thā Jābir b. Zayd. *Rasā’il al-Imām Jābir b. Zayd*. Masqaṭ: Maktaba Islāmiyya, ج 616.

al-Bahlānī, Abū Muslim Nāṣir b. Sālim (d. 1339/1920). *al-‘Aqīda al-Wahbiyya.* ed. ‘A. al-Qannūbī and Ṣ. al-Qannūbī, Masqaṭ: Maktaba Masqaṭ, 2004.

-----. *Nithār al-Jawhar.* 5 vols., Masqaṭ: Maktaba Masqaṭ, 2009.

al-Bahlānī, Abū al-Mu’thir al-Ṣalt b. Khamīs (d. after 278/891-2). *Kitāb al-Aḥdāth wa al-Ṣifāt.* in: SIYAR, I, pp. 23-85 (no.1); MakS, pp. 157-178; MakSQ, pp. 305-333; MakKh2, 4a-17b.

-----. *Kitāb al-Bayān wa al-Burhān Radd ʻalá man Qāla bil-Shāhidayn.* in: SIYAR, I, pp. 155-185 (no.3); *al-Siyar*, MakS, pp. 256-268; MakSQ, pp. 333-347; MakKh2, 18a-26a.

-----. *Sīra al-Shaykh al-Faqīh Abī al-Mu'thir al-Ṣalt b. Khamīs.* in: SIYAR, II, pp. 269-319 (no.30); MakS, pp. 102-120, 291-298, 368-371; MakSQ, pp. 347-364; MakKh1, pp. 327-352; MakKh2, 38a-48b.

-----. *Sīra min Abī al-Mu'thir al-Ṣalt b. Khamīs ilá Abī Jābir Muḥammad b. Jaʻfar.* in: SIYAR, I, pp. 254-275 (no.6); MakSQ, pp. 269-277, MakKh2, 115b-120a.

al-Baḥrānī, Khalaf b. Ziyād (d. after 134/752). *Sīra Khalaf b. Ziyād al-Baḥrānī.* in: MakS, pp. 583-613; MakSQ, pp. 107-136; MakKh1, pp. 215-254.

al-Barrādī, Abū al-Qāsim Faḍl b. Ibrāhīm. *Hādhā Kitāb fī-hi al-Jawāhir.* al-Qāhira: al-Maktaba al-Bārūniyya?, 1302/1884-5.

al-Bisyawī, Abū al-Ḥasan ʻAlī b. Muḥammad (d. after 363/973-4). *Jāmiʻ Abī al-Ḥasan al-Bisyawī.* 4 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1984; ed. S. Bābzīz and D. Bābzīz, 4 vols., 2008.

-----. *Kitāb Mukhtaṣar al-Bisyawī.* London: Dar Alhikma, 2007.

-----. *Sīra.* in: *al-Siyar.* MakS, pp. 384-398.

-----. *Fī Radd ʻalá Muḥammad b. Saʻīd.* in: SIYAR, II, pp. 106-112 (no.26); MakS, pp. 43-46; MakKh2, 153b-155a.

-----. *Sīra ʻan al-Shaykh Abī al-Ḥasan.* in: SIYAR, II, pp. 124-222 (no.28).

-----. *Sīra al-Su'āl ʻan Abī al-Ḥasan ʻAlī b. Muḥammad.* in: SIYAR, II, pp. 62-105 (no.25); MakKh2, 144a-153b.

-----. *Sīra Abī al-Ḥasan al-Bisyāwī Ḥujjat*[an] *ʻalá man Abṭala al-Su'āl fī al-Ḥadath al-Wāqiʻ bi-ʻUmān.* in: MakS, pp. 27-43; MakSQ, pp. 435-452; MakKh2, 68b-88b.

-----. *Fī Ḥafṣ b. Rāshid Ayyāma Khurūji-hi ʻalá al-Muṭahhar b. ʻAbd Allāh wa ʻAqdi-hi al-Awwal.* in: SIYAR, II, pp. 5-8 (no.19); MakSQ, pp. 489-496; MakKh2, 131a-133b.

al-Būsaʻīdī, Abū Zuhayr Muhannā b. Khalfān (d. 1250/1835). *Kitāb Lubāb al-Āthār.* ed. ʻA. Shalabī, 14vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 1981-87.

al-Darjīnī, Abū ʻAbbās Aḥmad b. Saʻīd (d. 670/1271-2). *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashā'ikh bil-Maghrib.* ed. I. Ṭallāy, 2 vols., Constantine, 1974.

al-Faḍl b. al-Ḥawārī. *Jāmiʻ al-Faḍl b. al-Ḥawārī.* 3 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa

al-Thaqāfa, 1985.

al-Farāhīdī, Abū ‘Amr al-Rabī‘ b. Ḥabīb (d. ca. 170/786). *Āthār al-Rabī‘ b. Ḥabīb.* ed. K. al-Kharusi in His Ph.D. Dissertation *Āthār al-Rabī‘ al-Ḥabīb: Edition and Study*, University of Oxford, 2004.

-----, Mukhlad b. al-‘Umurrud wa Wā’il b. Ayyūb. *al-Risāla al-Ḥujja.* ed. S. al-Wārijlānī, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 2009.

al-Ḥaḍramī, Abū Ayyūb Wā’il b. Ayyūb. *Sīra ‘an al-Shayḥ al-Imām Wā’il b. Ayyūb.* in: SIYAR, II, pp. 46-61 (no.24); MakS, pp. 20-27; MakSQ, pp. 182-190; MakKh2, 140a-144a.

-----. *Ṣifa al-Islām.* in: Abū Jābir Muḥammad b. Ja‘far al-Izkawī, *al-Jāmi‘ li-Ibn Ja‘far*, I, pp. 98-115.

al-Ḥaḍramī, Abū Isḥāq Ibrāhīm b. Qays al-Hamdānī (d. between 475-500/1082-1106). *Mukhtaṣar al-Khiṣāl.* ed. ‘A. M. al-Kharūṣī, al-Qāhira wa Masqaṭ: Maktaba Masqaṭ, 2011.

al-Hajjārī, Abū Qaḥṭān Khālid b. Qaḥṭān. *Sīra Abī Qaḥṭān Khālid b. Qaḥṭān.* in: SIYAR, I, pp. 86-154 (no.2); MakSQ, pp. 364-400; MakKh2, 48b-64b.

-----. *Sīra Abī Qaḥṭān Khālid b. Qaḥṭān ilá al-Azhar b. Muḥammad b. Ja‘far.* in: MakS, pp. 371-375.

Hārūn b. al-Yamān. *Risāla Hārūn b. al-Yamān ilá al-Imām al-Muhannā b. Jayfar fī Sha’n Maḥbūb b. al-Raḥīl.* in: SIYAR, I, pp. 325-337 (no.9); MakS, pp. 313-316; MakSQ, pp. 155-161; MakKh2, 107b-110b (text incomplete).

al-Ḥawārī, Abū al-Ḥawārī Muḥammad b. al-Ḥawārī. *Jāmi‘ Abī al-Ḥawārī.* 5 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1985.

-----. *Sīra Abī al-Ḥawārī Muḥammad b. al-Ḥawārī li-Ahl Ḥaḍramawt*. in: SIYAR, I, pp. 338-365 (no.10), MakSQ, pp. 278-290; MakKh2, 88b-95b.

-----. *al-Dirāya wa Kanz al-Ghināya wa Muntahá al-Ghāya wa Bulūgh al-Kifāya fī Tafsīr Khamsami’a Āya.* ed. M. M. Abd al-Raḥmān, 2 vols., Masqaṭ: Maṭābi‘ al-Nahḍa, 1991.

al-Hawwārī, Hūd b. Muḥakkam (d. between 280/887-290/893). *Tafsīr Kitāb Allāh al-‘Azīz.* ed. B. S. Sharīfī, 4 vols., al-Jazā’ir: Dār al-Baṣā’ir, 2005.

Ibn Baraka, Abū Muḥammad ‘Abd Allāh b. Muḥammad (d. between 342-355/953-966). *Kitāb al-Jāmi‘.* ed. ‘I. al-Bārūnī, 2 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 2007.

-----. *Sīra al-Shaykh Abī Muḥammad ʻAbd Allāh Muḥammad b. Barka.* in: MakS, pp. 242-250; MakSQ, pp. 407-419; MakKh2, 192a-198b.

-----. *Kitāb al-Muwāzanā ʻan al-Shaykh al-ʻĀlam Abī Muḥammad ʻAbd Allāh Muḥammad b. Barka.* in: SIYAR, II, pp. 383-420 (no.34); MakS, pp. 229-242; MakSQ, pp. 419-435; MakKh2, 183a-192a.

-----. *Kitāb al-Taʻāruf.* Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1998.

Ibn Jaʻfar, Abū Jābir Muḥammad b. Jaʻfar al-Izkawī (d. after 280/893). *al-Jāmiʻ li-Ibn Jaʻfar.* ed. ʻA. ʻĀmir, 6 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1995.

Ibn Maddād, Muḥammad b. ʻAbd Allāh b. Maddād. *Sīra Tunsabu fī Āthiri-hā ilá Muḥammad b. ʻAbd Allāh b. Maddād fī-hā Ṣifa Nasab al-ʻUlamāʼ wa Mawti-him wa Buldāni-him wa al-Aʼimma.* in: MakSQ, 566-589; MakKh2, 266a-279b.

Ibn Sallām al-Ibāḍī. *Kitāb fī-hi Badʼ al-Islām wa Sharāʼiʻ al-Dīn.* ed. W. Schwartz and S. Yaʻqūb, Bayrūt: Dār Ṣādir, 1986.

al-Izkawī, Abū ʻAlī Mūsá b. ʻAlī (d. 230/845). *Kitāb min Abī ʻAlī ilá al-Imām.* in: MakSQ, pp. 205-208; MakKh1, pp. 211-214.

-----. *Sīra Abī ʻAlī.* in: MakSQ, pp. 208-210; MakKh1, pp. 302-305.

-----. *Jawāb min Mūsá b. ʻAlī wa Hāshim b. Ghaylān wa Ahl Izkī ilá al-Imām ʻAbd al-Malik b. Ḥumayid.* in: MakSQ, pp. 204-205; MakKh1, pp. 199-200.

al-Izkawī, al-Azhar b. Muḥammad b. Jaʻfar. *Naṣīḥa wa Kalām lil-Azhar b. Muḥammad b. Jaʻfar.* in: MakSQ, pp. 461-464.

al-Izkawī, Mūsá b. Abī Jābir al-Ḍabbī (d. 181/797). *Sīra al-Imām Mūsá b. Abī Jābir.* in: MakSQ, pp. 190-192; MakKh1, pp. 296-299.

al-Izkawī, Sirḥān b. ʻUmar b. Saʻīd (d. after 1140/1728). *Kashf al-Ghumma al-Jāmiʻ li-Akhbār al-Umma.* ed. H. M. ʻA. al-Nābūda, 2 vols., Bayrūt: Dār al-Bārūdī, 2006.

-----. *Tārīkh ʻUmān al-Muqtabas min Kashf al-Ghumma al-Jāmiʻ li-Akhbār al-Umma.* ed. ʻA. al-Qaysī, 4th ed., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 2005.

al-Jaʻlānī, Munīr b. al-Nayyir (d. after 192/808). *Sīra Munīr b. al-Nayyir al-Jaʻlānī ilá al-Imām Ghassān b. ʻAbd Allāh.* in: SIYAR, I, pp. 233-253; MakS, pp. 284-291; MakSQ, pp. 76-84; MakKh1, pp. 188-199; MakKh2, 111a-115b.

al-Jannāwunī, Abū Zakariyyā Yaḥyá b. Abī al-Khayr. *Kitāb al-Waḍʻ: Mukhtaṣar fī al-Uṣūl wa*

al-Fiqh. Masqaṭ: Maktaba al-Istiqāma, n.d.

al-Jayṭālī, Abū Ṭāhir ʻAbd al-Raḥmān b. ʻUmar (d. 750/1349-50 or 730/1329-30). *Kitāb Qanāṭir al-Khayrāt.* 3 vols., Masqaṭ: Dār al-Nahḍa lil-Nashr wa al-Tawzīʻ, 2008.

-----. *Qawāʼid al-Islām*. ed. B. ʻAbd al-Raḥmān, Masqaṭ: Maktaba al-Istiqāma, 2003.

al-Khalīlī, Saʻīd b. Khalfān (d. 1287/1871). *Kursī Uṣūl al-Dīn fī al-Walāya li-Muʼminīn al-Muttaqīn wa al-Barāʼa min al-Kāfirīn wa al-Munāfiqīn wa al-Ḥujja ʻalá al-Mulḥidīn al-Ḍāllīn.* ed. Kh. al-Būsaʻīdī, al-Sīb: Maktaba al-Ḍāmirī lil-Nashr wa al-Tawzīʻ, 2007.

al-Kharūṣī, Abū Muʻāwiya ʻAzzān b. al-Ṣaqr (d. ca 268/881-2). *Kitāb ʻAzzān b. al-Ṣaqr fī al-Radd ʻalá man Yaqūl bi-Khalq al-Qurʼān.* in: MakS, pp. 404-407; MakSQ, pp. 289-295.

al-Khurāsānī, Abū Ghānim Bishr b. Ghānim. *Mudawwana Abī Ghānim al-Khurāsānī.* ed. Y. al-Nabhānī wa I. al-ʻUsākir, Masqaṭ: Dār al-Jīl al-Wāʻid, 2006.

-----. *al-Mudawwana al-Kubrá li-Abī Ghānim al-Khurāsānī bi-Taʻālīq Quṭb al-Aʼimma al-Shaykh Muḥammad b. Yūsuf Aṭfayyish.* ed. M. Ṣ. Bājū, 3 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 2007.

al-Khurāsānī, Abū ʻĪsá Ibrāhīm b. Ismāʻīl. *Risālā Abī ʻĪsá Ibrāhīm b. Ismāʻīl al-Khurāsānī.* in: Ibn Sallām al-Ibāḍī, *Kitāb fī-hi Badʼ al-Islām wa Sharāʼiʻ al-Dīn*, pp. 135-141.

al-Kindī, Abū ʻAbd Allāh Muḥammad b. Ibrāhīm (d. 508/1115). *Bayān al-Sharʻ*. 72 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1984-2006.

al-Kindī, Abū Bakr Aḥmad b. ʻAbd Allāh b. Mūsá (d. 557/1161-2). *al-Jawhar al-Muqtaṣir.* ed. S. Kāshif, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1983.

-----. *Kitāb al-Ihtidāʾ wa al-Muntakhab min Siyar al-Rasūl wa Aʾimma wa ʿUlamāʾ ʿUmān.* ed. S. Kāshif, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1985.

-----. *al-Muṣannaf.* ed. ʻA. ʻĀmir, 42 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1979-89.

al-Kindī, Saʻīd b. Aḥmad (d. 1207/1792). *al-Tafsīr al-Muyassar lil-Qurʼān al-Karīm.* ed. M. Sharīfī, M. Bābāʻammī, 3 vols., Masqaṭ: Maṭābiʻ al-Nahḍa, 2004.

al-Kudamī, Abū Saʻīd Muḥammad b. Saʻīd (d. after 361/971). *al-Jāmiʻ al-Mufīd min Aḥkām Abī Saʻīd*. ed. H. al-Shādhilī, 5 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1985.

-----. *al-Jāmi‘ al-Mufīd.* 4 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1985.

-----. *al-Istiqāma*. ed. M. Abū al-Ḥasan, 3 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1985.

-----. *al-Mu‘tabar*. ed. M. Abū al-Ḥasan, 4 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1985.

al-Malshūṭī, Tibghūrīn b. ‘Īsá b. Dāwūd. *Kitāb al-Adilla wa al-Bayān.* ed. S. I. al-Wārijlānī, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqafa, 2009.

al-Nafūsī, Abū Ḥafṣ ‘Amrūs b. Fatḥ (d. 283/897). *Uṣūl al-Daynūna al-Ṣāfiya.* ed. A. Karrūm, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1999.

al-Nizwī, Muḥammad b. ‘Abd Allāh b. Jum‘a b. ‘Ubaydān (d. 1106/1694-5), *Jawāhir al-Āthār*. 20 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1985.

al-Qalhātī, Abu Sa‘īd Muḥammad b. Sa‘īd al-Azdī. *Kitāb al-Kashf wa al-Bayān.* Ms. British Library Or. 2606; ed. S. Kāshif, 2 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1980.

al-Raḥīlī, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Maḥbūb (d. 260/873-4). *Wa fī al-Āthār ‘an Muḥammad b. Maḥbūb.* in: MakKh1, pp. 42-48.

-----. *Jawāb min al-‘Allāma Abī ‘Abd Allāh Muḥammad b. Maḥbūb lil-Imām al-Ṣalt b. Mālik.* in: MakKh1, pp. 372-378.

-----. *‘An Muḥammad b. Maḥbūb fī Asmā Allāh.* in: MakKh1, pp. 48-49.

-----. *Sīra Abī ‘Abd Allāh Muḥammad b. Maḥbūb ilá Imām Ḥaḍramawt.* in: MakS, pp. 86-102, 644-653; MakSQ, pp. 227-238; MakKh1, pp. 171-185.

-----. *Sīra Muḥammad b. Maḥbūb ilá Abī Ziyād Khalaf b. ‘Uzra.* in: MakSQ, pp. 223-227; MakKh1, pp. 144-150.

-----. *Sīra Abī ‘Abd Allāh Muḥammad b. Maḥbūb ilá Ahl al-Maghrib.* in: SIYAR, II, pp. 223-268 (no. 29); MakS, pp. 476-485; MakSQ, pp. 238-258.

al-Raḥīlī, Abū al-Mundhir Bashīr b. Muḥammad b. Maḥbūb. *Kitāb al-Muḥāraba.* in: MakS, pp. 193-205; MakKh2, 156a-165b.

-----. *Kitāb al-Raṣf fī al-Tawḥīd wa Ḥudūth al-‘Ālam.* in: MakS, pp. 180-193; Photocopy of a Ms in the Omani Culture Studies Center of Sultan Qaboos University, BP 166.2.M371, pp. 6-38.

-----. *Sīra Abī al-Mundhir Bashīr b. Muḥammad fī al-Ḥadath al-Wāqi‘ bi-‘Umān.* in: MakS pp. 4-11; MakSQ, pp. 400-407, MakKh1, pp. 53-64; MakKh2, 64b-68b.

-----. *Abwāb min al-Sunna Mukhtaṣara.* In S. al-Wārijlānī (ed.), *al-Imām Muḥammad b. Maḥbūb al-Raḥīlī: Ḥayātu-hu wa Āthāru-hu*, Masqaṭ, 2009, pp. 227-307.

al-Rustamī, ‘Abd al-Wahhāb b. ‘Abd al-Raḥmān (d. 208/823-4). *Hādhihi Sharī‘a Risāla Kataba bi-hā ‘Abd al-Wahhāb b. ‘Abd al-Raḥmān Imām Tāhart ilá Ahl Aṭrābulus.* in: Ibn Sallām al-Ibāḍī, *Kitāb fī-hi Bad’ al-Islām wa Sharā’i‘ al-Dīn*, p. 93.

al-Sa‘dī, Jumayyil b. Khamīs (d. 13c/19c). *Qāmūs al-Sharī‘a.* ed. ‘A Shalabī, 21 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1983-.

Sālim b. Dhakwān. *Sīra Sālim b. Dhakwān.* ed. and tr. by P. Crone and F. W. Zimmermann, *The Epistle of Sālim ibn Dhakwān*, Oxford: Oxford University Press, 2001.

al-Sālimī, Nūr al-Dīn ‘Abdullāh b. Ḥumayd (d. 1332/1914). *Tuḥfa al-A‘yān bi-Sīra Ahl ‘Umān.* 2 vols. in 1, al-Sīb: Maktaba al-Imām Nūr al-Dīn al-Sālimī, 2000.

Shabīb b. ‘Aṭīya. *Kitāb Shabīb b. ‘Aṭīya ilá ‘Abd al-Salām ‘alá al-Shakkāk wa al-Murji’a.* in: MakSQ, pp. 153-155; MakKh1, pp. 159-163.

-----. *Sīra Shabīb b. ‘Aṭīya.* in: SIYAR, II, pp. 346-383 (no. 33); MakS, pp. 205-223; MakKh1, pp. 79-103; MakKh2, 166a-178a.

al-Shammākhī, Abū ‘Abbās Aḥmad b. Sa‘īd (d. 928/1522). *Kitāb al-Siyar.* ed. A. S. al-Siyābī, 2 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1987; ed. M. Ḥasan, 3 vols., Bayrūt: Dar al-Madār al-Islāmī, 2009.

al-Shammākhī, Abū ‘Abbās Aḥmad b. Sa‘īd, wa Ṣūla b. Ibrāhīm al-Ghadāmisī. *al-Ḥiwār al-Ibāḍī al-Mālikī.* ed. A. ‘Alī, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqāfa, 2006.

al-Shammākhī, Qāsim b. Sa‘īd b. Qāsim (d. 1334/1916), *al-Qawl al-Matīn fī al-Radd ‘alá al-Mukhālifīn.* 2nd ed., al-Sīb: Maktaba al-Ḍāmirī lil-Nashr wa al-Tawzī‘, 1992.

al-Shaqaṣī, Khamīs b. Sa‘īd b. ‘Alī al-Rastāqī (d. after 1059/1649). *Manhaj al-Ṭālibīn wa Balāgh al-Rāghibīn.* 10 vols., Masqaṭ: Maktaba Masqaṭ, 2006.

al-Sījānī, Abū al-Walīd Hāshim b. Ghaylān (d. after 207/822). *Sīra lil-Shaykh Hāshim b. Ghaylān ilá al-Imām ‘Abd al-Malik b. Ḥumayid.* in; SIYAR, II, pp. 36-38; MakS, p. 17; MakSQ, pp. 199-200, MakKh2, 138a-138b.

-----. *Sīra ilá al-Imām ‘Abd al-Malik b. Ḥumayid min Hāshim b. Ghaylān wa Muḥammad b. Mūsá*

wa al-Azhar b. ʻAlī wa al-ʻAbbās b. ʻAlī wa Saʻīd b. Jaʻfar. in: MakSQ, pp. 203-204; MakKh1, pp. 200-202.

al-Ṣubḥī, Saʻīd b. Bashīr (d. 1159/1746). *Kitāb al-Jāmiʻ al-Kabīr.* ed. S. al-Ḥārithī, 3 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1986.

al-Ṭāʾī, Abū Mawdūd Ḥājib b. Mawdūd (d. ca. 150/767-8). *Risāla Abī Mawdūd ilá man Balagha-hu Kitābu-nā Hādhā min al-Muslimīn*. in: MakS, pp. 576-578 (text incomplete); MakSQ, pp. 67-74; MakKh1, pp. 150-159.

-----. *Min Abī Mawdūd wa (sic) Ḥājib ilá Abī al-Ḥurr.* in: MakSQ, p. 63; MakKh1, pp. 290-291.

al-Ṭāʾī, Abū Mawdūd Ḥabīb b. Ḥafṣ (d. after 192/808). *Naṣīḥa Abī Mawdūd lil-Imām Ghassān b. ʻAbd Allāh.* in: MakSQ, pp. 74-76; MakKh1, pp. 299-302.

al-Tamīmī, Abū ʻUbayda Muslim b. Abī Karīma (d. ca.158/775). *Risāla al-Imām Abī ʻUbayda fī al-Zakāt.* in: M. al-Rāshdī, *al-Imām Abū ʻUbayda Muslim b. Abī Karīma al-Tamīmī wa Fiqhu-hu*, al-Manṣūra: Maṭābiʻ al-Wafāʾ, 1992, pp. 513-530.

-----. *Wa Hādhā min Kutub Abī ʻUbayda Raḥima-hu Allāh*. in: MakSQ, pp. 61-63; MakKh1, pp. 288-290.

al-Tamīmī, Abū ʻUbayda Muslim b. Abī Karīma wa al-Ṭāʾī, Abū Mawdūd Ḥājib b. Mawdūd. *Hādhā Kitāb Muslim b. (sic) Abī ʻUbayda wa Ḥājib ilá Ahl al-Maghrib.* in: MakSQ, pp. 51-56; MakKh1, pp. 275-281.

-----. *Hādhihi Risāla Abī ʻUbayda wa Abī Mawdūd.* in: MakSQ, pp. 56-59; MakKh1, pp. 281-285.

-----. *Hādhā min Abī ʻUbayda wa Abī Mawdūd ilá al-Faḍl b. Kathīr.* in: MakSQ, pp. 59-61; MakKh1, pp. 285-290.

al-Warjlānī, Abū Zakariyyāʾ Yaḥyá b. Abī Bakr (d. after 504/1110-1). *Kitāb Siyar al-Aʾimma wa Akhbāri-him.* ed. I. ʻArabī, Bayrūt: Dār al-Gharb al-Islāmī, 1982.

al-Warjlānī, Abū Yaʻqūb Yūsuf b. Ibrāhīm. *al-Dalīl wa al-Burhān.* ed. S. Ḥ. al-Hārithī, 3 vols. in 2, Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqafa, 2006.

-----. *al-Jāmiʻ al-Ṣaḥīḥ: Musnad al-Imām al-Rabīʻ b. Ḥabīb*. ed. ʻA. Yūsuf, Masqaṭ: Maktaba al-Istiqāma, 1995; *Kitāb al-Tartīb fī al-Ṣaḥīḥ min Ḥaḍīth al-Rasūl.* ed. ʻA. al-Sālimī, Masqaṭ: Maktaba Masqaṭ, 2011.

-----. *Kitāb al-ʻAdl wa al-Inṣāf fī Maʻrifa Uṣūl al-Fiqh wa al-Ikhtilāf.* 2 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1984.

al-Wisyānī, Abū Khazr Yaghlā b. Zaltāf (d. 380/990). *al-Radd ʻalá Jamīʻ al-Mukhālifīn.* ed. ʻA al-Nāmī, al-Sīb: Maktaba al-Ḍāmirī lil-Nashr wa al-Tawzīʻ, 2008.

al-Wisyānī, Abū al-Rabīʻ Sulaymān b. ʻAbd al-Salām. *Siyar al-Wisyānī.* ed. ʻU. Bū ʻAṣbāna, 3 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth wa al-Thaqafa, 2009.

al-Yaḥmadī, al-Muhannā b. Jayfar al-Fajḥī (d. 237/851). *Min al-Imām al-Muhannā b. Jayfar ilá Muʻādh b. Ḥarb.* in: MakS, pp. 621-634; MakSQ, pp. 210-223; MakKh1, pp. 352-372.

al-Yaḥmadī, Rāshid b. Saʻīd (d. 445/1053). *Risāla min al-Imām Rāshid b. Saʻīd*, in ʻA. Al-Salimi, *The Omani Siyar as a Literary Genre and Its Role in the Political Evolution and Doctrinal Development of Eastern Ibāḍism, with Special Reference to the Epistles of Khwārizm, Khurāsān and Manṣūra.* PhD. Thesis, Durham University, 2001, pp. 148-167; MakS, pp. 375-384; MakKh2, 218b-225a.

B　そのほかのアラビア語資料

Abū Ḥanīfa, al-Nuʻmān b. Thābit (d. 150/767). *Risāla Abī Ḥanīfa ilá ʻUthmān al-Battī.* in: M. Z. al-Kawtharī (ed.), *al-ʻĀlim wa al-Mutaʻallim*, al-Qāhira: Maktaba al-Anwār bil-Qāhira, 1949, pp. 34-38.

Abū ʻUbayd, al-Qāsim b. Sallām (d. 224/838). *Kitāb al-Īmān wa Maʻālimi-hi, wa Sunani-hi, wa Istikmāli-hi, wa Darajāti-hi.* ed. M. al-Bānī, Bayrūt: al-Maktaba al-Islāmī, 1983.

al-Ashʻarī, Abū al-Ḥasan ʻAlī b. Ismāʻīl (d. 324/935-6). *Kitāb Maqālāt al-Islamiyyīn wa Ikhtilāf al-Muṣallīn.* ed. H. Ritter, 3rd ed., Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1980.

-----. *Kitāb al-Lumaʻ fī al-Radd ʻalá Ahl al-Ziyag wa al-Bidaʻ wa fī Ākhiri-hi Risāla Istiḥsān al-Khawḍ fī ʻIlm al-Kalām.* ed. M. A. al-Dannāwī, Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʻIlmiyya, 2000.

ʻAṭwān, H. (ed.). *Jamhara al-Rasāʼil al-Umawiyya.* 3 vols., Bayrūt: Muʼassasa al-Risāla, 2008.

al-Azdī, Abū Zakariyyāʼ Yazīd b. Muḥammad al-Azdī (d. 334/945). *Tārīkh al-Mawṣil.* ed. ʻA Ḥabība, al-Qāhira: al-Majlis al-Aʻlá lil-Shuʼūn al-Islāmiyya, al-Jumhūriyya al-ʻArabiyya al-Muttaḥida, 1967.

al-Baghdādī, Abū Manṣūr ʻAbd al-Qāhir b. Ṭāhir (d. 428/1037). *Farq bayna al-Firaq*. ed. Lajna Iḥyāʼ al-Turāth al-ʻArabī, Bayrūt: Dār al-Jīl, n.d.

-----. *Kitab al-Milal wa al-Niḥal.* ed. A. N. Nādir, Bayrūt: Dār al-Mashriq, 1970.

al-Balādhurī, Aḥmad b. Yaḥyá b. Jābir (d. 279/892). *Ansāb al-Ashrāf.* ed. S. Zakkār wa R. al-Zarkalī, 13 vols., Bayrūt: Dār al-Fikr, 1996.

al-Bāqillānī, Abū Bakr Muḥammad b. al-Ṭayyib (d. 403/1013). *Kitāb al-Tamhīd al-Awā'il wa Talkhīṣ al-Ḍalā'il.* ed. 'I. A. Ḥaydar, Bayrūt: Mu'assasa al-Kutub al-Thaqāfiyya, 1993.

al-Baṣrī, Abū Sa'īd al-Ḥasan b. Yūsuf (d. ca. 110/728). *Min al-Ḥasan al-Baṣrī li-'Abd Allāh 'Abd al-Malik b. Marwān.* H. Ritter, "Studien zur Geschichte der islamischen Frömmigkeit," *Der Islam* 21, pp. 1-83, 1933.

al-Bazdawī, Abū al-Yusr Muḥammad b. Muḥammad (d. 493/1100). *Uṣūl al-Dīn.* ed. H. P. Linss (commented by 'A. H. al-Saqa'), al-Qāhira: al-Maktaba al-Azhariyya lil-Turāth, 2003.

al-Bukhārī, 'Abd al-'Azīz b. Aḥmad (d. 730/1329-30). *Kashf al-Asrār 'an Uṣūl Fakhr al-Islām al-Bazdawī.* 4 vols., Cairo: Dār al-Kitāb al-Islāmī, n. d.

al-Dhahabī, Shams al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad (d. 748/1348). *Kitāb al-Kabā'ir.* Abū Ẓabī: Maktaba al-Ṣifā', 2005.

al-Ghaznawī, Jamāl al-Dīn Aḥmad b. Muḥammad (d. 593/1197). *Kitāb Uṣūl al-Dīn.* ed. 'U. W. al-Dā'ūq, Beyrut: Dār al-Bashā'ir al-Islāmiyya, 1998.

Ḥasan b. Muḥammad b. al-Ḥanafīya (d. ca. 100/719). *Kitāb al-Irjā'.* J. van Ess, "Das Kitāb al-Irǧa' des Ḥasan B. Muḥammad B. al-Ḥanafīya," *Arabica* 21, pp. 20-52.

al-Ḥimyarī, Abū Sa'īd Nishwān (d. 573/1178?). *Ḥūr al-'Ayn 'an Kutub al-'Ilm al-Sharā'if dūna al-Nisā' al-'Afā'if.* ed. K. Muṣṭafá, 2nd ed, Bayrūt: Dār Āzāl, Ṣanʿāʾ: al-Maktaba al-Yamaniyya, 1985.

Ibn Farrā', Abū Ya'lā Muḥammad b. al-Ḥusayn (d. 458/1066). *Kitāb al-Mu'tamad fi Uṣūl al-Dīn.* ed. W. Haddad, Beirut: Dar el-Machreq, 1974.

Ibn Fūrak, Abū Bakr Muḥammad b. al-Ḥasan b. Fūrak (d. 406/1015). *Sharḥ al-'Ālim wa al-Muta'allim.* eds. A al-Sā'iḥ and 'A al-Wahba, Cairo: Maktabat al-Thaqāfa al-Dīniyya, 2008.

Ibn Ḥawqal, Abū al-Qāsim b. Ḥawqal al-Nuṣaybī. *Kitāb Ṣūra al-Arḍ.* Bayrūt: Manshūrāt Maktaba al-Ḥayāt, 1992.

Ibn Ḥazm, 'Alī b. Aḥmad (d. 456/1064). *al-Fiṣal fī al-Milal wa al-Ahwā' wa al-Niḥal*, ed. 'A Khalīfa, al-Qāhira: Maktaba wa Maṭba'a Muḥammad 'Alī Ṣabīḥ wa Awlādi-hi, 1928-29.

Ibn al-Jawzī, Abū al-Faraj ‘Abd al-Raḥmān b. ‘Alī (d. 597/1201). *Talbīs Iblīs*. ed. ‘U. F. al-Ḥarstānī and M. I. Zaghlī, Bayrūt: al-Maktaba al-Islāmiyya, 1994.

Ibn Kathīr, ‘Imād al-Dīn Ismā‘īl (d. 774/1373). *Qiṣas al-Anbiyā’*. ed. al-Bānī and al-Arnā’ūṭ, Bayrūt: Dār al-Arqam b. Abī al-Arqam, n.d.

al-Iṣbahānī, Abū Na‘īm Aḥmad b. ‘Abd Allāh (d. 430/1038-9). *Ḥilya al-Awliyā’ wa Ṭabaqāt al-Aṣfiyā’*. 4th ed., 10 vols., Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 1985.

al-Jāḥiẓ, Abū ‘Uthmān ‘Amr b. Bahr al-Baṣrī (d. 255/869). *al-Bayān wa al-Tabyīn.* ed. ‘A. M. Hārūn, 4 vols., al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī, 1998.

al-Jurjānī, ʿAlī b. Muḥammad (d. 816/1413). *Kitāb al-Taʿrīfāt.* ed. G. Fluegel, Lipsiae : Friderici Christiani Guilielmi Vogelii, 1845 (reprint ver. in 2000).

al-Kāsānī, Abū Bakr b. Mas‘ūd b. Aḥmad (d. 588/1191). *al-Mu‘tamad min al-Mu‘taqad.* Bibliotheque nationale de France, Ms. arabe 825/3, 322a-326a.

al-Khwārizmī, Rukn al-Dīn b. al-Malāḥimī (d. 536/1141). *Kitāb al-Fā’iq fī Uṣūl al-Dīn*. Tehran: Iranian Institute of Philosophy and Institute of Islamic Studies of Free University of Berlin, 2007.

al-Lāmishī, Abū al-Thanā’ Maḥmūd b. Zayd. *al-Tamhīd li-Qawā’id al-Tawḥīd.* ed. A. M. Turkī. Bayrūt: Dār al-Gharb al-Islāmī, 1995.

al-Malaṭī, Abū al-Ḥusayn Muḥammad b. Aḥmad (d. 377/987-8). *Kitāb al-Tanbīh wa al-Radd ‘alá Ahl al-Ahwā’ wa al-Bida‘*. ed. S. Dedering, Bayrūt: al-Ma‘had al-Almānī lil-Abḥāth al-Sharqiyya, 2009.

al-Marzubānī, Abū ‘Ubayd Allāh Muḥammad b. ‘Imrān (d. 383/994) *Akhbār al-Sayyid al-Ḥimyarī.* in: M. H. al-Umaynī (ed.), *Min Maṣāḍir al-‘Aqā’id ‘inda al-Shī‘a al-Imāmiyya.* Bayrūt: Sharika al-Kutub lil-Ṭibā‘a wa al-Nashr wa al-Tawzī‘, 1993.

al-Māturīdī, Abū Manṣūr Muḥammad b. Muḥammad (d. 333/944). *Kitāb al-Tawḥīd.* ed. B. Topaloğlu and M. Aruçi, Ankara: Isam Yayınları, 2005.

-----. *Tafsīr al-Qur’ān al-‘Aẓīm al-Musammá Ta’wīlāt Ahl al-Sunna.* ed. F. Y. al-Khaymī, 5 vols., Bayrūt: Mu’assasa al-Risāla al-Nāshrūn, 2004.

al-Minqarī, Naṣr b. Muzāḥim (d. 212/827-8). *Waqa‘a Ṣiffīn.* ed. ‘A. M. Hārūn, Bayrūt: Dār al-Jīl, 1990.

al-Miṣfarī, Abū ‘Amr Khalīfa b. Khayyāṭ (d. 240/854-5). *Ta’rīkh Khalīfa b. Khayyāṭ*. Bayrūt: Dār

al-Kutub al-‘Ilmiyya, 1995.

al-Mubarrad, Abū al-‘Abbās Muḥammad b. Yazīd (d. 285/898). *al-Kāmil fī al-Lugha wa al-Adab.* ed. ‘A al-Hindāwī, 2 vols., Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 2003.

al-Nasafī, Abū al-Mu‘īn Maymūn b. Muḥammad (d. 508/1114). *Tabṣira al-Adilla fī Uṣūl al-Dīn ‘alá Ṭarīqa Imām Abī Manṣūr al-Māturīdī.* ed. C. Salāma, 2vols., Damascus: Institut français de Damas, 1990-93.

-----. *Baḥr al-Kalām.* ed. S. Y. Aḥmad, Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 2005.

al-Qāḍī al-Nu‘mān b. Muḥammad, *Da‘ā’im al-Islām wa Dhikr al-Ḥalāl wa al-Ḥarām wa al-Qaḍāyā wa al-Aḥkām.* ed. A. Aṣgharfayḍī, 2 vols., al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif, 1963.

al-Ṣābūnī, Abū Muḥammad Aḥmad b. Maḥmūd (d. 580/1184). *Kitāb al-Bidāya min al-Kifāya fī al-Hidāya fī Uṣūl al-Dīn.* ed. F. Kholeif, Cairo: Dār al-Ma‘ārif, 1969.

al-Saksakī, Abū al-Faḍl ‘Abbās b. Manṣūr al-Ḥanbalī (d. 683/1284-5). *al-Burhān fī Ma‘rifa ‘Aqā’id Ahl al-Adyān.* ed. B. al-‘Amūsh, 2nd ed., al-Zarqā’: Maktaba al-Manār, 1996.

al-Samarqandī, Abū al-Layth Naṣr b. Muḥammad (d. ca. 373/ 983). *Bustān al-‘Ārifīn.* ed. ‘A. ‘Alī, Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 2003.

al-Samarqandī, Abū Muqātil Ḥafṣ b. Muslim (d. 208/823). *al-‘Ālim wa al-Muta‘allim.* in: M. Z. al-Kawtharī (ed.), *al-‘Ālim wa al-Muta‘allim*, al-Qāhira: Maktaba al-Anwār bil-Qāhira, 1949, pp. 8-32.

al-Samarqandī, ‘Alā’ al-Dīn Abū Bakr Muḥammad b. Aḥmad. *Sharḥ Ta’wīlāt al-Qur’ān.* Suleymaniye, Ms. Hamidiye 176; Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ms. Medine 179.

al-Shahrastānī, Abū al-Fatḥ Muḥammad b. ‘Abd al-Karīm (d. 548/1153). *Kitāb al-Milal wa al-Niḥal.* ed. A. ‘A. Muhannā, ‘A. Ḥ. Fā‘ūr, 8th ed., Bayrūt: Dār al-Ma‘rifa, 2001.

al-Sharīf al-Raḍī, Muḥammad b. al-Ḥusayn (d. 407/1016). *Nahj al-Balāgha.* Bayrūt: Dār al-Jīl, n.d.

al-Ṭabarī, Abū Ja‘far Muḥammad b. Jarīr (d. 310/923). *Tafsīr al-Ṭabarī al-Musammá Jāmi‘ al-Bayān fī Ta’wīl al-Qur’ ān.* ed. A. I. Shakūāknī, 13 vols., Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 1999.

-----. *Tārīkh al-Rusul wa al-Mulūk.* ed. M. Ibrāhīm, 2nd ed., 11 vols., al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif, 1967.

al-Usmandī, ‘Alā’ al-Dīn Muḥammad b. ‘Abd al-Ḥamīd (d. 552/1157). *Lubāb al-Kalām.* ed. M. S.

Özervarlı, İstanbul: İslâm Araştırmaları Merkezi, 2005.

al-Ustuwā'ī, Sā'id b. Muhammad (d. 431/1040-41). *'Aqīda Marwiya 'an al-Imām al-A'ẓam.* Ms. Leiden Or. 706 (5), ff. 39b-63a; ed. S. Bahcıvan, Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 2005.

al-Zuhrī, Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Sa'd (d. 230/845). *Kitāb al-Ṭabaqāt al-Kubrá.* ed. 'A. M. 'Umar, 10 vols., al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī, 2001.

al-Zamakhsharī, Jār Allāh Maḥmud b. 'Umar (d. 538/1144). *al-Minhāj fī Uṣūl al-Dīn.* ed. and tr. S. Schmidtke, *A Mutazilite Creed of az-Zamakhshari (D. 538/1144)*, Stuttgart: Steiner, 1997.

C　二次資料

【CD-ROM】

Hadith Encyclopedia CD-ROM. ver. 2.1, Harf Information Technology, 2000.

【アラビア語文献】

'Abd al-Bāqī, M. *al-Mu'jam Mufahras li-Alfāẓ al-Qur'ān al-Karīm.* al-Qāhira, Dār al-Ḥadīth, 1996.

A'ūsht, B. *Dirāsāt Islāmiyya fī Uṣūl al-Ibāḍiyya.* al-Sīb: Maktaba al-Ḍāmirī lil-Nashr wa al-Tawzī', 2010.

Bendrissou, M. *al-Fikr al-'Aqdī 'inda al-Ibāḍiyya ḥattá Nihāya al-Qarn al-Thālith al-Hijrī.* al-Ghardāya: Jam'iyya al-Turāth, 2003.

Bū Larwāḥ, I. (ed.). *Mawsū'a Āthār al-Imām Jābir b. Zayd al-Fiqhiyya.* Masqaṭ: Maktaba Masqaṭ, 2006.

al-Bustānī, B. *Muḥīṭ al-Muḥīṭ*, Beirut: Librairie du Liban, 1987.

al-Ḥarīrī, 'A. *al-Murshid al-'Āmm lil-Wilāyāt wa al-Qabā'il fī Salṭana 'Umān.* Masqaṭ: Wizāra al-Dākhiliyya, 1982.

al-Ḥārithī, S. *al-'Uqūd al-Fiḍḍiyya fī Uṣūl al-Ibāḍiyya.* Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 1973.

al-Ja'bīrī, F. *al-Imām Abū Hamza al-Shārī: Ḥayāt min ajli al-Ḥaqq.* al-Sīb: Maktaba al-Ḍāmirī lil-Nashr wa al-Tawzī', 2009.

al-Jazā'irī, M. Ṣ., al-Shaybānī, S. M. *Mu'jam A'lām al-Ibāḍiyya min al-Qarn al-Awwal al-Hijrī ilá al-'Aṣr al-Ḥāḍir* 2 vols., Bayrūt: Dār al-Gharb al-Islāmī, 2006.

Khulayfāt, 'A. *Nash'a al-Ḥaraka al-Ibāḍiyya.* Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 2002.

Majmū'a min al-Bāḥithīn. *Mu'jam Muṣṭalaḥāt al-Ibāḍiyya.* 2 vols., Masqaṭ: Wizāra al-Awqāf wa al-Shu'ūn al-Dīniyya, 2008.

Mu'ammar, 'A. Y. *al-Ibāḍiyya: Madhhab Islāmī Mu'tadil.* Masqaṭ: Ṭabā'i' al-Nahḍa. 1979.

-----. *al-Ibāḍiyya bayna al-Firaq al-Islāmī 'inda Kitāb al-Maqālāt fī al-Qadīm wa al-Ḥadīth.* 2 vols., 3rd ed., Masqaṭ: Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, 2000.

Nāṣir, M. Ṣ. *Manhaj al-Da'wa 'inda al-Ibāḍiyya.* Masqaṭ: Maktaba al-Istiqāma, 2002.

al-Rāshidī, M. 'A. *al-Imām Abū 'Ubayda Muslim b. Abī Karīma al-Tamīmī wa Fiqhu-hu.* al-Manṣūra: Maṭābi' al-Wafā', 1993.

al-Sa'dī, F. *Mu'jam al-Fuqahā' wa al-Mutakallimīn al-Ibāḍiyya (Qism al-Mashriq) min al-Qarn al-Awwal al-Hijrī ilá Bidāya al-Qarn al-Khāmis 'Ashara al-Hijrī.* 4 vols. in 2, Masqaṭ: Maktaba al-Jīl al-Wā'id, 2007.

Ṭalibī 'A. (ed.) *Ārā' al-Khawārij al-Kalāmiyya: al-Mūjaz li Abī 'Ammār 'Abd al-Kāfī al-Ibāḍī.* 2 vols., al-Jazā'ir: al-Sharika al-Waṭaniyya lil-Nashr wa al-Tawzī', 1978.

al-Riyāmī, 'A. *Dalā'il al-I'tiqād 'inda Ahl al-Ḥaqq wa al-Istiqāma.* Nizwá: Maktaba Masjid al-Athla al-'Āmma, 2008.

al-Wuhaybī, M. *al-Fikr al-'Aqdī 'inda al-Ibāḍiyya ḥattá Nihāya al-Qarn al-Thānī al-Hijrī.* al-Sīb: Maktaba al-Ḍāmirī lil-Nashr wa al-Tawzī', 2006.

【欧文文献】

Allouche, I. S. "Deux épîtres de théologie abaḍite," *Hespéris* 12, 1936, pp. 57-88.

Amir-Moezzi, M. A. "Remarques sur les critères d'authenticité du hadith et l'autorité du jurist dans le shi'isme imamate," *Studia Islamica* 85, 1997, pp. 5-39.

-----. "Notes à propos de la *walāya* imamate (aspects de l'imomologie duodécimaine, X)," *The Journal of the American Oriental Society* 122, 2002, pp. 722-741.

Azami, M. M. *Studies in Hadīth Methodology and Literature.* Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, n.d. (First published in 1977 by American Trust Publications)

Bierschenk, T. “Religion and Political Structure: Remark on Ibadism in Oman and the Mzab (Algeria),” *Stvdia Islamica* 68, 1988, pp. 107-127.

Bekri, Ch. “Le kharijisme et Berbere,” *Annales de l’institut d’études orientales* 15, 1957, pp. 55-108.

Becker, H. *Systematic Sociology: on the Basis of the Beziehungslehre and Gebildelehre.* New York: John Wiley & Sons, 1932.

Bernand, “M. Le kitāb al-radd ‘alà l-bida‘ d’Abī Muṭī‘ Makhūl al-Nasafī,” *Annales Islamologiques* 16, 1980, 39-126.

Brünnow, R. E. *Die Charidschiten unter den ersten Omayyaden: ein Beitrag zur Geschichte des ersten islamischen Jahrhunderts.* Leiden: E. J. Brill, 1884.

Bulliet, R. *Conversion to Islam in the Medieval Period.* Cambridge and London: Harvard University Press, 1979.

Chiarelli, L. C. “The Ibāḍi Presence in Muslim Sicily,” *Bulletin of the Royal Institute for Inter-Faith Studies 7*, 2005, pp. 69-90.

Clarke, P. B. *The Oxford Handbook of the Sociology of Religion.* Oxford: Oxford University Press, 2009.

Cook, M. “The Origins of *Kalām*,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 43-1, 1980, pp. 32-43.

-----. *Early Muslim Dogma: A Source-critical Study.* Cambridge: Cambridge University Press, 1981a (paperback edition published in 2003).

-----. Activism and Quietism in Islam: The Case of the Early Murji’a. in: A. S. Cudsi and A. E. Dessouki (eds.), *Islam and Power*, London: Croom Helm, 1981b, pp. 15-23.

-----. Weber and Islamic Sects. in: T. E. Huff and W. Schluchner (eds.), *Max Weber and Islam*, New Brunswick and London: Transaction Publishers, 1999, pp. 273-279.

-----. *Commanding Right and Forbidding Wrong in Islamic Thought.* Cambridge: Cambridge University Press, 2000.

Crone, P. “Even an Ethiopian Slave: the Transformation of Sunnī Tradition,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 57, 1994, pp. 59-67.

-----. The Kharijites and the Caliphal Title. in: G. R. Hawting, J. A. Mojaddedi and A. Samely (eds.), *Studies in Islamic and Middle Eastern Texts and Traditions in Memory of*

Norman Calder, Oxford: Oxford University Press, 2000, pp. 85-91.

Crone, P. and F. W. Zimmermann (ed. and tr.). *The Epistle of Sālim ibn Dhakwān*. Oxford: Oxford University Press, 2001.

Cuperly, P. "Une profession de foi ibāḍite: La profession de foi d'Abū Zakariyyā' Yaḥyā ibn al-Ḥayr ibn Abī l-Ḥayr al-Ǧannāwunī," *Bulletin d'études orientales* 32-3, 1980, pp. 21-54.

-----. "Le *Kitâb Uṣûl al-dîn* de Tibġûrîn," *Stvdia Islamica* 56, 1982a, pp. 69-96.

-----. "La 'Aqīda d'Abī Sahl Yaḥyà," *Les Cahiers de Tunisie* 30 (121-122/III-IV), 1982b, pp. 41-94; *Les Cahiers de Tunisie* 31 (123-124/I-II), 1983, pp. 55-119.

-----. *Introduction à l'etude de l'Ibādisme et de sa théologie.* Algier: Office des Publications Universitaires, 1984.

Custers, M. H. *Ibāḍī Publishing Activities in the East and in the West c. 1880-1960s: An Attempt to an Inventory, with References to Related Recent Publications.* Maastricht, 2006.

-----. *al-Ibāḍiyya: A Bibliography.* 3 vols., Muscat: Ministry of Endowments & Religious Affairs, 2008.

Dabashi, H. *Authority in Islam: from the Rise of Muhammad to the Establishment of the Umayyads.* New Brunswick and London: Transaction Publishers, 1989.

Dakake, M. M. *The Charismatic Community: Shi'ite Identity in Early Islam.* New York: State University of New York Press, 2007.

EI_2 =The Encyclopaedia of Islam. New Edition, 11 vols., Leiden: E. J. Brill, 1960-2002.

Elder, E. E. "The Development of the Muslim Doctrine of Sins and Their Forgiveness," *The Moslem World* 29, 1939, pp. 178-188.

Ennami, A. "A Discription of New Ibadi Manuscripts from North Africa," *Journal of Semitic Studies* 15, 1974, pp. 63-87.

-----. *Studies in Ibadhism.* Muscat: Ministry of Endowments and Religious Affairs, 2008 (originally published as His PhD Thesis at the University of Cambridge in 1971).

van Ess, J. The Logical Structure of Islamic Theology. in: G. E. von Grunebaum (ed.), *Logic in Classical Islamic Culture.*Wiesbaden: Otto Harranssowitz, 1970, pp. 21-50.

-----. *Frühe muʿtazilitische Häresiographie: zwei Werke des Nāši' al-Akbar (gest. 293 H.).* Beirut: (in Kommission bei) F. Steiner Verlag (Wiesbaden), 1971.

-----. The Beginning of Islamic Theology. in: J. E. Murdoch and E. D. Sylla (eds.), *The Cultural Context of Medieval Learning* (Boston Studies in the Philosophy of Science 26), Dordrecht and Buston: D. Reidel Publishing Company, 1973.

-----. *Zwischen Ḥadīṯ und Theologie: Studien zum Entstehen prädestinatianischer Überlieferung.* Berlin, New York: Walter de Gruyter, 1975.

-----. "Untersuchungen zu einigen ibāḍitischen Handschriften," *Zeitschrift der Deutschen Morgendländischen Gesellschaft* 126, 1976, pp. 25-63.

-----. Early Development of Kalām. in: G. H. A. Juynboll (ed.), *Studies on the First Century of Islamic Society.* Carbondale: Southern Illinois University Press, 1982, pp.109-124.

-----. *Theologie und Gesellschaft im 2. und 3. Jahrhundert Hidschra.* 6 vols., Berlin, New York: Walter de Gruyter, 1992-1997.

Francesca, E. "The Formation and Early Development of the Ibāḍī Madhhab," *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 28, 2003, pp. 260-277.

-----. "Early Ibāḍī Jurisprudence: Sources and Case Law," *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 30, 2005, pp. 231-263.

Ferrante, J. *Sociology: a Global Perspective.* 6th ed., Belmont: Thomson Higher Education, 2006.

Gaiser, A. R. *Muslims, Scholars, Solidiers: The Origin and Elaboration of the Ibāḍī Imamate Traditions.* Oxford: Oxford University Press, 2010a.

-----. "The Ibāḍī "Stages of Religion" Re-examined: Tracing the History of the *Masālik al-Dīn*," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 73: 2, 2010b, pp. 207-222.

Ghazal, A. "Khārijism and Ibāḍism: The Quest for an Integrative Approach to Islamic History," *Bulletin of the Royal Institute for Inter-Faith Studies 7*, 2005, pp. 1-6.

-----. "Seeking Common Ground: Salafism and Islamic Reform in Modern Ibāḍī Thought," *Bulletin of the Royal Institute for Inter-Faith Studies 7*, 2005, pp. 119-142.

Glock, C. and R. Stark. *Christian Beliefs and Anti-Semitism.* New York: Harper & Row, 1966.

Goldziher, I. *Introduction to Islamic Theology and Law.* Translated by A. Hamory and R. Hamory, New Jersey: Princeton University Press (Originally published in German, *Vorlesungen Über den Islam*, 1910), 1981.

-----. "L'école supérieure des lettres et les médersas d'Alger," *Revue de l'histoire des religions* 52, 1905, 219-236.

Hallaq, W. *A History of Istamic Legal Theories: an Introduction to Sunnī uṣūl al-fiqh.* Cambridge: Cambridge University Press, 1997.

-----. "The Authenciticy of Prophetic Ḥadīth: A Pseudo-Problem," *Studia Islamica* 89, 1999, pp. 75-90.

Hervieu-Léger, D. "The Transmission and Formation of Socioreligious Identities in Mondernity: An Analytical Essay on the Trajectories of Identification," *International Sociology* 13 (2), 1998, 213-228.

-----. *Religion as a Chain of Memory.* Cambridge: Polity Press, 2000.

Hoffman, V. "The Articulation of Ibādī Identity in Modern Oman and Zanzibar," *The Muslim World* 94, 2004, pp. 201-216.

-----. "Ibādī Scholars and the Confrontation with Sunnī Islam in Nineteenth- and Early Twentieth-Century Zanzibar," *Bulletin of the Royal Institute for Inter-Faith Studies 7*, 2005, pp. 91-118.

-----. Historical Memory and Imagined Communities: Modern Ibāḍī Writings on Khārijism. in: J. E. Lindsay and J. Armajani (eds.), *Historical Dimensions of Islam: Pre-Modern and Modern Periods.* Princeton: The Darwin Press, 2009, pp. 185-199.

Ibn Ruzayq, Badjer, G. P. (tr.) *History of the imâms and Seyyids of 'Omân.* New York : Hakluyt Society, 1871.

Izutsu, T. *The Concept of Belief in Islamic Theology: A Semantic Analysis of Îmân and Islâm.* Tokyo: The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1965.

-----. *Ethico-Religious Concepts in the Qur'ān.* Montreal, Kingston, London and Ithaca: McGill-Queen's University Press (First published under the Title *The Structure of the Ethical Terms in the Koran*, 1959; 牧野 信也訳『意味の構造』東京: 新泉社, 1972), 2002.

Kafali, M. "The Rise of Khārijism According to Abū Sa'īd Muḥammad b. Sa'īd al-Azdī al-Qalhātī," *Bulletin of the Faculty of Arts* (the University of Egypt) 14, 1952, pp. 29-48.

Kanter, R. M. *Commitment and Community: Communes and Utopias in Sociological Perspectives.* Cambridge: Harvard University Press, 1973.

Kazi, A. "The Meaning of Islām and Īmān in the Qur'ān," *Islamic Studies* 5, 1966, pp. 227-237.

Kenney, J. T. *Muslim Rebels: Kharijites and the Politics of Extremism in Egypt.* Oxford: Oxford University Press, 2006.

al-Kharusi, K. *Āthār al-Rabī‘ al-Ḥabīb: Edition and Study.* Ph.D. dissertation, University of Oxford, 2003.

-----. An Overview of Ibāḍī *Tafsīr*. in: R. G. Hoyland and P. F. Kennedy (eds.), *Islamic Reflections Arabic Musing: Studies in Honour of Professor Alan Jones*. Oxford: Gibb Memorial Trust, 2004, pp. 268-278.

Khuri. F. *Imams and Emirs: State, Religion and Sects in Islam.* London: Saqi Books, 2006.

Klein, H. (ed.) *Kapitel XXXIII der anonymen arabischen Chronik Kašf al-Ġumma al-Ǧāmi‘ li-Aḫbār al-‘Umma.* Hamburg, 1938 (originally published as his PhD. Dissertation in Hanschschen Universität).

Knysh, A. ““Orthodoxy” and “Heresy” in Medieval Islam: An Essay in Reassessment,” *The Muslim World* 83, 1993, pp. 48-67.

Kohlberg, E. “Some Imāmī-Shī‘ī Views on Taqiyya,” *Journal of American Oriental Society* 95 (3), 1975, pp. 395-402.

-----. “Non-Imāmī Muslims in Imāmī *Fiqh*,” *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 6, 1985, pp. 99-105.

-----. “Barā’a in Shī‘ī Doctorine,” *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 7, 1986, pp. 139-175.

La Rosa, G. C. “Il transmettitori della dottrina ibāḍita,” *Annali dell’Istituto Universitario Orientale di Napoli* 5, 1953, pp. 123-139.

Lenski, G. *The Religious Factor: a Sociologist’s Inquiry.* New York: Anchor Books, 1963.

Lewicki, T. “Une chronique ibādite “Kitāb as-sijar” d’Abū’l-‘Abbās Aḥmad Aš-Šammāhī,” *Revue des études islamiques* 8, 1934, pp. 59-78.

-----. “De quelque textes intédits en vieux berbère: probenant d’une chronique ibāḍite anonyme,” *Revue des études islamiques* 10, 1936a, pp. 267-285.

-----. “Note sur la chronique Ibāḍite d'ad-Dargini,” *Rocznik Oryentalistyczny* 11, 1936b, pp. 146-172.

-----. “La répartition géographique des groupements Ibāḍites dans l’Afrique de Nord au moyen-âge,” *Rocznik Oryentalistyczny* 21, 1957, pp. 301-343.

------. “Les subdivisions de l’Ibāḍiyya,” *Stvdia Islamica* 9, 1958, pp. 73-82.

-----. “Les Ibāḍites dans l’arabe du sud au moyen âge,” *Folia Orientalia* 1, 1959, pp. 3-17.

-----. “Les histriens, biographes et traditionistes Ibāḍites wahbites de afrique du Nord du VIII au XVI siècles,” *Folia Orientalia* 3, 1961, pp. 1-134.

-----. “The Ibádite in Arabia and Africa: 1. The Ibádi Community at Basra and the Origins of the Ibádite States in Arabia and North Africa, Seventh to Ninth Centuries,” *Journal of World History* 8, 1971; pp. 51-81.

-----. “The Ibádite in Arabia and Africa: 2. The Ibádites in North Africa and the Sudan to the Fourteenth Century Community,” *Journal of World History* 8, 1971, pp. 83-130.

Lewinstein, K. “Making and Unmaking a Sect: The Heresiographers and the Ṣufriyya,” *Stvdia Islamica* 76, 1992, pp. 75-96.

Long, T. and J. Hadden. “Religious Conversion and the Concept of Socialization: Integrating the Brainwashing and Drift Models,” *Journal for the Scientific Study of Religion* 22 (1), 1983, pp. 1-14.

al-Maamiry, A. H. *Oman and Ibadhism.* New Delhi: Lancers Publishers, 1980.

Macdonald, D. B. *The Development of Muslim Theology, Jurisprudence and Constitutional Theory.* London: Darf Publishers Limited, 1985 (first published in 1902).

Madelung, W. “Early Sunni Doctorine Concerning Faith as Reflected in the *Kitāb al-Īmān* of Abū ‘Ubayd al-Qāsim B. Sāllam (D. 224/839),” *Stvdia Islamica* 32, 1970, pp. 233-254.

-----. The Origins of the Controversy Concerning the Creation of the Koran. in: J. M. Barral (ed.), *Orientalia Hispanica : sive studia F. M. Pareja octogenario dicata*, Leiden: E. J. Brill, 1974, pp. 504-525.

-----. The Shiite and Khārijite Contribution to Pre-Ash‘arite *Kalām*. in: P. Morewedge (ed.), *Islamic Philosophical Theology*, Albany: State University of New York Press, 1979, pp. 120-139.

-----. *Streitschrift des Zaiditenimams: wider die ibaditische Prädestinationslehre.* Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1985.

-----. *Religious Trends in Early Islamic Iran.* (Columbia Lectures on Iranian Studies No. 4) New York: Bibliotheca Persica, 1988.

-----. ‘Abd Allāh ibn Ibāḍ and the Origins of the Ibāḍiyya. in: B. Michalak-Pikulska and A. Pikulski(eds.) *Authority, Privacy and Public Order in Islam.* Leuven: Uitgeverij

Peeters en Departement Oosterse Studies, 2006, pp. 51-57.

-----. ‘Abd Allāh ibn Ibāḍ’s <Second Letter to ‘Abd al-Malik>. in: *Community, State, History and Changes: Festschrift for Ridwan Al-Sayyid on His Sixties Birthday.* Beirut: Arab Network for Research and Publishing, 2011, pp. 7-18.

Marcy, G. “Le dieu des abâḍites et des Barǧwâṭa,” *Hespéris* 12, 1936, pp. 33-56.

Masqueray, E. (tr.) *Chronique d’Abou Zakaria.* Alger: Imprimerie de l’association ouvière V. Aillaud et Cie, 1878.

Morand, M. *Les kanouns du Mzab.* Alger: Typographie Adolphe Jourdan, 1903.

Moreno, M. M. “Note di teologia ibāḍita,” *Annali dell’Istituto Universitario Orientale di Napoli* 3, 1949, pp. 299-313.

Motylinski, A. de C. *Notes historiques sur le Mzab: guerara depuis sa fondation.* Alger: Adolph Jourdan libraire, 1885a.

-----. *Bibliographie du Muzab: Les libres de la secte Abadhite* (extrait du *Buttelin des correspondence africaine* 3), Alger, 1885b.

-----. *Le Djebel Nefousa.* Paris: Ernst leroux, 1898.

-----. “L’‘Aqida des Abadhites,” *Recueil de mémoires et de textes: publié en l'honneur du XIVe Congrès des orientalistes,* 1905a, pp. 505-545.

----- (ed. and tr.) *Les imams rostemides de Tahert.* 1905b (Tunis: Publications de l’universite de Tunis, 1976).

Motzki, H. The Question of the Authenicity of Muslim Traditons Reconsidered: a Review Article. in: H. Berg (ed.), *Method and Theory in the Study of Islamic Origins*, Leiden and Boston: Brill, 2003, pp. 211-257.

Mourad, S. *Early Islam between Myth and History: Al-Ḥasan al-Baṣrī (D. 110 H/728 CE) and the Formation of His Legacy in Classical Islamic Scholarship.* Leiden and Boston: Brill, 2006.

Murata, S. and W Chittick. *The Vision of Islam*. London and New York: I. B. Tauris, 1994.

Nallino, C. “Rapporti fra la dogmatica mu’tazilita e quella degli ibāḍiti dell’africa settentrionale,” *Rivista degli Studi Orientali* 7, 1916, pp. 455-461.

Nelson, G. “The Concept of Cult,” *Sociological Review* 16 (3), 1968, pp. 351-362.

Pessagno, J. “The Murji’a, Īmān and Abu ‘Ubayd,” *Journal of American Oriental Society* 95, 1975,

pp. 382-394.

Prevost V. "'Abd al-Raḥmān ibn Rustum al-Fārisī: une tentative de biographie du premier imam de Tāhart," *Der Islam* 86, 2011, pp. 44-64.

-----. "De nouvelles données sur les origins de l'ibadisme et l'élaboration de la théorie de l'imamat," *Arabica* 59, 2012, pp. 134-144.

al-Qāḍī, W. Early Islamic State Letters: The Question of Authenticity. in: A. Cameron and L. Conrad (ed), *The Byzantine and Early Islamic Near East: I. Probrems in the Literary Source Material*, Princeton and New Jersey: The Darwin Press, 1992, pp. 215-275.

al-Rawas, I. *Oman in Early Islamic History.* Beyrut: ITHACA, 2000.

Rebstock, U. *Die Ibāḍiten im Maġrib (2./8. – 4./10. Jh.) : Die Geschichte einer Berberbewegung im Gewand des Islam*. Berlin: Kraus Schwarz Verlag, 1983.

Ringgren, H. "The Conception of Faith in the Koran," *Oriens* 4, 1951, pp. 1-20.

Roberts, K. A. *Religion in Sociological Perspective.* 4th ed., Belmont: Wadsworth, 2004.

Rosenthal, F. (tr.) *From the Creation to the Flood (the History of al-Ṭabarī).* New York: State University of New York: 1989.

Rubin, U. "Barā'a: a Study of Some Quranic Passages," *Jerusalem Studies of Arabic and Islam* 5, 1984, pp. 13-32.

Rubinacci, R. "Notazia di alcuni manoscritti ibāḍiti," *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 3, 1949, pp. 431-438.

-----. "Il'kitab al-Gawahir di al-Barradi," *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 4, 1952, pp. 95-110.

-----. "Il Califfo 'Abd al-Malik b. Marwān e gli Ibāḍti," *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 5, 1953, pp. 99-121.

-----. "La purita rituale secondo gli Ibāḍiti," *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 6, 1957, pp. 1-41.

-----. "La professione di fede di al-Gannāwunī," *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 14, 1962, pp. 552-592.

Sachau, E. "Über die religiösen Anschauungen der ibāḍitischen Muhammedaner in Oman und Ostafrica," *Mittheilingen des Seminars für Orientalische Sprachen* 2: 2, 1899, pp. 47-82.

Salem, E. A. *Political Theory and Institutions of the Khawārij.* Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1956.

al-Salimi, A. "Themes of the Ibāḍī/Omanī Siyar," *Journal of Semitic Studies* 54, 2009, pp. 475-514.

-----. "Identifying the (Ibāḍī/Omanī) Siyar," *Journal of Semitic Studies* 55, 2010, pp. 115-162.

al-Salimi, A. and W. Madelung (ed.). *Early Ibāḍī Literature: Abu l-Mundhir Bashīr b. Muḥammad b. Maḥbūb, Kitāb al-Raṣf fī l-Tawḥīd, Kitāb al-Muḥāraba and Sīra.* Wiesbaden: Harrassowitz, 2011.

Schacht, J. "Bibliothèque et manuscrits abadites," *Revue africaine* 100, 1956, pp. 375-398.

-----. *An Introduction to Islamic Law.* Oxford: Oxford University Press, 1982.

Schöck, C. *Adam im Islam: ein Beitag zur Ideengeschichte der Sunna.* Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 1993.

Schwartz, W. *Die Anfänge der Ibaditen in Nordafrika: Der Beitrag einer islamischen Minderheit zur Ausbreitung des Islams*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1983.

Shoemaker, S. "In Search of 'Urwa's Sīra: Some Methodological Issues in the Quest for "Authenticity" in the Life of Muḥammad," *Der Islam* 85, 2011, pp. 257-344.

Smith, G. R. "The Omani Manuscript Collection at Muscat: Part1: A General Description of the Mss," *Arabian Studies* 4, 1978, pp.161-190.

Smith, W. C. Faith as *Taṣdīq*. in P. Morewedge (ed.), *Islamic Philosophical Theology*, Albany: State University of New York Press, 1979, pp. 96-119.

Smogorzewski, Z. "Un poème abāḍite sur certaines divergences entre les Mālikites et les Abāḍites," *Rocznik Oryentalistyczny* 2, 1919, pp. 260-268.

-----. "Essai de bio-bibliographic ibadite-wahbite: Avant-propos," *Rocznik Oryentalistyczny* 5, 1928, pp. 45-57.

Starbuck, E. D. *The Psychology of Religion.* London: Walter Scott, 1899.

Stehly, R. "Un problème de théologie islamique: La définition des fautes graves (*Kabā'ir*)," *Revue des études islamiques* 67, 1977, pp. 165-181.

Strothmann, R. "Berber und Ibāḍiten," *Der Islam* 17, 1928, pp. 258-279.

Thomson, W. Khārijitism and Khārijite. in: *The Macdonald Presentation Volume*, New York: Books for Library Press, pp. 373-389.

Tritton, A. S. *Muslim Theology.* London: Lizac &Company LTD, 1947.

Vaglieri, L. V. "L'Imamato Ibāḍita dell'Oman," *Annali dell Istituto Universitario Orientale di Napoli* 3, 1949, pp. 245-282.

Waldman, M. "The Development of the Concept of *Kufr* in the Qur'ān," *Journal of the American Oriental Society* 88, 1968, pp. 442-455.

Wansbrough, J. *Quranic Studies: Sources and Method of Scriptual Interpretation.* Foreward, Translations, and Expanded Notes by A. Rippin, New York: Prometheus Books, 2003 (originally published in 1977).

Watt, W. M. "The Origin of the Islamic Doctrine of Acquisition," *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1943, pp. 234-247.

-----. *Free Will and Predestination in Early Islam.* London: Luzac, 1948.

-----. "The Conception of the Charismatic Community," *Numen* 7, pp. 77-90, 1960.

-----. "Khārijite Thought in the Umayyad Period," *Der Islam* 36, 1961, pp. 215-231.

-----. "Conditions of Membership of the Islamic Community," *Stvdia Islamica* 21, 1964, pp. 5-12.

-----. "The Conception of īmān in Islamic Theology," *Der Islam* 43, 1967, pp. 1-10.

-----. The Significance of Khārijism under the 'Abbāsids. in: *Recherches d'islamologie*, Louvain: Peeters, 1977, pp. 381-387.

-----. *The Formative Period of Islamic Thought.* Oxford: Oneworld Publication, 1998 (originally published by Oxford University Press in 1973).

Weber, M. *Economy and Society: an Outline of Interpretive Sociology.* Los Angeles, University of California Press, 1978 (M. ウェーバー, 世良 晃志 (訳) 『支配の諸類型』東京：創文社, 1970).

Wellhausen, J. *Die religios politischen Oppositionsparteien im alten Islam.* Berlin : Weidmansche Buchhandlung, 1901.

Wensinck, A. J. *The Muslim Creed: Its Genesis and Historical Development.* New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation, 1979 (originally published in 1932).

Williams, J. A. (tr.) *The Abbasid Revolution (the History of al-Ṭabarī).* New York: State University of New York, 1985.

Wilkinson, J. C. "The Juranda of Oman," *Journal of Oman Studies* 1, 1975, pp. 97-108.

-----. "The Ibāḍī *Imāma*," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 39 (3), 1976a, pp.

535-551.

-----. “Bio-bibliographical Background to the Crisis Period in the Ibāḍī Imamate of Oman (End of 9th to End of 14th Century),” *Arabian Studies* 3, 1976b, pp. 137-188.

-----. “The Omani Manuscript Collection at Muscat: Part 2 The Early Ibadi *Fiqh* Works,” *Arabian Studies* 4, 1978. pp. 191-208.

-----. The Early Development of the Ibāḍī Movement in Basra.in G. H. A. Juynboll (ed.), *Studies on the First Century of Islamic Society*, Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1982, pp. 125-144.

-----. “Ibāḍī Ḥadīth: an Essay on Normalization,” *Der Islam* 63, 1985, pp. 231-259.

-----. *The Imamate Tradition of Oman.* Cambridge: Cambridge University Press, 1987.

-----. The Omani and Ibāḍī Background to the Kilwah Sīrah: the Demise of Oman as a Political and Religious Force in the Indian Ocean in the 6th/12th Century. in A. K. Irvine, R.B. Serjeant and G. Rex Smith (eds.), *A Miscellany of Middle Eastern Articles in Memoriam Thomas Muir Johnstone 1924-83*, Essex: Longman, 1988, pp. 131-148.

-----. *Ibāḍism: Origins and Early Development in Oman.* Oxford: Oxford University Press, 2010.

Wilson, B. “An Analysis of Sect Development,” *American Sociological Review* 24 (1), 1959, pp. 3-15.

Wright, W. *Arabic Grammar.* 2 vols. in 1, New York: Dover Publications, 2005 (originally published in 1896-1898).

Yanagihashi, H. (ed.) *The Concept of Territory in Islamic Law and Thought.* New York: Routledge, 2009.

Yinger, M. *The Scientific Study of Religion.* London: Macmillan Campany, 1970.

【邦文文献】

愛宕 あもり　「イスラム訴訟手続きにおける証人資格審査の起源について」『四天王寺国際仏教大学紀要』44, 2007, pp. 29-38.

赤池 憲昭　「教団としての宗教―教団類型論を中心として―」井門富二夫（編）『講座宗教学 3　秩序への挑戦』東京：東京大学出版会, 1977, pp. 159-229.

池田 清彦　『分類という思想』東京：新潮社, 1992.

ウィルソン, B. 池田 昭（訳）『宗教セクト』東京：恒星社厚生閣, 1991 (B. Willson, *Religious*

Sect: a Sociological Study, London: Weidenfeld & Nicolson, 1970).

ウィルソン, B. 中野 毅・栗原 淑江（訳） 『宗教の社会学—東洋と西洋を比較して』東京：法政大学出版会, 2002 (B. Wilson, *Religion in Sociological Perspective*, Oxford and New York: Oxford University Press, 1982).

ヴィレーム, J. 林 伸一郎（訳） 『宗教社会学入門』（文庫クセジュ）東京：白水社, 2007.

ヴェーバー, M. 大塚 久雄, 生松敬三（訳） 『宗教社会学論選』東京：みすず書房, 1972.

宇都宮 輝夫 『宗教の見方—人はなぜ信じるのか』東京：勁草書房, 2012.

大川 真由子 『帰還移民の人類学—アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』東京：明石書店, 2010.

大塚 和夫（他編） 『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店, 2002.

奥田 敦 『イスラームの人権—法における神と人』東京：慶応義塾大学出版会, 2005.

奥野 克己 「オマーンのファラジ（カナート）：J. C. Wilkinson (1977) の研究を中心に」『インド考古研究』17, 1995, pp. 44-48.

小田 淑子 「イスラームにおける罪悪観」谷口 茂（編）『宗教における罪悪の諸問題』東京：山本書店, 1991, pp. 191-222.

----- 「シャリーアの救済論的意味」『宗教哲学研究』8, 1991, pp. 36-51.

----- 「宗教における倫理と法」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』5, 1992, pp. 1-22.

オディ, T. 宗像 巌（訳） 『宗教社会学』（現代社会学入門 5）東京：至誠堂, 1968 (T. O'Dea, *The Sociology of Religion.* New Jersey: Prentice-Hall, 1966).

柏原 良英 「クルアーンにおける死生観と罪の概念」『シャリーア研究』6, 2009, pp. 117-132.

鎌田 繁 「イスラームにおける契約」竹下政孝（編）『イスラームの思考回路』（講座イスラーム世界 4）東京：栄光教育文化研究所, 1995, pp. 145-174.

菊地 達也 『イスマーイール派の神話と哲学：イスラーム少数派の思想史的研究』東京：岩波書店, 2005.

----- 『イスラーム教—「異端」と「正統」の思想史』東京：講談社, 2009.

クレメンツ, R. E. 村岡 崇光（訳） 『近代旧約聖書研究史—ヴェルハウゼンから現代まで』東京：教文館, 1978.

黒田 壽郎 『イスラームの反体制—ハワーリジュ派の世界観』東京：未来社, 1991.

小口 偉一・堀 一郎（監修） 『宗教学辞典』東京：東京大学出版会, 1973.

小杉 泰　「イスラーム世界における文理融合論」『イスラーム地域研究』1 (2), 2007, pp. 123-147.

近藤 洋平　「信仰者と不信仰者—マートゥリーディー学派における人類の二分化の理解」『オリエント』50 (2), 2007, pp. 236-251.

----- 「オマーン議会の動向—制度の現状と第 6 期（2007-2011）の活動を中心に」『中東研究』510, 2011a, pp. 101-111.

----- 「東方イバード派における人間の宗教的分類と忘恩・偽信概念の展開」『宗教研究』368, 2011, pp. 51-74.

坂本 賢三　『「分ける」こと「わかる」こと』（講談社学術文庫）東京：講談社, 2006.

澤井 義則　「コーランにおける罪の概念について—“dhanb”の用例を中心として」『天理大学学報』163, 1990, pp. 181-193.

塩尻 和子　「アブドゥル・ジャッバールの人間論—原子論的存在論における自己同一性」『オリエント』33 (1), 1990, pp. 30-44.

----- 『イスラームの倫理—アブドゥル・ジャッバール研究』東京：未来社, 2002.

スタインバーグ, M. 山岡 万里子（訳）, 手島 勲矢（監）　『ユダヤ教の考え方—その宗教観と世界観』東京：ミルトス, 1998.

関根 正雄　『古代イスラエルの思想—旧約の預言者たち』（講談社学術文庫）東京：講談社, 2004.

ターナー, B. S. 樋口 辰雄・香西 純一・筑紫 建彦（訳）　『ウェーバーとイスラーム』東京：第三書館 1994 (B. S. Turner, *Weber and Islam: a Critical Study*, London and Boston; Routledge, 1974).

デュルケム, E., モース, M. 山内 貴美夫（訳）　『人類と論理—分類の原初的諸形態』東京：せりか書房, 1969.

並木 浩一・荒井 章三（編）　『旧約聖書を学ぶ人のために』京都：世界思想社, 2012.

ニーダム, R. 吉田 禎吾・白川 琢磨（訳）　『象徴的分類』東京：みすず書房, 1993.

ニーバー, R. 柴田 史子（訳）　『アメリカ型キリスト教の社会的起源』東京：ヨルダン社, 1984 (R. Niebuhr, *The Social Sources of Denominationalism*, New York, Meridian Books, 1957).

日本聖書協会（訳）　『新共同訳　聖書』東京：日本聖書協会, 2006.

バーガー, P. 薗田 稔（訳）　『聖なる天蓋—神聖社会の社会学』東京：新曜社, 1979.

花田 宇秋　「イスラームの少数派とジャマーアの成立」佐藤 次高（編）『イスラーム世界の発展』（岩波講座世界歴史 10）東京：岩波書店, 1999, pp. 201-222.

福田 安志　「イマームとサイイド」『オリエント』32-2, 1989, pp. 117-129.

ブハーリー, M. 牧野 信也（訳）　『ハディース：イスラーム伝承集成』中公文庫, 6 vols., 東京：中央公論新社, 2001.

フロム, E. 飯坂 良明（訳）　『ユダヤ教の人間観—旧約聖書を読む』東京：河出書房新社, 1980.

ベッカー, H. S. 村上 直之（訳）　『アウトサイダーズ：ラベリング理論とは何か』東京：新泉社, 1978 (H. Becker, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, New York: The Free Press, 1966).

ベル, R. 医王 秀行（訳）　『コーラン入門』東京：ちくま学芸文庫, 2003.

マクガイア, M. B. 山中 弘・伊藤 雅之・岡本 亮輔（訳）　『宗教社会学—宗教と社会のダイナミックス』東京：明石書店, 2008 (originally published by M. McGuire, *Religion: the Social Context*, Long Grove: Waveland Press, 2002).

マクグラス, A. 神代真砂実（訳）　『キリスト教神学入門』東京：教文館, 2002.

松尾 昌樹　「ヤアーリバ朝成立期におけるオマーンの支配とイマーム—部族間の協力・敵対関係とイマーム支配の確立過程」『イスラム世界』56, 2001, pp. 19-38.

松本 耿郎　『イスラーム政治神学—ワラーヤとウィラーヤ』東京：未来社, 1993.

三田 了一（訳）『日亜対訳・注解　聖クルアーン』東京：宗教法人日本ムスリム協会, 1982.

ムスリム・ビン・アル・ハッジャージュ, 磯崎 定基, 飯森 嘉助, 小笠原 良司（訳）　『日訳サヒーフ・ムスリム』3 vols., 東京：日本サウディアラビア協会, 1987-1989.

柳橋 博之　『イスラーム財産法の成立と変容』東京：創文社, 1998.

-----　「巡礼の履行不能をめぐるハディースと法学説について」『イスラム世界』78, 2012, pp. 1-33.

ロビンソン, H. W. 鈴木 衛司（訳）　『旧約聖書における集団と個』東京：教文館, 1972.

ワイルズ, M. 三小田 敏雄（訳）『キリスト教教理の形成』東京：日本基督教団出版局, 1983 (M. Wiles, *The Making of Christian Doctrine: a Study in the Principles of Early Doctrinal Development*, London: Cambridge University Press, 1967).

論文の内容の要旨

イバード派イスラーム思想における共同体論の研究

近 藤 洋 平

イスラーム共同体におけるイバード派共同体の出現とその展開は，イスラーム史においてユニークかつ極めて興味深い出来事である。この宗教集団は，教義や歴史解釈において，スンナ派やシーア派のそれにも匹敵する，高度に体系化された思想を有する。そしてイバード派が伝える諸作品は，イスラームの思想と社会の実態を，二大宗派であるスンナ派やシーア派とは異なる視座から考察することを可能にする。イスラームの宗教思想に豊かさを与えるイバード派を取り上げることは，イスラーム世界における少数派の実態を解明するための有意義な方法であり，またその研究は，イスラーム思想史研究の蓄積と発展に貢献するものとなる。

本研究は，前近代イスラーム世界におけるイバード派共同体の特質を，同派の共同体論の考察を通じて究明することを第一の目的とし，その作業においては，主として 2/8 世紀から 6/12 世紀の期間にバスラからオマーンにかけて活動したイバード派の学者たちの見解を取り上げた。本研究は 10 章の本論と 2 章の補論から構成される。本論第 1 章では，イバード派の先行研究を概観した。続く第 2 章では、宗教社会学の分野における研究蓄積を利用して，本研究の課題として（1）共同体論の理論と実践を支えるワラーヤとバラーアおよび関係諸概念の究明，（2）自己理解，他者理解をはじめとするイバード派の世界観の究

明，（3）改宗と入信の規定など，メンバーシップに関する問題の究明，（4）共同体へのコミットメントのあり方など，集団内外のつながりに関する問題の究明，（5）集団内で生じる逸脱への対応という問題の究明，そして（6）共同体内で形成されるヒエラルキーの究明という 6 つを提示した。そして第 3 章ではイバード派の共同体論における鍵概念であるワラーヤ（関わりを持つこと）とバラーア（関わりを絶つこと）について，その語義，またクルアーンおよびハディースにおける用例を確認した。そして同章では，預言者ムハンマドの存命時代から，イスラーム共同体構成員はワラーヤを保持する者と保持しない者に分類され，またワラーヤを認める，認めないという実践が行われており，後代のイバード派の学者も当時の状況をそのように理解していたことなどを確認した。

これらを踏まえ、4 章から 9 章では、イバード派の共同体論を具体的に分析した。第 4 章では、主として 2/8 世紀から 4/10 世紀までの期間における（プロト・）イバード派によるワラーヤとバラーア，そして判断停止を意味するウクーフの理論と実践の展開を考察した。そして 1-2/8 世紀のプロト・イバード派では，人間の状態を定める原理としてこの三原則を採用し，そこから様々な規則を導き出していたこと，それはオマーンのイバード派にも受け継がれたこと, ワラーヤ, バラーアそしてウクーフの実践に関する彼らの態度は，できる限り人間をワラーヤとバラーアの二元論的世界に位置づけようとするものであり，ウクーフはその二元論的世界を支えるものとして利用されたことなどを明らかにした。

第 5 章では､イバード派の共同体論を支える同派の世界論に目を向けた｡分析を通じて，イバード派は何千年もの後の時代に生きる「ある個人」をもその対象とする，包括的な性格を帯びた救済論を有していること，また人類の宗教的分類に関して，イバード派の学者たちは，一神崇拝と多神崇拝，信仰と不信仰というクルアーンの世界観を支える 2 つの二元論を，イスラーム中心主義とイバード派中心主義という主観的な優と劣の価値観でとらえ，自派が世界において最優位に位置づけられるような分類方法を利用していること，さらに彼らは，世界の諸宗教集団を，階層構造を利用して分類し，その階層においてイバード派のみを最上位に位置づけ，自派を唯一の「聖なる性質を帯びた特別な共同体」と理解していたことを明らかにした。

第 6 章では、第 5 章で明らかにしたイバード派における人間の宗教的分類を，同派の自己理解および他者理解という観点から分析した。このうち自己理解について，イバード派が理解する神のワラーヤとは，第一に信仰に基づく神と人間との肯定的，個別的な関係であることを確認するとともに，同派は神のワラーヤを維持するための信仰が行為と言葉か

ら構成される理由を，イスラームの契約から説明し，自集団を，神が預言者ムハンマドを通じて全人類と取り交わしたイスラームの契約を正しく履行する集団として理解していたこと，また構成員は「消極的信仰」あるいは中途半端な信仰ではなく，全身全霊をもって神に仕える「積極的信仰」が求められていたことを明らかにした。さらにイバード派では，ナフラワーンやヌハイラという「場所」に自らのアイデンティティを求めつつ，圧政者に対して立ち上がるという先人の一連の「行為」をも，自分たちのアイデンティティを支えるものとして理解され，さらに同じ「自己」であったハワーリジュ派諸派を否定的にひとまとめにし，自己と区別することで，正しい集団が自派のみであることを維持していたことを明らかにした。

第 7 章では、イバード派共同体の運営上の特徴を、入信と改宗活動、および共同体へのコミットメントという観点から分析した。そしてイバード派の思想では，イスラームの要約を告白した者にはすべて，理論上はイバード派のワラーヤが与えられると考えられていたこと，3/9 世紀には，イバード派共同体への加入の認定についてワラーヤの概念とともに様々な議論がされていたこと，より後代には，非イバード派の圏域でイスラームに入信した者のワラーヤの認定には，イスラームの要約以上の知識や行動が追加の判断材料として定められたこと，それによりイバード派は，現世における各宗派の構成員の「固定化」，あるいは個人の各宗派への帰属の決定の過程を理解，説明していたことを明らかにした。また改宗に携わるイバード派の宣教者は，対象者が多神教徒の場合には，教義に関する知識の教授よりも，入信後の正しい行いの習得の教育に重点を置き，一方対象者が他宗派に属する者である場合には，イバード派の教えがどのようなものであるかを説明することに力点を置いていたことを明らかにした。

そして共同体へのコミットメントについて，イバード派の学者たちは，構成員たちが自集団へのコミットメントと他集団へのコミットメントという「二重のコミットメント」を持つことを認めず，また構成員がそれに向かわないように彼らを誘導していたこと，同時に構成員に「組織へのコミットメント」「倫理的コミットメント」とともに，共同体構成員への「愛着のコミットメント」を持たせ，彼らにイバード派としての結びつきを自覚させ，彼らを共同体内での更なる相互扶助へと促していたことなど，同派における構成員のイバード派共同体へのコミットメント増進のしくみを明らかにした。

続く第 8 章では、イバード派共同体内で生じる逸脱への対応の問題を取り上げた。そしてイバード派の学者たちは，罪に対して厳しい態度を示し，また無条件で赦される罪はな

いという原則を定めたこと，時代を下っても有効であるような大罪の定義を提示するとともに, その大罪を具体的に細かく列挙した一方, ハッド刑の執行が付随するもののような，真にそれが必要であるとする大罪以外にはバラーアの宣告を好まず，そしてその場合であっても，相手が悔悟していることが明白である場合にはバラーアの宣告はせず，またそれ以外の場合にも小罪における対応のように，バラーアの宣告の前に悔悟を求めることなどを通じて，バラーアの宣告を慎重に行い，またバラーアの宣告をできるだけ回避しようとしていたことを明らかにした。

そして第 9 章では，イバード派における統治体制を，階層の形成そしてイマーム論から読み解いた。同章では，イバード派の学者たちは，信仰者たちの間には，明確な区別や序列があると理解し，一般信徒はこの宗教知において上位の立場にある学者に従うことが求められていたことを明らかにした。そしてイバード派には，一般信徒が学者たちに従う一方，学者たちは一般信徒が信仰者の地位にとどまるように助けるという関係が形成されていることを明らかにした。また学者たちが選ぶ指導者すなわちイマームについて，イバード派ではイマームは神，神の使徒ムハンマドに続く指導者の序列に位置づけられたこと，イマームには，シャリーアに従った共同体の運営，共同体運営のための施政能力が最低条件として求められていることなどを確認した。

そして第 4 章から第 9 章で明らかにしたことをまとめ、第 10 章では，本研究が対象とした時代のイバード派共同体は, 宗教的個別主義に基づいた排他的性格を有する集団であり，自派を「聖なる共同体」とみなす一方, 人間は罪を犯す存在であるということを受け入れ，高度に倫理的な「聖者たちの共同体」とは一線を画し, 構成員間の緊張関係をより緩めた，より普遍的で現実的な共同体の形成を志向した集団であると結論付けた。また同共同体はカリスマ的指導者によって導かれるという意味での「カリスマ的共同体」ではなく，さらにイバード派共同体構成員には，共同体に属することで神に導かれるという非日常で受動的な態度よりも，信仰の実践を通じて神とその個人との間のワラーヤを維持するという，現実的で能動的な態度が求められていたため，同派において共同体に属する者に救済を授けるというカリスマを伴う，神によって創設された少数の構成員からなる「カリスマ的共同体」という理解は二次的なものであったと結論付けた。

また補論 A にてイバード派の学統, 補論 B にて本研究で用いたイバード派の資料を解説した。